郎を野州と呼ぶの類にて、當時廣く行はれたるとなり。

●下心の悪い　心得のわるい、又悟りのわるいといふの意。「萬屋助六心中」道行の文句に、「正五九月も月々も、うぶすなどの、縁日と御酒奉り年毎の、神事といへば大切に、在所にいやんす母様の、祝ひ清めて念頃に、わしも廓の内ながら、心ばかりの手向をば、どう受けさんした事じややら、下心のわるい神さまや云々」。こゝの本文は、此の「助六心中」の文句を燒直したるが如し。

●南の茶屋　島の内の遊女屋のこと。

●結構者　お人よしといふに同じ。

●ほつく　毀つ又解くの意。糸をほつくなど。

●身代は木賊色　身代を木賊で卸すやうに減らすといふこと。木賊色は萌黄に少し黒みのある色。

●酒漬に水もつくかや　酒漬は酒びたり、水もつくかやは、精氣の盡るをいふ。

●師走　十二月の異稱。

●そうぶつ物　奉公人や出入の者に遣す仕着せものゝこと。

方とは紺屋の手間取、何事もさらりつと淺黄にいふて居よいやい、オヽ喜兵衛の言やる事なれど、我身は元を知るまいが、ちたい旦那の下染はの、重ね井筒屋といふ南の茶屋の弟で、地是へは入婿、乳呑子紋を持ながら、人の見る茶も構ふにこそ、お内儀は結構者、柳煤竹にやつてじやが、隱居の親父が來ると、家内はしみ郡山染になるはいの、彼の樣にほついては、やんがて身代は木賊色で、おろす樣になつてのけふと笑ひける、地〳〵酒漬に水もつくかや我宿へ、歸り紺屋の德兵衛、忙しげに立歸り、詞これ庄助喜兵衛、埒が明ぬの〳〵、これにまだかゝつてるか、何時じやと思ふ今日は師走の十五日、中の島のそうぶつ物も昨日限の約束、谷町

●兄貴　「女中道知邊」（正德二年板）に伯父をおぢ貴といひ、叔母をおば貴といひ、兄をあに貴といふ貴は君なり。これをあがめたる詞なり。「源氏物語」にもなれき、あてきなどいへり。昔しの和語なりと。

●水も呑れぬ　生計の立ゆかぬを形容したる語。農家の小作人は自ら米麥を取りながら或は賣り或は年貢に取立られて餘す所少なく、碌々米麥を食すると能はざるよりかゝる境遇を水呑百姓といふ。水も呑れぬはこれより出たる詞なり。

の蒲團も未だ持て往くまいな、兄貴から誂への、重ね井筒の暖簾も地遲いといふて腹立じや、女房共は何處へ往た、エヽ、どんげな、一言おれが言はねば最ふそれほど間が明く、いひつけも見廻しも、口は一ツ目は二ツ、これでは水も飲れぬと、フシいふた處は見事なり、地下人共はいつもの事、詞お内儀樣は鎗屋町の姉樣へ、鳥渡往て來ふ程に、お前に問ふて蒲團地も持て往けとの事といへば、地そんなら喜兵衛持て往きや、庄助は提灯持て女房共を迎ひに往け、それ坊主めに怪我さすな、負ふて歸れといひつくれば、あい〳〵いふもそこ〳〵ながら、フシ皆々表に出にける、地亭主も辻まで行かと見えしが、三十許の女房と、何やら咡き咳きて、

●おゐ様顔　女房氣取といふに同じ。

●顔見世　昔しは毎年十一月興行に役者の顔揃をなし、一年中の座組を定め、新番附を發表す、これを顔見せ狂言といふ。

●札買やろ錢　札は木戸札。買やろは買ひなさるの畧。

●よそ〳〵　餘所ゆきなどいふに同じ。取つて置きのこと。

チクリ連立ち〳〵内に入りければ、地女は亭主と坐を組て、おゐ様顔して居たりける、年季の三太すツきりと合點せず、じろじろ視るを德兵衞、これ三太此處へ來い、突と寄れと膝元に呼付け、詞此奴はずんど利口者で言ふなといふ事いはぬ奴、地それで人が可愛がる近付になるしに、何ぞ遣てたもといへば、彼の女さうやらして目元が悧發に見えまする、なんと顔見世見やつたか、札買やる錢遣ふか、但し何ぞ餘の物がフシ欲いかいのといひければ、詞いへ〳〵わしら芝居が見たけりや、六軒町の兄御樣から何程往ふと儘じや、私や銀が欲いといふ、ム、銀持て何買やる、アノ銀貰ふてか、銀貰ふてから其銀で、よそ〳〵のお山が一ツ地買ふ

●いろは茶屋　元祿の頃道頓堀繁昌につれ、芝居見物人などの休憩すべき所なきを憂ひ、同十三年立慶町役高二十八役、吉左衞門町役高二十都合四十八役に對し、一役水茶屋一軒づゝ建設を許可せられたるより、道頓堀の濱側に板圍をなし、内に床几を構へ茶屋を出す。其の數四十八軒あるより世俗いろは茶屋と呼べりしと「南水漫遊」に見えたり。

●うげんだて　前にお山のことありて道頓堀いろは茶屋などいへればうげんだは女形俳優の名にや但し當時大阪に山下右源太の外同名の女形なしなほ考ふべし。

●豆板　小玉の銀、粒銀又は豆銀ともいふ。目方にて使用す。

●はづむ　勢に乘じ金など與ふるをいふ。「色道大鑑」に、蹴鞠より出たる詞にして、言語、配によらず體利口めきて氣味よき形なりと。

て見度いと遣らるゝじやフシと身を縮む、詞これは出來いた、やすい事〳〵、して誰ぞ惚たのがあるかサア言へ〳〵、と問ひかけられて恥しがり、私が惚たのはいろはの中にあるといふ、ヤアそんならいろは茶屋か、イエ〳〵太左衞門橋筋に、何んじや太左衞門橋にいろはとは、ちりぬるをわか、よたれそ地つねなと吟じ返せばそれ〳〵、其次のらむフシうげんだとぞ答へける、地これは上物上目利、と豆板一粒はつとはづみ、詞ヤイ今此處へ銀持て來る人がある、此女衆をお内儀樣かと言はふ程に、必ずいゝやと言ふなへ、さて此事を女共にも朋輩にも、微塵も言ふ事ならぬぞ合點かといひければ、三太郎首肯き、勿體なや〳〵地言ふ事では

●年はいなる仁體の顔付をいふ。　尤らしき親父

●屋財家財　別に區別を立たるにはあらず、或は屋財といひ或は家財といふより、疊みかけていひたるなり。

●三貫目や五十兩　三貫目は銀目にて、五十兩は金目なり。當時徳

ござりませぬ、若も重ねて言度い心が出來た時々に、お前へ密と斷りませう程に、又銀を下さりませと、阿呆な顔でも損をせぬ、フシ遣る粋よりは粋ならん、地時に表に賴みましよ、紺屋の徳兵衞殿は此方かと、年ばいなる仁體なり、ヤア治右衞門樣かお入りなされ、御免といひて通りける、詞あれ女房共内々の治右衞門樣、そなたの判なら銀貸さうと仰やる、地お目に掛つて置やといへば、言合せてや彼の女、これはまあ〳〵御懇親な、尤も家も商賣も私の物とは申しながら、子なかなした中なれば、最う今では屋財家財、皆主の物でござりまする、斯うお目にかゝる上からは、私が請合、ふかしい事こそ此家屋敷相應に、三貫目や五十兩

れ銀六十匁を以て金壹兩に替たれば斯くいへり。

●丁銀　慶長六年に鑄造するなまこ形の銀貨にして、大黒の像、常是等の極印あり。元祿寶永正徳年中亦改鑄せらる。

●お辰　徳兵衞が女房の名。

は貸てやつて下さいやせと、褄々合せる辯舌に、口入れ喰ふた顔相にて、詞ア、〳〵これには及ばぬ事ながら、徳兵衞殿は入縁と聞く、斯う致せば後の爲、地又も用を聞かふ爲、サア判をなされよと、手形を出せば徳兵衞、掛硯引寄せこれそなたの判、さらば先づ私とチクリ互に〳〵印判フシ明白なり、地丁銀四百目包の通り吟味なされと受取渡し、最う暮まするお暇申そ、詞些とお盃いたしましよ、地重ねて〳〵預けます、フシさらばといひてぞ歸りける、地ざつと濟んだ目出度しと銀懷に押入れ、詞これ三太、此女衆を送つて、鳥渡往て來る程に門もしめて火も點せ、地其中お辰が戻つたら湯屋へ往たと瞞して置け、必ず何にも吐すなと、口を

●紺屋糊　紺屋にて染物用に用ゆるもの。せしめうるしに紺屋糊など粘着力の強きに譬ふ。

●宵寢まどひ　宵まどひといふに同じ。宵より眠たがるをいふ。

●法界の男　氣まぐれ者の意なるべし。

とめたる紺屋糊、フシ徳様早ふと出にけり、所帶持ても色はなほ、捨ぬぞ道理紺屋の妻、月も冴え行く夜嵐に、あゝ提灯もよいはいの、宵寢まどひの小市郎、竹が脊中にふら〳〵と、寢風ひかすな大事の子、フシ萬年町に歸りしが、地問ひもせぬに三太郎、旦那様は只た今湯屋へといへば、チ、〳〵どうで湯か茶か呑にであろ、法界の男じやと思へば濟むと恨みながら、小市郎が目覺すを、暖簾の奥の小座敷に、チクリやう〳〵賺し寢入らせて、フシ我も着物着かえんと、押入明ればこりや何じや、掛硯明廣げ、夫婦の印判取散らせり、これは〳〵と言はんとせしが、あたりを見廻し押沈め、詞こりや三太郎、其方に大事の物遣らふ、火を點して奥へ

●鋸商ひ　鋸は押すと引くとに利用さるゝより、三太郎が兩方に口を叩いて金を取るに譬へたり。

來いと、いふより早くあい〳〵、地さらばしこだめ參らふと、小行燈提げ入る有樣、下女手間取は見送りて、内儀樣と旦那の中、彼方へさゝえ此方へ言ひ、兩方で物を摑み居る、彼奴は鋸商ひと、鋸屑の言ひ甲斐なき、フシ猜みも下のやくぞかし、地此家の隱居吉文字屋のそうとく、代々傳はる紺屋の形と、共に兀たる頭を剃し、額に絶えし古毛拔、喰兼ぬ世も算用づく、此家屋敷家職をば、妹娘に鎗屋町、姉にかゝりて隱居分、薪の始末燈心を、日暮て一人によつと來る、内の者共あれお辰樣、鎗屋町の隱居樣のお出といふ聲におうといふて立出る、そうとく尖り聲にて、詞入婿殿は何處へぞ、節季師走内を明て出るとても出すものが、

●二人目の聟　お辰は曾て夫を迎へしことあり、德兵衛は即ち二人目の聟なり。

●不興　機嫌のわるきこと。

これ二人目の聟じやぞや、彼の孫の小市郎に父親三人持たしやんなと、地いふ顏の不興なれば、優しくも女房は、夫の惡性押包み、詞何んの餘所へ往やりまし、よ、方々のそうぶつ物、內外の者の手は足らず、今朝早々から仕事して、風引いて頭痛するとて奧に寢て居られます、お前は何しにお出といへば、いやコレたゞは來ぬ、詞只た今そなたが歸つた其跡へ、堀江の口入れ治右衞門といふものじや、こなたの娘御婿殿兩判で銀四百目貸ました、若い人の事なれば、後日の念に鳥渡知らせて置ます、と言ひ置て歸られた、聞くとおれは眼がまふて、一服の藥を呑さいて來た、地四百目といふ銀を、何にするとて借たぞ、喰込だか、へこんだ

●目がまふ　喫驚りして目がまふと大袈裟にいふ。

●おとましや　疎ましやに同じ。

●鹽の長次郎　「遥魂紙料」に曰く「鹽屋長次郎は放家師にて、太刀かたなは更なり、牛馬をさへ呑む眼くらましに長たり。難波にて大に流行り元祿の頃江戸に下れり、或は道頓堀鹽屋九郎右衞門座のかぶき者といひ、或は鹽賣ひせしものとも云ふ、江戸に來りし時は、鹽賣長次郎と名乘る興行一時四五軒も出來、いづれを眞とすべきやを知らざりしといふ。長次郎の事は當時の浮世草紙にも出で、又小唄落語にも作られたり。即ち錢を投げると見せて投げずに手に殘すを手品遣ひに譬へたるなり」

か、女夫の中の榮耀使ひか、エ、おとましや、身代は得持まい、詞おれらが談義參りして、一文投る賽錢さへ、進ぜふか進ぜまいかと疊算置て見て、假へ算が合ふても五度に三度は投げずに仕舞ふ、側に居る同行衆がぐはら〳〵投る時には、錢を一文摘んで、肩手を斯う振上げ、投る顏で鹽の長次郎錢は手にとまつた、斯う氣轉を利せねば過にくい身代、四百目は何にした、フンいきはを聞かふときめらるゝ、地女房さては丁稚奴が咄しに違ひなしと、思ひあたれば妬ましさ、いつそ言ふて退ふか、いや〳〵それもむごい事、如何か斯うかと急來る間に、先づ先立つは夫のかはいさ、詞アゝ、親父樣なんぞと思へば仰山な、わしら女夫が何に借

●南無三寶

錢しませうぞ、其銀はな、南の兄御の方に、曲輪から出たよい奉公人を抱えて、手附銀が遣度いが世間共に金詰り、彼の邊りは利も高し、殊に兄御は病中なり、わしらが判では貸す人あるとの賴み樣、地金こそは成まいし、判つく程は一門がひ、殊にわしと他人なれば猶しも義理はかゝれず、又用無心もあるものと、それで判を押ました、内外の者も聞ぞかし、千里萬里も違ふたか、餘りな親父樣と、フシ陳ずる心の優しさよ、

地徳兵衞は女房の歸らぬ先にと足早く門口に立けるが、内には舅の喚き聲、南無三寶と入りもせず、暫く樣子を伺ひける、詞舅猶も納得せず、チヽ女夫が言ひ合せ、親を瞞して身代潰せ、地寢て居るも嘘じや、何處へ失

●まくし出す　追出すこと。

●もがり　紺屋の物干にて、竹の枝を少し殘して先きを切りしものを立並べ、其の枝に染物を干す、これをもがりといふ。（左圖參照）

せたと穿鑿す、ハテ何の留守なら留守と言はいでは、あれ暖簾の彼方へと、指させば、宗徳は暖簾打上げ、孫の事は氣も付ず老眼の何見てか、詞ウヽウ先づ職人には似合ぬあの鬢付が氣に入らぬ、頭痛のする寢やうでない、地又喰ひ醉ふたか、春は早々まくし出しや、彼の樣な聟なら二十人や三十人は今の間に取て見しよ、三日と一人寢させはせぬと、呟き〳〵雪駄穿く、内の者共最うお歸りになりますか、詞送りませうといひければ、ヤア道なら些と送つて、それ言ひ立に夜食喰ふといふ事かと、地門の戸明れば徳兵衞、もがりの蔭に隱れしを、それとも知らで歸りしはチクリ危う〳〵かりける次第なり、地入違ふて徳兵衞、突と通

（りかも）

染物師（人倫訓蒙圖彙所載）

つて羽織を背後へひらりと投げ、實事の格は見覺えたり、女房の膝元にむんづと居て、こりや最前からの次第、門口に聞て居た、留守のおれを寝て居ると、親父の手前は男をかばふやうなれど、職人に似合ぬ鬢付なる男を、身代りに寝させたは念が入て忝ない、入聟の事なれば家屋敷家財にも、罌粟程も疵は付まいが、うぬが命に疵付る、地只た今間男を引摺出して見せうぞと、奥に飛込み、何かは知らずワツと叫ぶを胸倉摑み、宙に引提げ躍出だうと引する能く見れば、こは如何に坊主天窓の小市郎、盆に買ふたる踊の鬘、奴天窓を掉な

●間を渡す　間を合すこと。

●人でなし　義理人情を辨へぬもの。

がら、母様怖いと泣居たり、徳兵衛も仕舞付ず、詞なければ女房は、宵より積る憂涙、一度にわつと叫び伏し、フシ消え入るばかりに泣けるが、地なふ徳兵衛殿、むごふござるつらいぞや、不義せう者と見するゑたら、何故附張ても フシ居もせいで、元日から元日まで、能ふ往き處もある事ぞ、此方の留守の言譯にふツつりと事は缺く、隱居様の聲と聞き、側にあつたを幸ひに、此子に着せて間を渡したも、私が智慧ではあるまい、氏神様のなされたと有難ふ思へども、恨み受れば フシ是非もなし、地女房の口から推參ながら言はゞ此方は人でなし、房と挨拶切れぬげな、餘所外でもある事か、兄御の内の奉公人、躾異見もすべき身が、客衆とやら

●ねすり言　あてつけ、耳こすり又いやみをいふも。

●跡の月の騒動　火事などに逃ひ寺へ立退きしものか。

●まぶられる　守られるの訛り。

の害になり、身代の妨と、嫂御のねすり言聞づらや聞にくや、　詞ア、それも道理、又跡の月の騒動に、一家が寺へ退ての時、見舞に往て見居た、餘のお山衆は押退て、房一人を大事にかけ、此處邊で心底見せ顔に、けば〳〵しい仕方共、側に居るは知た衆此方よりわしが顔、阿房らしう見えたやら、まぶられて歸りしぞや、それに餘り踏付た、先刻に房を連て來て、女共の女房のと印判までを引探し、納戸戸棚も見せ曝し、これが嬉しからうか、男と男の恥よりも、隱しても隱したい、女同士に恥を見せ、男は寢取られ寢間帳臺は見探され、阿房の數々讀盡され、これでも男の可愛ひは、さても如何なる因果ぞや、今日の事が隱居へ聞え、わしは親

●一念發起　始めて自分の非を悟りたるをいふ。

●業人　因果人といふに同じ。

●瀬戸　際の義。場合又は機會といふべき所に用ゆ。

●明日は伊勢の御縁日　此の出來事のおこりしは十二月十五日にして伊勢太神宮の縁日は十六日なればしかいふ。

●三世の諸佛　三世は去、現在、未來にして、各一千佛三世を通じて三千佛あればしかいふ。

に叱られながら、科を負ふて居る心、人間らしい氣があらば、三十日の一月を、せめて三日は碌々に、寢物語もあれかしと、心一杯理をせめて、フシ情も深く口說き泣く、千々の思ひぞ哀れなる、德兵衛一念發起して、詞ハツアあゝ過つた〳〵、地悪人とも業人とも、盗人とも騙りとも、我ながら重罪人、今迄も和女に恥、止ふ〳〵と思ひしが、是程の瀨戸がなふて浮々と盡した、我一人思ひ切れば、そなた子供隱居の爲、兄貴の身上我身の爲、房めが後の爲もよい、地其處を知らぬ身でもなし、明日は伊勢の御縁日、今宵の月に蹴殺され、三世の諸佛の御罰を受け、二人の親に冥途から、睨み殺さるゝ法もあれ、ふツつと思ひ切たぞ、詞今日の女

●一角　金一分のこと。

●通路　かよひぢ。

●無下　普通無下は一概にといふ場合に用ふ。但しこゝは折角の心を無にしたといふ意なり。されば無下の下寧ろ不用に屬すれども、當時詭りて無下といひしなるべし

●無心　心なく人に物をねだるをいふ。但しこゝは唯頼むといふ義に用ひられたり。

も房ではない、人置きの娘を一角で賴ふた、證據には其銀此處にありと取り出し、地明日直に返辨し、向後房とは通路せぬ、今迄心を無下にした、恨みもつらみも赦してたも、さりとては此德兵衞、女房の罰が當つた、罪を赦してくれよとて、手を合せてぞ泣き居たる地女房莞爾と打笑ひ、詞エ、忝ない〳〵、挨拶切た捨たのと、幾度か聞たれども、地銀まで見せての誓文、とんと心も落付て、今日から眞の夫婦、皆悅んでたもやとて、フシ嬉し涙を流せしが、地迚の事に年寄て、一夜の心もやすめたし、太儀ながら隱居へ往て、今の誓文一通り、聞せまして下されかし、是は私が御無心御恩に受ふとありければ、何がさて讓り受れば我爲にも

●せりふ　女郎の立引又は詰開きするとき、せりふするといふ。もとは俳優のせりふに起るといふ。

親同前、つい鳥渡往て來ふ、そんならさうして下さんせ、生薑酒して待ませう、それ生薑おろしや釜の下、竹は手樽を振て見る、酒の通ひ路引かへて、チクリ夫は北へと〳〵出けるが、地辻にてフツと思出し南無三寶、義理に詰つた女房のせりふ、尤と胸に應へしより、房が大事をはつたりと忘れたり、入相限りに待て待ふ、此手筈が違ふては、生死の出來る金、いや〳〵親父は明日の事、鳥渡逢ふてと立戻る、詞アヽそうもなるまいか、只た今誓文立、殊に金も手放したり、地先づ此方を仕舞ふてのけふか、ハアヽかはいや房がどうぞ金の首尾なつて、玉子酒飲む樣に仕度い事じやと歎きしを、氣遣ひすなと勇めしが、氣の弱い女なり、此方は儘

●中橋　「南水漫遊」に寛文の大阪圖を引いて、「道頓堀川に架する大和橋と日本橋との間に中橋ありしが、いつの頃にか絶え、其の後日本橋と太左衛門橋との間に一橋を架す。これ今の相合橋にて其の頃又中橋ともいへり」と。此の橋は貞享年中に始めて架したるを、「摂陽群談」に見えたり、元來此の橋筋は長堀に架する中橋と同筋にして船場にては此の橋筋を古くより中橋筋と呼べば、道頓堀に架するも、其の頃ヤハリ中橋といへりしなるべし。

●六軒町のさよ格子　「南水漫遊」に「島の内六軒町といふは塗師屋町（今の玉屋町）なり、重井筒の戯文中の卷、月はやわたりぞめして中橋や、六軒町の小夜格子といふ、寶暦の頃までは兩三軒殘りありしが今はなし、此邊を六軒町といふは元文寛保の頃まで女郎屋六軒あり堺屋、桔梗風呂、重井筒藤十郎、美濃屋、春木屋伊左衛門、河内屋勘兵衛なり」と。六軒町は町の名にはあらで異稱なるべし。寛島新地を蚫川といへりし如し。

●唐土の聖　孔子のこと。色の德には隣りあり、「論語」に「德不孤必有隣」といふ語をもじりたるなり。

よと又立歸り、思へば〳〵女共、生薑酒して待ますと、手づから生薑おろしたる志も不便なりと、辻を越えては又戻り、辻に立たりつくばふたり、行も歸るも定らず、如何せうかかう生薑酒、熬つく樣に氣がなつて、胸かき廻す玉子酒、心二ツに打破て君が方へと走り行く、後は涙の玉子酒、霜の白みに　三重

中之卷

〳〵月は早、渡り初して中橋や、六軒町のさよ格子、唐土の聖の宣はく、色の德には隣あり、向ひ兩側輝す、フシ軒の燈火目印に、昨日も今日も、明日の夜も、重ね井筒の釣瓶繩、手繰來いとの便かや、地中に不便や、

●心一つに孕み句の句などの腹案をいふ。孕み句は俳諧などの約束につき、一人くよ〳〵思ひ煩ひをるをいふ。●脇　前に句といひしより脇とうけたるなり。外の者の義。

房は憂身の品々を、心一つに孕みくの、脇が勇めば力なく、片目で笑ひ片目には、涙を包む火鉢の下、フシ人待つ宵の火なぶりや、地さよも小六も浮き〳〵と、引裂紙の捻り元結で火廻しを、詞火のじ、日野絹、房樣地雲雀　鵯　比叡の山の檜の枝に、そりや鳥指が鳥でないぞや身は丙午、詞又房樣の忌々し、地男殺そといふ事か、此方は祝ふて姫小松、緋縮緬解く人目の隙に、鬼も來るなと柊や、雛子ひしこひともじ、エ、しやらくさい、二瀬仲居も小差出で、飯炊は來て火吹竹、料理人まで冷し物、駕籠の彦兵衛膝頭、拇杓緋緞子蟆、平野蒟蒻、ひし紬、フシひらのやゐきやう肥後芋莖、地サ

●火廻し　冬の夜火鉢の許に寄集ひ、紙燭に火を付け、頭に火の字の付く物の名をいひ、紙燭を添えて次へ廻し、斯く送り〳〵遂にいひ詰り、紙燭の消えたる者を負とす。ひわたし、又ひもじ草ともいふ。（「嬉遊笑覧」「一話一言」）

●しやら臭い　意氣過ぎたる風情。但し前にひともじと惚のをないひたれば、臭しときかせたるまでなり。

●房様の灰寄　灰寄は火葬の後骨拾ひするをいふ。朋輩等が火廻しの慰みに、お房の調賃を捕へ、息が出ずば火家（火葬場）へやれといひ、又お房の處にて火が消ゆればお房の灰寄せと嫌がらせをいひしが、偶然にも情死の前兆となるやうに仕組みたるは作者慣用の趣向なり。

ア〳〵紙燭が皆になる、なんと房様サア如何じや〳〵と詰かけられ、（詞）ア、姦しい息が出ぬ、物がいはれぬ赦してたも、（地）息が出ずば火屋へやれ、そんなら火箸で焼てのけ、南無三寶火が消えた、サア房様の灰寄せじやと、哄と笑ひしてんがうも、フシ明日の哀れとなりにけり、（地）火廻し半ばへ飛脚屋が、何も御用はござりませぬか、ヤア房様京へ上す銀もある、御狀もあるとの御事、遣はされませぬかと問ひければ、（詞）ア、能う寄つて下んした、まだ文を書ませぬ、まちよつとしてから來て下され、それなら明日の便になされませ、今宵は仕舞でござるといふ、尤もなれども今夜上して明日の間に合せねば、きつう叶はぬ大事の用、（地）無心な

●初夜　＊

●四ツ時　亥の刻（今の午後十時）

●思ふたつぼへ當る　約束した事が思ふたづぼに當りしをいふ。お房は德兵衛が今宵金策するといふ事を豫め危ぶみゐたればなり。

●濱　大阪にては川岸のことを濱といふ。

●幾瀬の思ひ　思ひのいや増して甚しく氣の揉めるをいふ。

がらもそつとして、まー度寄て下さんせ、賴みまする と詫れども、返事もせずに出にける、房は心も心ならず、日の暮までの約束が、初夜過ぎ四ツのかねてより、思ふたつぼへあたりしと、門に出て北を見つ、濱まで歩み西東、足も冷て鐵釘を、胸に打るゝ幾瀬の思ひ、ヤア北から人が走つて來る、そりや德様よと走り寄る、見れば以前の飛脚屋なり、（詞）お房さまかどれ〳〵御狀は舟が出ます、ヲ、道理〳〵此銀は、京の妾が親里へ明日の日中に渡さねば、いかふ詰らぬ銀なれども、今に先きから來ぬはいの、定めし今まに來ふ程に、まそつとしてから來て下され、いや最早來られませぬ、來てから今夜は、（地）出されませぬと、言捨てこそ歸りけ

●とほんとする　放心の體。茫然と途方に暮れたるなり。
●首尾　こゝは約束の義。
●おか様のさしこみ　徳兵衛が女房の千渋なり。
●格子祝　女郎が馴染の客も來ず又遂に客の呼出しもなく淋しき夜は、近邊などをちよいと歩行ば、必ず其の夜客來るとて昔しはこれをなしたり。これを格子祝といふ（「南水漫遊」）。

れ、房は一人とほんとして、今夜の首尾を違へては、一代京へ繋れて、連添ふ事も限りとは、根堀知ての上なれば、如才のあらふ筈もなし、皆おか様のさしこみと、思ふもじたい此方の無理、身一ツ胸を据へたれば、寧そ悲しい事もなしと、内へ歸れば主人の内儀、房は今まで門にか、　詞　此寒いに物好きな、惣じて此中浮々しやる、些と心をしめやゝとありければ、されば餘り餘所が賑かさに、　地　格子祝ひに出ましたと言捨て二階へ上る體、氣がゝりなれば目を放さず、　チクリ　折々〳〵心を付けるが、フシ　房はそれとも　地　白紙の、障子の月を明りにて、刺刀出し合せ砥に、かゝらましかは斯とだに、ま一度顔見て死たいと、思へば引るゝ後髪、

●額たれ　小き刺刀をひたいたれといふ。たれるは刺るゝなり。
●肩がつかへる　肩がはる、肩がこるなどゝ同じ。
●それや　未詳、客商賣するものをそれしやといへば、同意なるべし。

手もわな〳〵とぞ顫ひける、主人見付て後より、房それは何しやる、　詞　はつと驚き振返り、ハア内儀樣の、何んじややら喫驚としました、あんまりよい月影に、　地　額たれふと思ふてと、紛らかせば打笑ひ、チヽよい所へ來て仕合せや、幸ひ且那殿髭そつてくれとある、些と其刺刀貸してたもと、引たくり押包み、暫しは顔を打守り居たりしが、　詞　アヽ一昨日の煤掃にたんと肩がつかへた、そろ〳〵揉でたもらぬか、　地　あいと後に廻りしも、扨は氣色を見取られしと、悲しさ怖さいやまして、フシ　更に別ちもなかりけり、　地　さすがそれやの女房とて、世間話に氣をゆるませ、　詞　是なふ房、何時ぞ〳〵と思ひしが、序にそなたに異見がある、我も始

●思ひばかかぬといふ。思ふやうにはかの行萬事故障多く末の遂げられる例少なければなり。

●身のひし　＊

●子飼　稚き時より養ひ育て、女郎藝者に仕立るを子飼といふ。

めは勤めの身、素人の言ふ事と一つに聞くは曲がない、心沈めて聞てたも、廓やこゝの奉公は、樂みなふてはなくてはなけれども、それにさへ勤まらず、無下なふせくではなけれども、それにさへ猶掛引あり、必らず妻子ある人と末の約束せぬ事ぞ、地男の間男同前にて、思ひばかいかぬ物ぞとよ、徳兵衛様とも今は挨拶きつたとある、チ、〳〵仕合せ〳〵目出度い事、詞お辰様を離別させ、添ふてそなたの本望ならず、いとしい人の身のひし、一門中の憎しみ受け、そなたを鬼よ蛇よといふ、又圍はれて世を忍び、後家同然に暮しても、是が何の手柄ぞや、若木の花は一盛り、老木の枯葉色失せて、變るは男のフシ心ぞや餘のお山衆と違ふて、十チの年から子飼にて、豆腐取

て來い八百屋へ走れ、駕籠呼でおじや掃掃除、戸棚の鍵まで預けしは、ちさいからの馴染だけ、我子の様に思はれて、よい客もがな出世させ、下女の一人も連させたう、思ふは此方とばかりかは、皆親方は同じ事、譯もない事仕出して、慘い目見せてたもんなや、爲のよい事あるならば、今でも暇をくれといや、欲を離れた是證據、損といふて僅の事、不便な目を見やうかと、案じ過しがせらるゝぞや、思ひも寄らぬ憂ひをかけ、必ず泣せてたもんなと、涙も聲もしめ〴〵と、殘る方なき恩の程、房は顔を上もせず、只あい〳〵としやくり泣き、フシ延紙の幾重を絞りけり、地客かあらぬか表にて、能うござりましたといふ聲す、誰様じやと澄し

●人ごと言はゞ錦敷け　「人ごと言はゞ目しろおけ」の轉じたるなりと。

●それはあつて過ぎたと　それは二人が逢つてゐた時分のことといふなり、心の急く儘簡短にいひしなり。

て聞けば、いかふ冷えるが、　詞兄貴の氣色變る事もないか、と云ふ、　地ハア、人ごと言はゞ莚敷け、德兵衛樣さうなと、聞くより胸もさは〳〵と、フシ飛も下りたき心なり、　詞時に丁稚が門口より、向ひの肥後屋から房樣ちやつと送らつしやれ、お客は堺の、早ふ〳〵と呼はれば、料理人不審を立て、問ひもせぬお客の斷り、合點が往かぬ、房樣はお暇が入る、成らぬといふを房聞いて、あれはなぜにと問ひければ、チヽさればいの、あの宿で德兵衛樣に逢やつたゆゑ、それで遣るなと云付た、エヽ、内儀樣の譯もない、それはあつて過た事、　地今は挨拶切れた上、德樣はこゝになり何の氣遣ひ、堺の客は正月を賴まねばならぬ人、平に遣て下さんせ

●駕籠へも　駕籠屋へもなり。

●心得太郎兵衛　心得たといふ口合。

●際の商ひ跡をつめ　際は前に正月買のことをお房がいひたれば、偶然に德兵衛がこれを受けたるにて節季のことをいふ。跡をつめるは拔かるなといふ意なるべし。

●さゝ　「女中道知邊」に曰く、酒をさゝといふは酒を竹葉とも竹光ともいふ故なり、百詠の註に宜城出二竹葉酒一とあり云々。

といふも誠と思はねども、チヽ、それもさふ、是なふ房を送ろぞやと、呼れば下にて料理人、そんなら道じや駕籠へも鳥渡寄てくれ、心得太郎兵衛の婆々樣と、フシ喚いて使ひは歸りける、　地サア身仕舞して早ふ往きや、いや夜もいかふ更まする、ツイ此儘と連立ち二階を下りる間に、駕籠を庭にぞ舁寄せける、德兵衛樣遊んでお歸りなされませと、いへばとぼけた顏付にて誰じや房か、際の商ひ跡をつめやと、　地よそ〳〵しう、口にはいひて魂は、一つ駕籠なる番ひ鳥、フシ飛立つばかりに見えにける、　地色を覺りて女房、これは夜更て御大儀な、先づお上りなされませいかふ冷るさゝ一つ、それ爛つきやとありければ、　詞アヽ、おきや〳〵もう歸る

●女共　自分の妻女のこと。

●不返事　ふしやうく〳〵の返事、或は生返事などゝ同じ。

●中橋　中橋の架かへありしたいふ。

此頃酒があたつて、今も今女共、生薑酒を飲させうと、手づから生薑おろすやら、地それが嫌さにやう〳〵と、是へ逃て參つたに、又酒を飲めとや、やれ逃んと出る所を女房飛下り立塞り、詞何の無理に進ぜませう、茶でも一ツ參りませ、いやいや此頃は茶が中ります、地今も今さる方で生薑茶をくれたを、やう〳〵と逃延た、是非歸してといふ所へ、詞兄の主人寢間より出、ヤア徳兵衛能ふぞ〳〵、夜が寢られぬに夜と共に話さう、地サアこゝへと呼びかくれば、病人といひ兄の命、異議も言はれず不返事に、フシもぢ〳〵してぞ上りける、詞なんと中橋架たの、欄干渡すばつかり、春は町中渡り初め、氣色も次第に快し、寒明たら本服せう、是と

●ろくに居る　胡座かくこと。

●もだ〳〵　煩悶する狀。

●伊勢講　太神宮信者打寄りて講を組み、講中順番に講元となりて毎月一回集會して、講中を饗應し掛金をなして他日伊勢參宮の路費に宛るを伊勢講といふ。

●自身番　昔し町々に番小屋を設け、町中のもの交代して番をなし、非常を警むこれを自身番といふ。

いふが此夏の、西國の御利生、ヤ三十三所の風景、一々語つて聞せん、サアろくに寛りと居やと、地はてしも知れぬ長話し、徳兵衛心もだ〳〵と、かわいや房を今まで待せ、又宿屋でも憧れん、早ふ立ちたさ氣は急いていや申し、詞今宵は我們伊勢講、講中待て居らるべし、地罷歸ると立んとす、先づ待ちや今迄誰が待ものぞ、まそツと話しや、と留められ、いや鎗屋町の隱居へ齋に參る約束、是非お返しといひけれども、はて齋は明日の事、平にといふに詮方なく、女共が懷姙に何時に産致さうも知れず、お戻しなされ下されといへども兄は聞入れず、遁れぬかたの自身番、見舞度ふ存ずれとも、是ではお返しなされまい、あ痛〳〵、あい

たしこ〳〵、冷える加減か俄に疝氣が起つた、歸つて養生いたしたい、はて譯もない、夜氣にあたつてなほ痛まふ、藥でも遣ふか、いやもふ藥も通らぬ、駕籠に乘て歸りたし、地あ痛〳〵と呻けども、内儀推して外へとては出ずにこそ、小座敷の巨燵に火をたんと入れさせて。泊つてござれと强ければ、地いや〳〵今年の巨燵はいかう人に、あたります、今も今女共が生薑巨燵を仕懸て、やう〳〵詫言いたしたと、地心は先へ脱殼の、何をいふやら譯もなし、こゝになりとも寢せませと、蒲團打着せ表には、内儀手づから錠下し、内外の者に目配せし、そろ〳〵側へのく樣子、ム、ウ氣が付たと反らさぬ顔、いや〳〵寒いに往なうより、温かに

●まぎら　紛らかしの畧。

●其の夜　ありし其の夜なり。

●大幣　引手あまたにかけたる語。大幣は大祓の時のしでなさす串にて、大祓の果たる時、人々これを引とりて身を撫べる事ありしより「大ぬさの引手あまた」など用ひたり。

して泊つたが、先づ此方の德兵衞と、重き心を輕口に、蒲團被つて行く振も、涙くろめし　三重〳〵まぎらなり、フシ内と外に引合の、心の駒の諸手綱、房が思ひの通ふかや、夢とはなしに　フシ現なや、地顏をならべて見る樣で、抱き付けば小夜蒲團、涙に濡れて冷々と、髢ほどけて身に障る、其夜の心地しみ〴〵と、身に引纏ひ寢て見ても、一人轉りはエ、埒がない、心の内はむしやくしや枕、いつそ明てものけよかし、ア、大幣の此蒲團、小六も寢つろ小夜も寢つらん、房も寢よふ引手數多に何處の誰めと寢くさつた、撲たい踏たい叩きたい、ゑゝ〳〵〳〵蹈むな蒲團に科もない、今は蹈でも叩いても、房に逢れぬ逢せぬかと、巨燵にとんと腰

●寢はな　寢入ばなのこと、能く寢盛りたるないふ。水の出盛りな出ばなといふに同じ。

も脱け、フシ譯も涙に我身ながら、男の樣にもなかりけり、地戀の寢ばなの屋根續き、何時か思ひは山口屋の、物干傳ひ忍び來る、よその戀かと羨しく、見れば雨戸の戸袋を、密と踏へる足元も、顫ひ〳〵の目もくれて、詞ヤアこゝにかいの、房か、地これはどうぞとばかりにて、巨燵を中に手を取て、フシ只泣より外の事ぞなき、地涙の中にも男の顔、じろ〳〵と見て、アゝいとほしや、氣を揉まんすゆゑにやら、顔にたんと痩が來た、其苦は誰がさするぞい、皆私ゆゑと、それは〳〵忘るゝ事もあるにこそ、去ながらもう苦にして下んすな、斯ういへばどうやら拗ていふに似たれども、微塵もさうした、フシ心もなし、わしが京の父樣、よしない者の

●二重賣二重判　重井筒へ賣つてあるお房を抵當にして他より金を借りたればなり。

●待ぼうけ　待焦れること。

●觀念　覺悟又は諦めるの意。

請に立ち、明日限りに銀立てねば、私を遣るとの判じやげな、私はこゝへ身を賣て、先から連に來た時は、二重賣二重判、牢舍は鏡にかけた事、成らぬ事をぐど〳〵と、思ふは愚痴の至りなり、詞先立死なんと剃刀を、手に取りは取たれども、内儀樣に見付られ、得死にもせず居る間に、地此方樣の聲はする、向ひ側より呼に來る、嬉しや先で何事も談合せんと、今迄待ぼうけになつたれども、一目逢へばこれ本望、末賴みない契りなれば、是限り〳〵と逢ふ度毎の觀念、今更ためていふ事なし、貞女を立るお辰樣の蔑みも耻しい、中よふして下さんせ、互に生れかはつたら、本妻定めぬ其先に、早ふ女夫になりませう、言置く事は是ばかり、

●死脈が打つ　望みの絶たるとを脈が上るなどいふ。死脈が打つも同意。

●理をもつ女　女房の詞には十二分道理の有るをいふ。

●張良樊噲　いづれも漢の功臣、張良は智者、樊噲は勇者、智勇を以てするも道理には敵せずとなり

●空誓文　＊

●胴が居る　腹が据ると同じく、決心を固ると。

サア〳〵戻つて下さんせと、夫にひしとしがみ付き、絶入るばかりに泣居たり、チ、聞かねど萬事至極した、去ながら、其詞嬉しい樣で恨みあり、本妻あるは知れた事、同じ口で諸共に、地死んでくれといふてたも京の便を大事に思ひ、騙り同前の才覺にて、銀四百目借出し、一時ばかりは懷にあつたれども、とかく二人に死脈が打つ、何處も彼處も一時に、汐のさいて來る如く、ばら〳〵と首尾わるく、詞元來理をもつ女共、理屈を詰て恨み泣き、いかな張良樊噲でも、道理に對ふ矢先はない、銀も渡す其場にて見す〳〵嘘の空誓文、地とても遁れぬ此罰佛神を待たずとも、此方から當つて埒明けんと、道から胴は居つたり、死直しは二度な

●あぢきなし　味氣なしにて、面白くなきと、又はあるかひなき意。

●病ほうけ　病の爲に疲れはてたるをいふ。

●空耳　聞誤りの多きをいふ。

らぬ、卿ち顏は曲もなし、手に手を取てにつこりと、死ね死なふといふてたもと、炬燵に顏を打投て、世にあぢきなき涙の體、ナフそふ思ふてが定かいの、思ふが不思議か女夫じやもの、ほんにさうじや忝い、嬉ふござると抱き合ひ、フシ聲を立ずの絞泣き、フシ炭火も消えて凍るらん、地奥へ斯とや聞えけん兄の聲にて、詞なんと德兵衛痛みはよいかと、こつ〳〵せいて來る音す、やれ隱れよと狼狽へて、房を炬燵に押入れ、蒲團被せて德兵衛は、上に凭れ覆になり、フシ顏もきよろ〳〵なりにけり、地程なく主人立出で、詞物言ふ聲の聞えたは誰であつたと不審顏、いやそれは私寢言かな申たか、但しお前が病ほうけて空耳でがなござりましよ、歸つ

てお寢みなされといへば、イヤいかふ夜が寢憎い、地話さいた西國の物語して聞せうと、フシ炬燵にあたるうたてさよ、地ヤア炬燵の火が薄い、詞これ女房ども、火をくわつとおこいて、火斗に二三杯持ておじやと呼はれば、德兵衛ぎよつとして申し〳〵、火のきついはお毒、御無用に遊ばせ、いや〳〵裾が冷える、地膝節の焦るほどなが此方はよいといひければ、平にそれは火の用心と申し、膝の皿に火が付たらば、御身代の妨げといへども、兄は懲めと思ひ意地悪ふ、火を早ふ、フシ持ておじやとぞせがみける、詞ア、申し、お前は病氣で引籠つて、世間を御存じござらぬ、此冬から何方も火の强い炬燵廢りもの、此脇邊のよい衆は、大か

●火斗　十能のこと。

●ぎよつと　ひしと其の詞の胸に應へたる驚きの形容。

●膝の皿　膝頭のことなれど、暗にお房をさしていふ。

●せがむ　强請すること。

●北脇邊　北濱邊のことをいふ。

た炬燵に水を入れるげにござる、重ね井筒ともいはるゝ身が氣の通らぬ、炬燵に火を入れなんどゝは、さりとてはお笑止な、あれおか樣火は入らぬと仰やるゝと地身をもがく其間に火斗は、焦るゝ紅葉葉を盛たる如き池田炭、遠慮も內儀が炬燵にうつし、サアあたらんせと言ひ捨て、フシ臺所にぞ出らるゝ、地傍で見るさへ德兵衛、身も焦げ渡る心地にて、詞兄者人其火で熱ふはござらぬか、いつその事に火刑にならしやれぬか、こゝまで火氣が來ますする、地些と埋けて消ませうと、寄らんとすれば其儘おきやと、止められては炬燵より、胸を焦すは德兵衛、房は涙の埋火に、燒付らるゝ身の苦しみ、蒲團の蔭より手を出し、裾に取付き堪えんと

●笑止　氣の毒の意。商賣柄にも似ず、氣の通らぬは氣の毒となり。

●身をもがく　もがくはあせると同じ。

●池田炭　炭の最上にして火氣の强烈なるもの、攝州河邊郡一庫村にて製す、原料は櫪なり。池田町に市を立て賣捌くより池田炭又一庫炭ともいふ。（「攝陽群談」）

●咸陽宮の煙の中　〔高註〕さきに火を紅葉にたとへたるより思へば此句は謠曲、紅葉狩の「ふしぎや今までありつる女、とり〳〵化生の姿をあらはし、あるひは巖に火焔を放し、または虛空に炎を降らし、咸陽宮の煙の中に、七尺の屏風のうへになほ云々」とあるより、とりたるものなるべし。物凄く恐ろしき樓のたとへなり。咸陽宮は秦始皇の宮殿にして、項羽のこれを燒きし時、三月火滅せざりきといふ。

するにたえがたき、地獄もかくやと不便なり、地主人も一旦懲しめのさのみは哀れと思ふにや、詞アヽ、温まつた、もう歸るそなたも休みやと立歸る、地德兵衛兄ながら恨しくや思ひけん、詞とてもの事に眞黑に焦るまで、あたつてお歸りなされかしと、いへどもさすが一言も、岩木をわけぬ人心、フシ奥の一間に入にけり、地德兵衛は小腹立ち、櫓も蒲團も一ツに摑で取て擲れば、咸陽宮の烟の中に顏も手足も紅の、房は目ばかりじろ〳〵と、物をも言はず片息の、フシ性根も亂るゝばかりなり、地やう〳〵に抱上げ、袂に煽ぎ身を冷し、花活の水幸ひと、顏に灑ぎ口しめし、少し心もさはやけり、地サア兄貴までが知られたり、何面目にのめの

●樽屋町　六軒町の東の筋にして今の千歳町のこと。

●日親樣の御門　高津中寺町日蓮宗正法寺をいふ。

●そなたは法華我は淨土　法華は日蓮宗、同宗の願ひは即身成佛、淨土宗の願は極樂往生なればしかいふ。

●題目　南無妙法蓮華經の稱にして、これを七字の題目といふ。

●不覺の涙　不覺は覺悟の儘かならざるとにして、今死ぬると決心しても、彼是德兵衛の述懷を聞いては、思はず涙にくるゝとなり。

めと、人に頼をまぶられん、いざ此所で尋常にと、脇指取らんとせし所を、さうさへ覺悟は極れば嬉い〳〵去ながら、こゝで中々思ふ樣によもなるまい、屋根傳へに裏へ脫け、樽屋町の門へ下り、宗門なれば日親樣の御門で死なせて下さんせ、ヲヽ、尤〳〵、有難い心ざし、サアおじやと立けるが、詞ヤアそなたは法華、我は淨土、願ふ所が別なれば、先の往はも覺束なし、地宗旨をかえて一所に行かん、今題目を授けてたも、疾く〳〵と手を合すれば、房は不覺の涙にくれ、詞私に淨土になれとも言はず、法華になつて下さんする、地さても嬉い心やな、勿體ない事なれど、今まで毎日千遍宛、五年唱へた題目の、功德で赦したび給へと、

●鷲の峰　靈鷲山とて釋尊の法華經を說きし所。

●血汐の臙染　「近代世事談」に、寛文の頃、洛陽祐乘坊辻子紺屋新右衛門といふが、初春の月の色を見て創めて工夫したる由記せり。德兵衛は紺屋なるより血汐の臙染と附けたるならんか。

●仇しが浦　此の心中は、前にも說きし如く元祿十七年十二月十五日の夜の出來事にして、曾根崎心中の翌年なれば、曾根崎心中の文句を取りたる所頗る多し。道行の「血汐の臙染」といふも、曾根崎の「知死期の霜」に似、「仇しが浦の空船」も「仇しが原の道の霜」を少しく直しなるなり。

●牡蠣船　廣島地方より、毎年冬期になれば、牡蠣船入り來り、大坂川々の橋の下に繫ぎ、牡蠣飯を炊きて客に供す、大坂名物の一なり。

●色駕籠　遊女を送迎する駕籠。「南水漫遊」「女郎の乘れるを色駕籠といへばいと艶に聞ゆ（中略）此の里のならひとて送迎必乘ニ駕籠一」と「月花餘情」にも書き、ひなぶりの唱歌に戀の重荷のナ島の内、送り迎ひに舁く駕籠の云々」。

●こゝは竹田や夜は何時ぞ、五ツ六ツ四ツ千日寺の　これは「三勝心中」（「松の落葉」卷五）の文句、「夫婦互ひに念珠をくりて、なまみだ〳〵、なまみだ〳〵念佛を路のかずとりに、夫婦一所に千日寺の鐘のひびきに夜はなん時ぞ、八ツでもあろか、いつもおつうか目をあく時分」を取りたるなり。竹田は竹田近江のからくり芝居なり。同座は寛文二年の創立にかゝり、大坂

互に合掌心を沈め、今身より佛身にいたるまで、能く持ち奉る南無妙法蓮華經、今身より佛身に至るまで、添せ給ひ添せて給べ、南無妙法の力を賴みに、慥と負て上る二階や、三重〳〵屋根の棟、鷲の峰ぞと、地一筋に這ふつ辿りつ傳ひ行く、道は三途の瓦葺、霜の劒の山牙えて、こゝに地獄の鬼瓦、弓手も馬手もおそろしく、遁れ〳〵て行末は、今ぞ冥途の門出と、これを限りの立酒や、樽屋町にぞ　三重〳〵迷ひ行く

血汐の臙染　下之卷

歌〳〵筒井筒、井筒の水は濁らねど、今はナチス涙にフシかき濁す、月も袂にかき曇る、朝の雲夕の霜、仇しが浦の空ぼ船、身を無きものと知りながら、いとしにくしの戯れも、少時此岸彼岸の、假の現の假橋や、藻に埋るゝ牡蠣船の、苫の隙間の燈火の、風を待つ間の影よりも、明日まで待たぬ我命、地我と失ひ二親の、育てし御恩は如何せんと、歩みもやらず泣居たり、迚り迎ひの色駕籠も、小チクリしばし途絶えば何處にも、馴染〳〵の寢入花、我身は今宵散り果る、地名殘盡せぬ濱側の、歌此處は竹田か夜は何時ぞ、五ツ六ツ四ツ千日寺の、鐘も八ツか七ツの芝居、二人が噂世話狂言の、仕組の種となるならば、フシ我を紺屋の片岡に地何とか思ひ染川は、せりふに泣てくれよかし、包む袂の飛彈椽、二個遺ひの手品にも、斯るなりふり寫すとも、

の一名物なり。子守唄に「大坂道頓堀竹田の芝居、錢が安うても面白い」。

●千日寺　法善寺のこと。「難波鑑」卷四、「法善寺墓參」（七月朔日）の條に、「千日寺のたゝき鉦、諸行無常の響きあり、歌舞喜若衆のかほばせもつゐに必衰をあらはせり、（中略）抑も此法善寺と申せしは、寛永年中のころほひより、千日の念佛をとりたてしより、人こぞりて千日寺といへり、それよりつゞいて今に不斷念佛の道場となれり云々」。

●七ツの芝居　七ツは芝居樽の數か、芝居開場の時刻か詳ならず。「高註」には前者とし、七樽を片岡、岩井、嵐の三座に、竹豐の二座及び竹田近江と山本飛彈掾とを加へたるものなるべしといへり。されど當時歌舞伎の名代は、松本名左衛門（座元同）大和屋甚兵衛（岩井半四郎座）大坂太左衛門（竹島幸十郎座）鑑屋九左衛門（片岡仁左衛門座）四座あり、これに兩竹を加へ、更に山本、竹田の二座を加ふれば八座となる故に、樽の數とすれば右二座のいづれかゞ省かれざるを得ず。芝居開場の時刻とすれば當時の芝居は明け七ツより開場したれば、七ツの芝居とは開場の時刻を意味するなるべし。

●片岡　元祖仁左衛門のこと。大坂俳優實悪荒事の名人。「役者二挺三味線」（元祿十五年）に位附上々吉、評に、實悪の開山、京大坂に此人程に荒事をする兵なし、第一思入よし、打つゞいての座本おてがら〳〵」とあり。

●染川　十郎兵衛と稱す。同書に位附上、評によめかゞみの狂言に、家老三木之丞となり、大義の爲に親を討ち、其の申開き理を責めたるせりふに見物を泣し、評判の高かりしとあれば、「せりふに泣いてくれよ」といふ文句に相應せり。

●飛彈掾　山本土佐掾の門弟、始め彌三郎といふ、手妻人形の名人にて飛彈掾と受領す。岡本文彌の淨るりと並び立て伊藤出羽の芝居を賑はせり。

●お島の心中　未詳。

●篠塚　次郎左衛門のこと。實悪の名人。寶永正德世盛りの大坂俳優始め實悪にして後立役となる。

●岩井半四郎　二代目なり。元祖の實子にして幼名龜松。「二挺三味線」の評に、「女方若衆方を勤めすまされ、當顔見せより角前髮似合まして、さぞや古半四郎殿（元祿十三辰年歿）草のかげにて御滿足と存るは打續いての座本云々」。

●葛蒲草　芳澤あやめのこと。元祿十六年「役者色三

此思ひをばよも知らじ、去歳のお島の心中の、其井筒屋に我が今、フシ重ね井筒と篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひ臺詞の菖蒲草、露の音しも御身と我が、フシ積る涙の雫かや、西に嵐の吹晴れて、空は冴ても我々は、戀慕の闇に暗がりに、よしなき事を仕出して、東の果に名を流す

味線」に給金三百兩年廿六、評に、「當世はやり出しの女形、なんぼ五月雨のくらい夜にまぎれても上々吉のあやめとは見える、このよし樣に逸慢涙まじりの恨永々しき事をいはせてはてんと八幡有ものではない」とあり。憂ひせりふといふは此の事なるべし荻野八重桐、水木辰之助と芳澤あやめとを當時女形の三幅對といへり。

●嵐　三代目三右衛門のこと。元祖は攝州四の宮四崎新年といふ浪人の子にして江戸にて魚問屋を營めり、性來芝居を好み有德なるより太夫元となり、西崎三右衛門といへり、一年小夜嵐の狂言に大當せしより、世人嵐々と呼ぶを、遂に苗字となし、嵐三右衛門と改め、大坂三代の座元にていづれも上手と呼ばる、丹前六法の所作を家の藝とし、其の頃他國人の大坂に來るもの、嵐三右衛門の芝居と四天王寺の塔を見ざれば恥とせし程なりと。（南水漫遊）

●戀慕の闇に云々　八百屋お七の祭文、「八百屋の娘お七こそ戀路の闇のくらがりによしなきことをしいだして、御代官所へ申上」の文句に取りしものなるべく、「それに劣らぬ歎きぞ」といふも、お七と比較しての詞なるべし。

●吳竹節の枕詞。

●鰐口　鰐の口を免るゝをいふ。

●五逆の提婆は天王如來　五逆は父を害し、母を害し、羅漢を害し僧の和合を破り、佛身の血を出す

それに劣らぬ歎きぞと、フシいとど思ひに吳竹の、節を習ひし淨瑠璃も、餘所の事よと慰みしが、チクリ今身の上に降る霜の、一足づゝに消失せて、死にゝ行く身のあぢきなや、あれ見返れば人聲の、我を尋ねて高津の町を、急ぎ遁るゝ鰐口や、賴みをかけし御經の、此三界の衆生は、皆是れ我子と聞く時は、親諸共に至るなりけり、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、五逆の提婆は天王如來、龍女も成佛する時は、

ないふ。提婆は提婆達多のことにして惡逆を行ひ、如來を害せんとせしも、遂に妙法の力によりて天王佛となりしといふ。

●龍王も成佛　八才の龍女の佛化を得しこと。これも妙法の力によれり。

●煩惱菩提　提婆の惡逆も、龍女の罪業もみな法華經の功力によりて成佛するは、取も置さず煩惱即菩提なりと。

●只此の七字　法華經は六萬九千三百八十四の字數なれど、詮じつむれば南無妙法蓮華經の唯七字に過ぎずと。

●蔓陀羅　日蓮宗の蔓陀羅は七字の題目を中心とし、その左右に諸佛の名を記せしものにて、即身成佛の本尊とす。梵語、雜色の義にて又まんだともいふ。故にまんだらと續けたるなり。

●大佛殿の勸進所　正法寺よりは北の方、高津上鹽町に、當時南都東大寺再建の勸進所ありき。

●身を捨る藪　「子を捨る藪はあれど、身を捨る藪はなし」といへる諺によれり。

煩惱菩提となるぞ賴もし、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、六萬九千三百八十四文字を、只此七字におさまりて、大蔓陀羅やまだら雪雨にも風にも詣で來て、朝は現世、夕べは後世、此世彼世の二面、今宵一ツに楢の葉の、影は浮世の塵芥、共に命の捨場ぞと、大佛殿の勸進所、フシ身を捨つる藪となりにけり、地涙に迷ふ其中にも、男はさすが男にて、詞なふ世間を聞けば女先立ち、男は跡に死損ひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上に死恥ぞや、地先づ我からと脇指を、拔んとすれば抱き付き、なふ待つて下さんせ、今死ぬる身といひながら、大事の夫が目の前で、朱に染つた體を見ば、氣も狼狽へ目もくれて、如何してか

●なから死　半死のこと。

●石の鳥居　高津の宮の鳥居なり。

●小橋　高津の東、味原の池の傍にある村名。

死なれふぞ、なから死して恥さらし、此方樣の死骸の帶解き、紐解き打返やし、詮議のあるをじろ〳〵と、そもや見て居られうか、わしから先にと手を持添へ、我身に差當忍び泣き、男は力涙に迷ひ、双物持つ手も弱々と、女の膝に伏轉び、フシ覆ひ重なり泣居たり、地石の鳥居の彼方より、女の泣く聲子の泣く聲、南無三寶我家の提灯、女房子供家來ども、見付られては情なし、小橋の方で死ぬまいかと立上らんとせし處へ、ハヤ道傍まで尋ね來て、間は僅か半町に、足るや足らずも因果の隔、百里も同じ如くにて、近きかひなき千賀の鹽竈フシ身を焦すこそ哀れなれ、地妻のお辰は宵よりの涙と霜に袖氷り、物言ふ力もなき中に、あれあ

●走り者も同じ。　出奔のこと。欠落といふ

●一興　反語にて怪しからぬの意。

れ夜明も近付か、鴉がいかう鳴くはいの、　詞外の欠落走者と違ふて、明日尋ねふとはいはれぬ、死に出た心中なれば、疾に命はもう無い人、あさましや悲しやな、女房子の無い人ならば、殺すまい死ぬまいものと、嘸や最期の悔言、お房が恨みも思ひやる　思へば私があるゆゑに、人二人殺すよな、位牌に向ふて言譯ない、冥途の旅を連立たんと、下人が指いたる脇差に、取付く所をもぎ放し、　詞これは一興、此子はいとしふござらぬかと、　地とぐむれば小一郎、母親死んで下さるなと嘆く聲さへ身にしみて、野邊の霜風小夜嵐、丁稚の三太もうろ〳〵涙、心中といふものは、いかふ寒いものじやとて、フシ共に袖をぞしぼりける、　地徳兵衛囁き

て、月は傾く東は白む、躊躇ふて今の間に見付られんはあさましゝ、いざ何事も宵よりいふた通りぞや、おうと首肯くばかりにて、涙に物をいはせつゝ、夫の膝をしつかと押へ、仰向き待たる口の内、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華を一つ蓮華にと、ぐつと突貫く一刀わつと叫びし一聲の、フシあはれはかなき最期なり、　詞今のは何處じや、サア知れた、　地そこかこゝか、いや〳〵南に聞えたと、谺の響きは氣も付ず皆　三重生玉へと〳〵走りける、　地見付られじと德兵衛畠の中を西東こゝに屈みかしこに忍び、今は嬉しゝ一所にと、房が死骸を尋ね寄る、道も心も埋れ井戸、踏外してかつばと落ち、水のあはれや汲上て、重ね井筒の心中と、御

●御法の水　佛法の功德により未來を助かるとの意味す。

法の水をそたゝへける

心中二枚繪草紙

解題

此の淨瑠璃は、北の新地天滿屋の抱へお島と長柄の百姓助右衞門の倅市郎右衞門とが牒し合せて、天滿屋の二階と長柄堤と場所を隔てゝ、殆んど同時に死せる事實を取組たる由、正本の奥に記せるものあり。曰く、

右上るりの儀は酉の霜月十六日夜大阪蜆川天滿屋お島長柄村市郎右衞門別れ〳〵に心中致し男は長柄堤女は天滿屋二階座敷にて相果候へ共死する時節を數珠にてくり一萬遍終る時互に相果申候由を上るりに作り節章を付語り申候此上るり語らん人々は一へんの御回向〳〵

酉は寶永二年なれば十一月十六日の出來事を翌三年三月廿七日初日にて興行したるなり。別れ〳〵に死せる事、次の挿繪にもある如くなれど、操にかけては男女別々に死するは情味深からざれば『血死期の道行』に魂魄の通ひ、二人一所に死する

が如くしたるなり。

二枚繪双紙の外題については、市郎右衞門が死したりといひ、或は死損ねて蘇生したりといひ、當時其の風説の區々なりしより、讀賣の繪双紙にも、即死と生存との二通りに作つて發表したるより、かくは名付けたる如く本文に見えたり。

曾根崎心中といひ、此の心中といひ、北の新地に情死の頻發せしは注意すべき事實にて、一鳳はこれを北の新地の繁昌に歸せり、實にや同新地は開發間もなく、俄に繁昌を增したる事なれば、斯の如き騷ぎ頻發せしといふも尤もの説なり。又一方よりいへば新開地の事とて廓の品位未だ高からず、こゝへ來る者皆とは素よりいふべからざるも、食詰め者の年を切替へてこゝへ出稼ぎする者多く、樓主の待遇もおのづから、新町等に比すれば嚴酷なるより、一つ間違へば直ぐ死ぬ氣になり、情死といへば殆ど北の特産物の如く思はれたり。即ち元祿十六年にお初徳兵衞を前驅として、翌年には『遊女誠草』に出たる丸屋しげの一人心中あり、二枚繪双紙は曾根崎と三年目にして、お初を出せし天滿屋なるは奇緣といふべし。又同じ年萬屋のお高は、老松町飾間津屋彌市と梅田にて心中せり。豐竹座に登りし『彌市お高梅田心中』は

欠

●既に今年の酉もたち戌の顔見世　此の淨瑠璃は寳永三年戌三月の興行なれども、心中のありしは其の前年酉の十一月十六日夜の出來事にて、即ち戌の顔見世中なれば、斯く書出したるものなり。

●朝木戸　昔しの芝居は概れ拂曉に開場すれば、朝木戸といひ曙深くといへり。

●翁の面　三番叟の面なり。顔見世狂言には吉例として開幕式三番を舞ふ。

●天地を動かし云々　「古今集」の序に、力をもいれずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武夫の心をも慰むるは歌の德なりと。

●火繩　昔しは芝居にて煙草の火

心中二枚繪草紙

上の巻

既に、今年の酉もたち、戌の顔見世朝木戸を曙深く提燈の、影きら〳〵と初霜の、翁の面のフシにこやかに、始まり呼ばふ、聲に引かれて、チクリ老も若いも見る人は、餘念馴染に御贔負に、よふお出やつたフシ朝日影、御代も御國も久方の、此日の本の習しの、歌を種なる歌ひもの、天地を動かし鬼神を感ぜしめやかに、妹脊も猛き武夫も、心やはらか饅頭や、菓子に火繩に番付と、賣る聲にまで節籠る、竹の紋つく道行の

欠人

に火縄を賣りし故、菓子に火縄に番附と賣歩くものゝ内に數へたり

●竹の紋つく道行　役者の紋蔓しなどを道行のやうに綴りたるを賣あるくにや。未考。

●目ぜき笠　編笠の深きもの、人目を忍ぶ爲に被る。眼の所に透しのあるもあり。

●散し太皷　はれの太皷なり。客を散すの意。

●君　君傾城又遊君などの君なり。

●天満屋　「曾根崎心中」のお初と同じ家なれば、世上に名高しとなり。

本を召せ〳〵目せき笠、チクリ笠も預る預けてござれ、紅絹の裄紐淺黄紐え、繁昌〳〵、イヤ此所繁昌毛氈敷島の、其難波津の冬籠、フシ今を春べの顔見世に、日もなが事の御退屈、はや今日のお暇と、散し太皷の下とどろき、明日はとうから唐錦、彩る空は夕陽の、山は夕の雲の帶、腰の廻の御用心、おすまい〳〵おすまい日の入りくる人や歸るさや、花山の幕か袖續く、貴賤群聚は冬ながら、心ぞ彌生と　三重なりにける、フシ中に家名も君が名も、地世上に高き天満屋の、お島と言ひて彼の里に、おはつが跡繼隱れなし、此比明石の貞と言ふ、馴染の客に揚げられ、今日は南へ連れて出る、いづくはあれど曾根崎の、由縁の芝居初樣も、定めし

●金色の身あがり　當時道頓堀にて、天満屋お初の事を狂言に仕組み、金色の身上りと外題して演じたるにや、未考。

●屋形　屋形船のこと。

●さんろの道行　「用明天皇職人鑑」にあり「用明天皇」は寳永二年三月竹本座にて興行し大入り大當りの淨瑠璃なれば、其の翌年の三月興行したる「二枚絵双紙」に噂し其の

佛金色の、身あがりと聞く外題に引かれ、終日見物慰みて、芝居果れば繋がせし、チクリ屋形に〳〵皆々乘出す、地提重開き牽頭ども、詞なんと島樣今日のさんろの道行は、本で語ると直に聞くとは又格別、詞大盡樣のお慰み、船の着く迄道行を、所望〳〵とどよめけば、イヤこりやよかろ己も島の一弟子で、餘程節は覺えたが、追付島を引摑み、國へ連れていつたりとも國元は堅い所、こんな遊は成りがたし、此船中をぶら〳〵と、唯行くも愚痴の至、ヲ大坂の名殘に些と聽聞致したし、サア皆つげやゝと言ひければ、供の丁稚が懷中の、本取出してお島に渡し、東西〳〵　詞此所がさんろ草刈の道行、地師弟連節東西〳〵、歌おきに戀路の〳〵まだ

道行の文句を取りたるにて例の場當りなり。

●師弟連節　明石卓がお島の弟子といひし詞あれば、帮間等が師弟連節とそゝのかしたるなり。

●おきに戀路……風も昔に吹き皈れ　これが「山路道行」の文句なり。此文句の解は『用明天皇』に讓る。

いろは船、惚てほの字の帆が見ゆる、ほの字の〳〵、誰に〳〵ほの字の　フシはつを花、小すげしらすげいはますげ、　地此の一むらは刈殘せ　妻ごめの夜の床にせん、塒の蟲と諸共に、刈取る鎌の鋭くも、聲きり〴〵す轡蟲、牛のくらにも音を泣きて、歸る家路を松蟲や、さらば笹原さゝがにの、秋に染　フシ糸繰出し、五百機立てしはたをりや、其藤袴破るなと、泣くか茨の蔓先きに、野飼の駒の優くも、古郷の風の北にいばへて嘶けば、越路の雪に故郷の、空を慕ひて泣く犬の、べうのゆもとはあれとかや、いかにいはんや久方の、天津雲井をあまさがり、賤の仕業はいつ君がゐにかくならで思ひきや、見しや聞きしやとばかりに、草も刈兼ね

●玉世姫　まのの長者の娘にして花人親王のおもひもの。

忍び兼ね、フシ涙をうけて研ぐ鎌の、砥石も心碎けとや、地夢にも斯くとしら玉の、玉世の姫は胎内の、まだ見ぬやゝの別れぞと、つれなき母に誘はれ、チクリ行く道筋は多けれど、笛に誘はれ妻戀る牡鹿のそのゝ法の導き、是なれや、互ひに夫と道芝の、縋るばかりの戀草も、芽は繁りそふはゝこ草、千草八千草思ひ草、恐ろし鬼のしこ草に　長地隔つる中の垣根草、力草なく泣きかはす心ぞ思ひ遣られたる、草ばし刈るな笛を吹け、野路に兩人が悔み草、毒の草をも身の上と知らぬ手元の暗さには、とうだい草を　歌思ひ出す、思ひ出ずや有りし夜の、亂れあいにし枕には桂草をぞ思ひ出す、彼のほのぐのほのぐらき、黄昏早く寢し時は、蚊屋釣

●うそよごれ　うす汚れ。

●ひけ　退けにて負けること。

り草を思ひ出し、人目思はで肌觸れて起つ轉びつさぐめして、相撲取草を思ひ出す、通路遠き獨居の、斑女が閨の寂さは、茶引草をも思ひ出し、心細しや絲薄、

歌　ゐい〳〵風かと聞けば、山の下には嵐吹く、嵐吹く去とは嵐吹く、山をはなれて風と成り風も昔に

ツシ　吹き歸れ、イヤ淨るり待や〳〵舟も留い、なんと皆は氣が付かぬか、先にから陸を見ればうそ汚れた八丈縞に、花色の羽織茗荷の丸の紋付けて、編笠着たる男めが道頓堀を乘出すから、此舟に目を放さず、跡へ下れば走り付き、先へ拔ければ立留り、付て廻るは合點いかず、地ありや〳〵又彼處に立たるは、喧嘩仕掛ける體と見た、默つて居るはひけた事、揚つて一つ詰

●詰め開き　談判すること。

●はでな人　はでは華美なことを好むをいふ。逢引をする事をいふ。

●目はじき　嘲なり。

開かんと、脇指押取り出んとすれば、島引留め、詞ハテはでな人樣じや、私等が樣な者が乘た舟は目に立つゆへ、どれに限らず皆見さんす、地なまなか咎めて一本かたげ耻かこより、ハテ彼方から見るなら、此方からも見て大樣にして居さんせと、言へども更に聞入れず、駈上れば續いて揚り、見ればいよ〳〵情夫の男これ市樣と、言はんとせしが目はじきして、詞是申此方は他國のお衆じやぞ、所の衆なら粹であろ、何を言懸けさあんしよと、言分してくだんすな、地何方の爲にも惡いぞと　ツシ　心を揉むこそ道理なれ、眞は肘はり滋面作り是や編笠、詞五度や三度は堪よふが何樣した事に舟につき、女を乘せたる船中を見るも大かた方圖が

●けつかれ　野鄙なる調使ひ、其の人柄を知るに足る。

●冷にも熱氣にも　島の淨るりが善らうと惡からうと、己れの損得になるとでなし、大きなお世話となり。

●揄非遣使　勝船がこと。「用明天皇」中にある人物にして、花人親王の執權なり。

●鹿島の事觸れ云々　鹿島の事觸は毎年鹿島神社にて天下の吉凶を占ひ、神託を齎して日本國中觸れ廻るをいふ。こゝは「用明天皇」の淨るり四段目にある事を引きしなり。即ち揄非遣使勝船が豐後まの

事ふれ
（人倫訓蒙圖彙所載）

有る、地夫程見たくば近くへ寄て見られに來た、サア我存分に見けつかれ、見よふが惡いと免さぬと フシ聲をなまつてりきみける、地市郎右衞門も差當る意趣は無けれど、當分の妬ましさ計りなれば、口論しては如何ぞと、詞イヤ申別にお腹の立つ事共存ぜず、我らも下地淨るり好折々稽古仕るが、此さんろの道行は戀を含んだ節付なるに、只今お島樣とやら遊ばした淨るりの、節は少しも變らねども、情を御存じない故か、誠の心少ふて御眞實の無い故か、地如何にしても道行が浮氣に聞へて、底意に戀がござらぬと フシ片眼でお島を睨にける、詞男嘲笑ひヤア吐すまい〳〵、島が淨るりよかれあしかれ、己が冷にも熱氣にもなる事か、どうでも外に樣子が有らふ、但し又己が言ふ戀を含んだ淨るりの、語り樣を知つたらば只今爰で語つて見よ、節が違ふと擲据るが、サアなんと語らふか、地何が扨御所望ならば語らいでは、則ちさんろの四段目揄非遣使が鹿嶋の事ふれ、島樣とつくとお聽きなされ、詞是やこなたへ御免ならふ是はお島ではござらぬ、お鹿島大明神より罷出た事ふれでござりや申す、惣じておかしまと申すには上の客が卅三人、中の客が卅三人、拙者が樣な見る影もない粕客がたつた一人、正月七日神前に於ておやおつかない誓紙を書く、其誓紙の文言に、斯樣に申し交すからは、未

〻長者へ〻、鹿島の事觸に身を變し忍び込む事をいふ。「總じておかしまと申すは」以下の文句、また其の文句をもじりて暗にお島にあてつけたるなり。

●紋日　物日ともいふ。廓にて毎月遊女の費日をいふ。さながら家々の紋の如く定りたる故に紋日といふと『色道大鑑』に見えたり。

●かつがせ　する。をいふ。　紋日の費用を負擔さ

●ひき日　女郎が身あがりをして休みたる日をひき日といふ。

●合力　力を合せて助くるを、なれどこゝは無心といふに同じ。

來までも變るまい、虛をつくまい隱すまい、勤の間外に深い男を持つまいと申す起請を取交すから僞は申さないと存じ、盡す程にける程に只今は向脛からでつかちない光物が飛で出で、巾着の扉が八文字に開け、內の首尾が八角にわれ、神馬のお馬の牽頭にも見捨てられ、大耻をかいてござある、されどもおか島大明神氏子をふびんとも思召さず、或時は餘國の大じんぐうに身請の談合を仕かけ、或は紋日をかづかせひき日の立前跡から脫る禿頭、親里の合力なんどと申して、厄介しつかいむくりこくりの上手ごかしに、むくり取られたとの地御詫宣、フシ無上しんれいしんたう加持、地是れ是が眞實戀のある淨るり、島樣よふお聞きなされい

●法界悋氣　＊

●おつしやれな　おつしやるなの訛り。

と フシ他ながらこそ恨みけれ、地男は二人が目色を見て、はて扱變つた文句じやの、詞なんと餘國の大盡に身請の談合とは珍しい事ふれ、これお島、和女は今のが面白からふが此貞は耳に立つ、迚も所望しかゝるからはまあ一節所望致そう、地お島とお身とが連節で戀の籠つた淨るりを、初段から切まで語り拔かせにや堪忍せぬと、ぎしみ廻ればお島一人が氣を苦み、詞是申此方樣程の粹樣が、是は又氣のとほらぬ、彼人と私と譯ある樣に見さんしたそうなれど、みちん左樣な事ではない腹立てさんすを面白がつて、法界悋氣に言はんすわいの、おとなしうしてサア舟に乘らんせと、手を取れども聞入れず、いやゝおつしやれなゝ、詞他

●よねづか　柄を握ると解前にあり。女郎買の苦勞人と自ら誇るなり。

●此鼻　扇又は指先にて我鼻を指し、憚りながら乃公がなどいふに同じ。男は鼻の高きを美相としたればなり。

●花人親王　卿日花人親王、用明天皇の初の御名。

●蜆川の御所　まの丶長者の舘に擬していふ。

國から登つて此大坂で、よねづかをも握る者が通例の男と思ふか、地どうでもこうでも聞かにや置かぬ、語らせねや置かぬと堪忍せぬ顏つきに、お島は難儀手に汗握り是、爰な人も誰か知らぬが餘程な、勤する身が客に引かれ、芝居へ往たが珍いか、船に乘るが不思議なか、淨るりはそなたより私がよふ覺へている、晩に此方の見世へおじやよふ合點のいくよふに、教へて遣らふと世話やけども市郎右衞門も言掛り、いや〳〵此方に習はいでも、此方の胸中にある淨るりは、此鼻が覺えて居るお聽きやれと、扇を拍て、扨もますらが此目の玉ぐつと脫出で、花人親王の、蜆川の御所の體とつくと見屆け候へば、調まの丶長者同前の大銀遣に思

●姫君　玉世の姫のもなれど、お島にあてゝいふ。

●くら屋　男女の密會宿。待合の一種。

●濱の納屋の影　總嫁に零落するといふ意。

●ますら　山彦皇子の謀主にして魔法を使ひ、毒氣を吹きかけ、花人親王方を惱すとあり。

●異形　人に異なる形にて鬼などをいふ。

はれて、金銀小袖を仕て貰ひ、深い男を振捨て、登り詰て揚句には姫君を請出すとて、地料理獻立表換眞最中と見て候、兩人が中へ某が毒氣を吹込み男と女と不和になし、同士戰の口舌をさせば姫君は見放され、はしぐ〳〵のくら屋へ下り後には濱の納屋の影、一本立にて候と フシ語りけるこそ不思議なれ、調なんと此節に違があるかと言ひければ、ヲ丶よい推量迫付お島を請けて見せう、地なんぼせいても張合ふても金で語る淨るりは、些と喉に詰らふぞこりや是見よと、お島にしつかと抱き付き、なんと腹が立つかと言へば、又扇の拍子を拍て、あら不思議やますらが行ふ魔法の形、天上に現れ出で、異形は手を伸べけんびいしがまい合を

●しどもなし　取亂したる形。しどけなやの轉。ちつしもなやなどゝ同じ。

破て退けとはたと打つ、ハア拍子にかゝつて麁相〳〵、ヤアおのれ擲たぞよ、最聞かぬと立上るを、地島は縋つてなふ情なや、是私が詫事じや、エ、供の衆氣が利かぬ、船頭衆賴みます、舟に乘せて下んせと、泣叫べば地人々は折も惡し場も惡し、是非御堪忍〳〵と、むたいに舟へ抱き乘せフシ櫂を早めて漕出す、地猶船中より聲をあげ銀も持たいで言はれざる、戀の意氣地の淨るりだて、身が前では措てくれ、おけ〳〵おけやと、舟端敲き手を敲きフシ笑ふて舟は上りけり、地市郎右衛門あたりを見廻し、ハア、我ながらしどもなや、氣が違ふたか南無三寶、一期と思ふ女房を我物顏の見憎さに、苛つは戀の癖なれども、思へば口惜斯うせい

●長柄　天滿の北、淀川の中津川に分流する三叉にあり。今は豐崎村の內。

●人の意見も馬の耳　聖賢の敎も耳に入らざるを喩へて馬耳東風といふ。李白の詩に、世人聞レ之皆掉頭、有レ如ニ東風射ニ馬耳一、とあり。

●とぼす　色を稼ぐとか。

でも、三刄では彼頰をうつけた事と思ひやせん、島が心のフシ耻かしや氣遣ひかけし可愛やと、見送る方もほの〴〵と、明石の客の乘る舟に、お島も隱れ島隱れ蜆川へと　三重

中の巻

憧れ行くフシ其名は言はじ地名を問へば父は長柄の田地持、市郎右衛門が弟善次郎なれど惡性者、人の意見も馬の耳、餘所吹く風のぶう〳〵にて、夜歩行日歩行とぼしたて、歸れば小宿で衣裳を仕換へ、稼ぐ體をば親兄に、これみやの前大根をフシ荷ふて家路に戻りける、地斯る所へ下男つか〳〵と寄て棒鼻取り、詞申善

●幾際か〳〵　節季〳〵ないくつも重れたるをいふ。

●あぢ　あぢをやるなどのあぢ。親父の手前を善く繕つて置くをいふ。

●紙花　遊里にて帯間、仲居等に鬢頭を打つとて紙を代用にするとあり。これを紙花といふ。

様、これお見忘れなされたか毛馬屋の七兵衛、エヽお前は譯の悪い、術に依て待つならば待まいものでも無けれども、幾際か〳〵今日遣らふ明日遣らふ、假初ながら五百目餘り五匁も埒明かず、夫に夕も隣までお出なされ、此方へは音信なしあんまりな爲され様、今日は親御様へ直に申して取て來いと旦那が申付けました、

詞　斷りましたと入る所を引留て、こりや聞こへぬ日比の己じや知らぬかい、五百目や壹貫め今でも遣るは合點なれど、

詞　親仁が手前をあぢにして、末永ふ出よふ爲、少しの銀を延引した、そちが差配で二三日何卒賴む、ヤアいつやらの紙花も思ひの外に遲なはり、

地　面目ない〳〵、これも拂と一度に遣ろ、今改めてこりや

●しらごかし　しらは白化の畧にて、遊里にて人を欺くをいふ。こかしは粹ごかしなどのこかしに同じく、しらん〳〵しく虚言をいひて譏弄するをいふ。

●花車　揚屋の妻女をいふ。

●仲居　茶屋にて座敷の掛引諸事を取捌く女をいふ。

●仕着　四時衣服を與ふるをいふ。但し廓にては重に正月元日の晴衣に取らするをいへど、こゝは唯衣類を遣す約束をしたといふに過ぎず。

●ちう　中途のこと。

●じやうぢう師走　いつも節季となり。生計苦しく懸取りなどの絶えず來るをいふ。

●編笠島　上福島の内にて、梅田橋の北、蜆川に沿ひ今上砂町と稱する所昔しの編笠島なりと。「雜波丸綱目」に、上福島は曾根崎新地三丁目の西の端より下梅田墓所への道より西側の分は上福島の土地にしてあみがさ茶屋あり、此所雀すしの名物あり蜆川の末なり」と

ばつとうちなをすはと、捻て出せし鼻紙のフシしらごかしこそ笑止なれ、

地　所へ駕籠の長介來り、

詞　私が請合の菱屋の花代津の國屋の料理代、合て三百四十五匁六分、扨も〳〵せがまれます、其上お前は當もない花車や娘仲居にまで、仕着をして取らせふと約束計りでまいらぬ故、私がちうでも取たかと毎日毎夜の使立、内はじやうぢう師走にて何共迷惑仕る、今日は是非に請取りませう、それにならずは、親旦那へ訴訟申すと

地　いふ所へ、五十餘の女房綿帽子にて顔包み、編笠島の笹屋の嗅でござんすると、御人體とも覺へませぬ我等が僅の商賣の、元手も利くいの月おどる、どじやう汁のしゆらい代、取切る間は何所迄も着き纏はるゝ藤の

あり。「鶏鶏ヶ柚」平安堂の跋に、「京の祇園の文字が献立には雁も鯛も古めかしく編笠島にはちぬ鯛龍と成て天上すしとあれば、正德頃既に榮えたる場所たるを知る。但し此の文句にて、大阪場末の遊女町なりしとも想像せらる。天保頃版行「諸國遊女競」といふ番附のうち大阪編笠茶屋とあれば、近頃まで繼續せしを知るべし。

●御人體　身分のある人。市郎左衛門は素封家の息子なればなり。

●利がおどる　高利貸借の用語、利息の重なる事を利がおどるといふ。

●しゆらい　「俚言集覽」に曰く、大阪詞にて、雜用なり、諸色入用なりと。

●薩の棚　谷町筋玉木町和跡院境内にあり。本尊觀世音にして大阪三十三所第十一番の札所。

●九間　新町廓九軒町のこと。

●水茶屋　飲水煎じ茶など賣りて往來の人を息はする所を水茶屋といひ、色茶屋と區別す。

●げんどんそば　＊

●つきともない　聞きともないか。

●じうさう　十三と書く。梅田の

棚、谷町からと言ふもあり、九間のおろせが揚錢の、殘りも今日はすつきりと取つて九兩二分の銀、道頓堀の水茶屋の、或は温飩けんどんの　フシ　そばで聞くさへ笑止なり、　地　善次郎もてあつかひ尤も掛は負ふたれども、　詞　節季でも有る事かつきともなひ今日に限り、此樣にせがむのはム、合點じや〳〵、兄市郎右衛門の呆氣者、天滿屋のお島にぐはらりとかたはなうちあけて、親仁の機嫌散々にて半勘當の身となつた、夫と聞いて我迄を氣遣ふと見へたが、　地　兄とは格別斯んな銀譯惡ふする男でない、親仁に言ふなら言ふて見や一文にも成るまいが、遲ふて此月一ばいに濟まそといふから嘘はない、じうそう國島北南の長柄で男と言はれたる、

北、西成郡成小路村の内、十三の渡場あり。

●國島　柴島と書く。西成郡西中島村の内。長柄の北にあり。

●霜月　十一月の異稱。

●冥加錢　神佛に寄進し又は施與に用ゆる金。

●お勤め　佛前にて讀經すること。

●自力　他力に對していふ。自力は自分の力なれど、佛語にては人間の力を意味す。

●御恩德のお影　佛のお影をいふ。

●新地狂ひ　新地は蜆川をいふ。遊女狂ひといふこと。

●身體あげ　身代を入れあげる事。

善次郎じやがなんと見た、　詞　僅二百目内外で捨てる善次が名ではない、親仁に言ふて此善次を勘當させて腹いるか、但は自然に銀取るか勝手次第と投出し、　地　立派に言へば掛乞共いかなれ嘘は長柄川、砂にはよもや成るまいぞと、幾日〳〵の日切して　チクリ　皆々宿所に歸りける、　地　親介右衛門は六十餘頭に積るお霜月、講中お茶所の冥加錢、殘らず爰に持ち集まり、お勤過ぐれば表に出で、介右衛門言ひけるは、　詞　何も講中難有いと思召せ、毎年のお霜月懈怠もなふ上ぐる事、自力では叶はず御恩德のお影なり、扨去年の通り此銀を、兄市郎右衛門に持たせて京へ遣る筈なるが、在所で沙汰も聞かれつらん、新地狂に身體あげ、方々の借錢堤際

●興がる　興があるの畧にて、面白しといふ事なれども、こゝは反語に用ひ、笑止または氣の毒の意。

●掛硯　掛子引出しのある硯箱。

の田地をも、七百目の質に入れ四貫めの手形したと聞く、斯した性になるからは一錢も持たされず、あの弟めは一日でも居らねば年貢の埒明かず、身共が登りませうと言へば弟は律義な顏つくり、太義ながらそうなされ、地ア、何も性の能い兄貴にて、年寄られて親仁の苦勞でござると言ひければ、夫は興がる今聞いたと　フシ頭を振り顏を蹙めける、地介右衞門重ねて白銀五百目貳包、小判廿五兩壹歩合せて四十切、改めて預つたと數讀み揃へ懷中より、掛硯の鍵出し引出開けて、金銀取入れ錠おろし　フシ鍵を袋に入れにける、地時に表へ駕の者賴みませふと言ひければ、どれいと言ふて妹のお吉何所からの使といふ、私は蜆川天滿やのお島

●あたしたいるい　あたは嫉氣を表する接續詞。あたしつこい、あたいやらしいなど。したいるしは、女ののろけなど聞くに堪えざる場合にいふ。

●鼻紙袋　＊

樣より市郎右衞門樣へ急な使に參つたり、此文進ぜて下されませと高聲に言ひければ、ア、爰な人高い聲さつしやんな、地兄樣は夕からまだ歸られず、私が預り居けませふ、お歸り次第賴みまするとフシ言捨てこそ歸りけれ、地介右衞門聞付けてお吉今のはなんじや、詞イヤなんでも御座りませぬ、なんでも無いとは己等迄が一ツになつて地親の目を拔居るかと、文捻たくつて是何も、詞田地賣らせた女めが、市樣まいる身よりとは、はて扨々あたじたいるい、皆の手前も面目ない、地待て己どうすると、鼻紙袋へ文をも入れ、ぐるぐる卷し小撚より、細きお島と一命のフシ終る端とぞなりにける、地講中も挨拶なく男の子は何處もそれ、先お

暇申しませう、なんと太郎兵衛若い衆がよね〳〵と言ふ程に、どうした事と思ふたが、田地を賣つて買ふ故に、それでお山をよねと言ふ、今講釋が聞へたと、堅い輕口言ふて歸れば、介右衛門も苦笑ひ チクリ 奥の〳〵間にこそ入りにけれ、 地 善次郎は只一人外の事は耳にも入らず、一心不亂に掛硯の銀に性根を奪はれて、徐りと立つて錠前を、押て見引て見捻て見て奥を覗き表を見、箱口取てもち上れば、慄ふてどうど打落し、我とおびえて飛上り、種々樣々に盜み樣 チクリ 工夫するこそ恐ろしき、 地 ヤ、忝い鍵の入れたる鼻紙入親仁が忘れ置かれたり、引解き鍵取出しまんまと明て、鍵は元の紙入に初の如く納め置き、掛硯の引出明け二包の白

●一心不亂　わき目も觸らぬこと。

●おびえる　夜夢に魘はれて叫ぶをおびえるといふ。善次郎我と硯箱を取落し、其の音にて喫驚りして聲立るなり。

銀を、下懷へ押込んで小判は頭巾にぐわらりと入れ、裸壹歩を手に握れば奥より親の聲として、善次〳〵と呼懸くる、あいと言へども此壹歩、置所に動轉して口へ入れたり目へ入れり、狼狽廻つて釜の上なる御酒德利へ、ざら〳〵と移し入れ、フシ 親の前へぞ出にける、

地 斯る所に市郎右衛門内へ歸れど敷居高く、心措かる家來まで何も野畑へ出たれば、誰に首尾問ふ便もなく上り口にとほんとして、寒さは寒し酒一ツと膳棚捜せど酒もなし、ヤア荒神の御酒がある冷でも一ツ戴いて、胸のもや〳〵晴らさんと、茶碗引寄せ次きければ、こりやどうじや、酒の中より壹歩が湧く寶の泉か難有いと、皆打明けて是は夢か現か、三寶荒神の御利生か

●裸一歩　裸金、紙にも包まざるをいふ。

●荒神　惡人を治罰するといふ天竺の神。昔しは何れの家にても竈の上に荒神を祭る風俗あり。大家には別に大竈を築き、其の上に松の生花を立つ、これを荒神松といふ。

●そうでない　そういふ風ではあるまいの意。

死したる母の御授けかと、嬉いやら恐いやら分別に能はねども、久々で金けに逢ふた先めでたふ壹歩のうは汁吸ひませふと、戴き〳〵ぐつと飲み、壹歩を紙に押包み、フシ懐に納めける、地黄金は人の身を富ます寶なれども此身には、命を刻む刄となる、善悪こそは哀なれ、詞所へ善次ひよつと出で、ヤア兄者人お歸りか、推參な御意見なれども、お身持がそうでない、親仁も機嫌さん〳〵の上蜆川の何處からやら、悪い所へ文が來て、親仁が見付け、地それそこな鼻紙袋に入れ置かれた、我らは南の御堂へ親仁の使に參るなり、跡で首尾よふなされと言へば、市郎右衛門は肝潰し、是はと呆れ居る中に善次は密と後手に、御酒徳利を隠し取り

●天魔　悪魔のこと。魅るは狐などの憑ると同じく、天魔が憑つて心が全く以前と異なれるをいふ。

●餘の悪性　遊女狂ひのこと。遊女狂ひなどは若氣の至り、まだ〳〵恕すべしとなり。

●一文一字　錢が一文、又計算が一字の意。

表に出て押し戴き、一さんに駈出でし心の内こそおかしけれ、地斯くとも知らず市郎右衛門常々不和なる弟の、流石恩愛なればこそ、能くも知らせて有りけると、鼻紙袋の紐を解き文を捜す所へ、詞親つか〳〵と出で後に立つて、それは何する市郎右衛門、地はつと驚き飛退り差俯向てぞ居たりける、詞介右衛門聲をあげ、己は天魔が魅れたか佛罰が當つたか、余の悪性は若い者有らふ事とも言はれうが、あれ掛硯の口明いたり、鍵を入れたる鼻紙袋明けて我に見付けられ、仰天するは盗人な、身が銀ならば親の慈悲、沙汰なしにもして遣らふ、身の油にて講中が、御開山へ奉る御茶所の銀じや盗人め、一文一字違ふても己が生けて置かれうか、

欠

我等一人は縁者の證據それ〳〵講中組中と、呼ばはる聲に向ひ隣、一在所が駈集まり、フシとざまの詮議ぞ是非もなき、介右衞門大きにせき、サア何もの目の前で、掛硯を開かんと引出し見れ共金銀は、一錢とても無かりけり、介右衞門地團太踏み、涙を流いてエ、口惜や、何代か此家にこゞとの有つた例もなし、歳六十に及んで一在所と言ひ講中の、大口小口動かする己ばかりが耻と思ふか、盗人を捕へて見れば我子なり、此手間で是程のよい事を仕たならば、親の身ではどれ程の自慢で有らふと思ふぞやれ、成人の子を持てば親の心安めぞと人も言ふに己には、寢た間も心休まらず、揚句に斯る大事を仕出す、内で斯した心からは、外で何がな

●けなるや　浦山しやに同じ。

は酒に醉ひくづおれ、ひよろりひよろりとなまになり、近江屋出て濱筋や、今宵一ツに三づ川越えんと思ひ詰めたれば、心にはたと戸をたつる、風呂屋の前にて善次に逢ふ、ひらりと外すをちらりと見て、是善次様〳〵手が悪いと、よろ〳〵と縋付いて、調此方さんな聞へやせんぞゑ、前はさい〳〵ごあんして何が恐ふて逃げさんす、是兄嫁の島じやいな、たつた今迄近江屋で兄さんと逢ふて居て、今日の樣子を聞きやした、大事のおれが男が勘當請けてござんしたりや、胸が痛ふて些の酒で舌が廻らぬ、此方さんは弟の身で、けなるや機嫌がよさそうな、禮言ふ事があるござんせと、胸倉取て引て行く、善次はいづれも頼みます、頼みます

欠

ると仰向にそり、引きずらるれば下女下男是は島様なんぞいの、サア内じあ這入らんせと、無理無體に押入るれば、上り口にひよろ〳〵と、かたみを頓と横に投げ　地水給やとて臥にける、　地夜こそ更くれと一町の行燈仕舞へば天満屋の、締たる門口暗夜に、善次は島が心根の、恐ろしければ格子の影　地身を引きそばめ立聞す、　地市郎右衞門は近江屋の人目にせかれしか〳〵と、死際の契約せず、便もがなと門に立ち、弟ありとも知らざれば、弟は兄があるとも知らず、傾く月に東向き、暗き格子を隔にて、内の様をぞ聞きにける、　詞亭主夫婦これを見て、島はいかふ酔ふたそうな、是にて休みや、お島〳〵と茶を汲で一ツ呑みやと言ひけ

●不躾　禮義を知らぬをいふ。禮義作法の躾を缺けるをいふ。

●胴慾　貪欲の音轉なるべしと。

●生身は死身　生ある身は何時死するとも限られぬなり。

れば、　詞あい〳〵是や忝いと戴きて、ほんに誠にお主たる身が勿體ない、大事に掛けてくださんす、是を思へば勤の身が、心中などで死るのは、お主へ對して不躾、損を掛かるは身の罪科さりながら死だ者が生返り其いり譯を言ふにこそ、命に替る者はない、夫を捨て身を果すは、言ふに言はれぬ詰まつた事、憎まふ者でもござんせぬ、　地斯う言ふて私が心中する氣は無けれども、爰にも前の初様に手ごりの事も有る故に、こりや前書の話ぞや私が馴染の市様の勘當は、弟御の無實の難を身にかづき、所の住居ならぬとよ、これはなんたる胴慾ぞや、私等が今の此勤、伊達にもはでにも身の爲でも一日片時なる事か、親兄弟の可愛ゆへ、面白

●末期の水　息を引取る時呑ます水。

●管まく　酔ふてクド〳〵しく譯も分らぬことをいふを管巻くといふ。

●泣上戸　酒に酔ふにも種々の癖あり。怒るもの、おこり上戸といひ、喜ふもの、笑ひ上戸といひ、悲むもの、泣上戸といひ、これを三人上戸といふ。

からぬ勤をも、つらいと一度言ひ遣らぬは、詞親兄に苦を掛けまいため、地斯程大事の親里の、貧苦を助けしお主なれば、御恩は更に忘れねども詞生身は死身殊に又、此比酒に當てらるゝ、地若頓死でも致しなば、下された茶が末期の水と、管まく體に紛らかし、わつと計りに堪へ兼ね、しやくり上げたる泣上戸と、人目に見せし下心、市郎右衛門は忍び泣き、弟は身の悪顧みて耻て悲む悔み泣、心は三ツに替れども同じ涙に曇る月、フシ時雨の闇の本意なさよ、地人影見てや町内の犬吠渡れば兄弟は、見付けられてはあしかりなんと、フシ東西へぞ逃げ去りける、亭主夫婦は氣も付かず、管をまかずと早ふ寝や、皆々仕舞へと言ひければ、あ

●小夜格子　＊

●しはぶき　咳拂ひなり。

●柄つけの鏡　昔し女の持ちし鏡には圖の如き柄あればしかいふ。

鏡（訓蒙圖彙所載）

いと答へて箱梯子、上りかゝつて旦那樣内儀樣、みんなさらばや〳〵と言捨て二階に上りける、詞下女フシは見上げてハテ小きびの悪い聲つきじや、長兵衛門もよふ締やゝ、有明の消えぬ樣に油もたんと指いてたも、消えてもこちは火は打たぬ、地己には火打が禁物じや、打音聞てもぞつとすると　チクリ吃きてこそ〳〵臥しにけれ、地稍鎭まれる小夜格子、市郎右衛門は立歸り、軒の下にてしはぶけばお島は夫ぞと二階の窓、覗けど我が姿は見えじ、聲を立つべき樣もなく、柄つけの鏡差出し、星影映してひらめかし、爰に有りとぞ知らせける、夫も心得扇を拔き、聲立てられねば金物の、光に物を言はせては、招き合ひ〳〵我と我身を抱締て、齒

を喰詰て歎きける　地深き思ひぞあぢきなき、　地弟の善次郎島が詞に發起して、惡心を飜し兄の命を助けんと、爰彼處と尋ね歩き元の格子に走り付き、兄は人ぞと立隱るれば、善次郎門を叩き、　地長柄の市郎右衞門は是には居られ申さぬか、近江屋にて尋ぬれば、はや歸られたと申さるゝ、　地御存じないかと呼ばはりける、内よりは喧しい、夜更け廻つてそんな人は知らぬと言へば、南無三寶と走り行く、斯くと心を語りなば死なで止みなん二ツの命、隔て疑ふ因果と因果定まる業ぞ力なき、彼奴追駈けて討つて捨てんいや〳〵見苦し、最期の邪魔と心を鎭め小聲になり、サア夜明も近づく人立あり、一所と思へど詮方なし、我は在所の堤にて

●陽炎　蜉蝣の一種、其の日に生じ其の日に死するものゆゑ、死の果敢なきものにかけたるなり。

●命二つに數珠二連　これは間の山の文句を取りたるなり。

最後の所は替るとも、連立つ道は唯一筋今より珠數を繰初て、一萬遍に終る時夫が互の合圖ぞや、追付待つと言ひければ、合點しましたさりながら、同じ枕に死たいなあ、心はついて往きませふ、チヽ、我とても其二階顏を並べて死たいなあ、心は跡に殘るぞと憧れ出る玉の緒の、互の目には見えねども、殘し置くのと連行くと、兩刄にするする剃刀の一刀の亂れ燒亂れ心は　三重

血死期の道行

死神の、導く道や陽炎の、果敢なき蟲も偶々は、朝の露に生殘る、夫よりも猶あだくらべ、是を限りと百八の　チクリ　數とる　歌　度に繰盡す、命二ツを數珠二連、是

●夜這星　流星のこと。

●松と梭桔との連理の森　＊

●お初徳兵衛の其のあか月の時の流行歌なるべし。　當

が冥途の（フシ）迎ひぞや、見送る軒と見返る野邊と、中に飛びかふ夜這星、行て歸らば傳言ん、出て返らぬ魂の、（地）憧れ添ふとは知らねども、傍に夫の有る心、夫はお島と連立ちて歩む心の伴連は、目にちら〳〵とまぼろしの此は其人か、實かと抱き付けば仇し野や、風ぼう〳〵たる閨の戸に、どれ市樣はお島はと尋ぬる袖にふる涙、（フシ）夜半の時雨となりにけり、（フシ）是こそ曾根崎天神の、松と櫻櫚との連理の森、書集めたる言の葉の、餘所に聞しも今は又餘所に嵐の身にぞ染む、お島も同じ我庵は、（歌）お初徳兵衛のそのあか月の、夢も破れてまた間もないに、心中すぐせの報の業か、夫のみならず親方や、親の苦勞と思ひは知れど、男死せて見

て居られうか、女房先立て存生あらば、それや犬猫も同じ事、同じ中にも鹿となり、（フシ）鴛鴦と生れて女夫池、生る間もなく身を果し猶や藻屑に埋まんと、又一向の憂涙落ちて三途の川となる、男心もくれはてゝ、（地）西か東か何處ぞと月に向へど我影の、映らざるこそ不思議なれ、女も向ふ灯火の、壁にも窓にも障子にも、我影見えぬ怪さよ、アヽあぢきなや果敢なやな、實や人の物語に、死する時節は人玉飛んで、其身の影の無きと聞く、嘸やお島も、市樣も、かくぞ最後の近くと、合圖の數珠の念佛の、一萬遍も繰詰て（フシ）九千遍にぞ早なりぬ、心細くも、便なや今千遍の命の内と、思へど我身は思はれず、先には如何いかにぞと、案じ交せ

●明星　金星のこと。此の星日の出の前にも、日の入の後にも見えて、他の星より赤く耀く故に明星の名あり。其の曉なるを明の明星といひ、夕なるを宿の明星といふ。

る互の形　フシ茫然とこそ現れけれ、地夢か現か空蟬の、もぬけの玉とも知らばこそ、こは何としていつの間に、一所に死ん嬉やと、縺れ取りつき縋り合ひ、誠の形影の人、歎けば歎き泣けば泣き、こひにせぐりの玉の緒の、己が思ひにたぐられて、一里の道は隔たれど、フシ鏡に映す如くなり、地月は白みてあか月の、あれ明星もさしのぼる、近く最期一筋に、一ツ蓮と願へども、思へば〳〵我身の科養子の親には疎まるゝ、實の親の有とても親知らず子知らず、假令冥途で逢ふたりとも、何を印に誰をか見ん、惡業深き我身やと聲をあげてぞ泣居たる、お島が心の歎には、一人の母の老の世に、いつかお主が年明きて、せめて一日片時なりと

●吉原　西成郡天滿池田町の北にあり。七墓の一。
●梅田の墓　＊
●餘所の無常　吉原や梅田の墓に煙の上つてゐるのは、餘所の無常、死ぬるものは我々のみにあらずとなり。
●六ツの巷　六道のこと。冥途に六界（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）へ行くべき別れ途あり、六道の辻といふ。

も湯水取られて往生せんと、是のみ一ツの願なりしに、病で死するは是非もなし、いとをしや母様の、藥呑めや灸せよ身養生して勤めよと、地大事にかけて下されし、此身體をば血に染めて、明日は堀江へ使たち、呼寄せ母の目に見せば、死入る樣の歎の顏、今見る樣で、聞く樣で、思ひ過しの胸の中、五體の涙締寄せて　フシ手にも、袖にもせき餘り漲る瀧に異らず、爰に燻るは吉原よ、あれにふすぼる梅田のはか、余所の無常の煙を見るも、明日は我身も何處の雲、何處の煙と立ちのぼり、誰に此骨拾はれん冥土は六ツの巷ぞや、迷はぬしるべ彼の煙の、消えざる内に我々もと、夫が脇指拔く形島がまぼろし後れじと、用意の剃刀横たへて、サア

●一そく　一息なるべし。

●經絡六脈　體中に流動せる脈絡のこと。

只今ぞ一足も早かるな遲かるな、手に手を取らんと思へども、まだ死で見ぬ死出の旅、連れだとふやら連れまいやら、逢はふやら逢ふまいやら、二度生て生顏を見るは此世の限かと、物をも言ず面影の顏をしほ〳〵、見合せてわつと消入り泣居たり、地ヤア後れるな後れませぬ、合點か合點じや、南無阿彌陀佛を忘れまい、南無阿彌陀佛と喉笛に、がばと突きたて兩手をかけて、くるりとゑぐれば兩方の フシ 面影消えて無かりけり、地無慘や二人はなから死、男は女の姿を尋ね、女は市樣〳〵と、のつゝ返しつ苦みの、くらむ眼に手を伸べて チクリ 尋ね迷ふぞふびんなる、地終に一そく切斷の經絡六脈絶〳〵に、息の通路ふつゝと切れ、うんと計り

●いざよひ　ためらふも。それより十六夜の月をいざよひの月といふ。日暮より少し後れ猶徐ひて出る故なり。此の心中前に記するが如く、十一月十六日の事なればなり。

●生死二枚の繪草紙　此の心中について、當時市郎右衛門の死んだ噂と、半死にして助かつた噂と二説あり、繪草紙に賣出したるも、版元の見解にて世説の如く二樣に出したところから、直ちに外題に取りて「心中二枚繪草紙」と命じたるなり。

を此世の名殘、いざよふ月の朝霜と フシ 一度に命は絶てけり、地弟善次は川端に捨てし衣裳と書置を、拾ひ驚き駈付けて、見れば敢なく事切れたり、南無三寶と歎けども詮なし効なし面目なし、切ては兄の報恩と、耻も骸も衣裳に包み、負て一先立退きける、扨こそ世上に此男死だ風説死ぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に、戀路の回向をうけにける

丹波與作

解題

此の淨瑠璃は寶永六年六月廿四日初日にて『丹波與作待夜小室節』と外題して出たるを始めとす。其の後正德二年三月四日初日「傾城掛物揃」の切に出たるは二度目の與行なり。此の時外題だけ『丹波與作』と改めて出したり。校訂の際小室節の正本を得ず、二度目の時の正本を以てしたれば、外題も之に從ひたるが、內容には少しも變る所なし。

與作と小萬との實說及び關係は詳ならず、これもおまん源五衞、お夏清十郎、檜權三等と同じく、古き巷說に傳はりし事實を本としたるなるべし。元祿十七年版の『松の落葉』卷四に「與作踊」「馬子踊」等の小唄ありて、いづれも丹波與作の事を作れり。關の小萬の事も其の頃の小唄にあり。故三木竹二氏は「善光寺與作」といふ正本を得たりとて、曾て『新小說』に紹介せられたり。其の說に據れば、「善光寺與作」は近松の

作よりも以前のものゝ如しと、果して然らば此の淨瑠璃の種本となりしやも知れず、されど予未だ其の淨瑠璃を見ざれば、唯其の事を記して他日の參考に資するのみ。

趣向については、侍女が唄ひし「江戸三界といふ小唄の文句「山も見えざるかりそめに江戸三界へ行んしていつもどらんす事ぢややら、殺しておいて往んせの」といふを聞きて、幼き姫君急に關東へ下向する事を嫌ひ、お乳の人はじめ持餘したる所へこれも幼年の馬士が道中双六を振りをるを連れて來り、御覽に入れしに道中の面白き事を思ひ浮べて、忽ち御機嫌の直るは、照應頗る妙といふべし。それより滋野井三吉親子の對面となり、子は一徹に親子の名乘りをせんとする、親は馬士風情と名乘り難き大切の身分にありて、其の子を宥め賺して去らしむる所人情の至微を寫して悲哀を極む。饗庭氏も評せられたるが焉馬が『先代萩』は、型をこゝに取りしなるべし。鶴千代君は調の姫、千松は三吉、政岡はいふまでもなく滋野井なり。最も滋野井は、後々まで滋野井にて歌舞伎にも演ぜられぬ。近松作中最も人口に膾炙したるものゝ一なり。

●大名に生るゝ種の一粒　此の世に生るゝ人種は數限りもなきとなれども、其の多數のうちより特に大名と生るゝは實に一粒選りとなり武家全盛の當時、大名は四民羨望の府となりしなり。『日本永代藏』に「諸大名にはいかなる種な前生に蒔給へることにぞありける、萬事の自由を見しときは、目前の佛といふてまた外なし、さればとよ世に大名の御知行百二十萬石を五百石どり釋迦如來入滅此のかたいまに永々勘定したて見るに、これを取り盡さじといへり。

●何萬石や幾萬人　何萬石は知行高、幾萬人は領内の民の數にて、大名と生るれば生れながらにして職祿を食み、大勢の人に敬はるゝ

丹波與作

近松門左衛門作

上之卷

大名に生るゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、胎の内からうやまひて、持囃したる舌鼓たんばの國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、フシしらべの姫はお國腹、地金水引の初元結、まだ十歳の裲襠も、すらりとしたる生れ付、東の高家入間殿より、御養子分の約束にて、莟からとる花嫁子、御迎ひの諸侍五千石を頭にて、騎馬が廿騎稚兒醫者は御輿つき、大上臈小上臈おさし抱き

果報いみじきをいふ。

●舌皷　旨き物を喰ひ舌打ちするを舌皷といふ。但しこゝは持囃すといひしより舌皷と受け、皷の縁にて其の音のたん丹波と引きかけたるなり。

●お湯殿の子　大名高家の浴室などに給仕する女に、殿の手がかゝり産せたる子なり。

●お國服　は在國中に儲けし子といふを。

●初元結　元服の時に髪を結ぶ紐にて、本來は紫の組絲を用ゆるとぞ。しかし愛け姫君の江戸へ下り給ふにより、初めて髪を上げたるの意なるべし、其の紐は金水引なり。

●またもの　陪臣のこと。本來は朝廷より諸侯の臣をさしたる語なれど、こゝは家臣の義。

●研出し蒔繪　金銀の粉を蒔き付けたる上に漆をかけ其の上を磨きて下の色を陰然現したるもの。

●時代の金襴　長刀袋傘袋の裂地が、鶴菱より大内桐まで時代裂の模様なり。

●臺所荷は次傳馬　庖廚具、寢具凡て雜具は宿次ぎの傳馬に托し、乳母御乳の人、中老下らうの供乘物またもの駕はいろは付、以上四百八十挺金銀瑪瑙枝珊瑚珠、研出し蒔繪の長柄の笠長刀袋傘袋、時代の金襴鶴びしたすき、花うさぎ、窠に霰大内ぎり、覆ひかけたる挾箱濃紅の大紐を、高々と結びしは　フシ　盛の牡丹に異らす、　地　臺所荷は次傳馬、御葛籠荷物は通し馬、三十駄の馬方の小歌が鳴つて小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも

フシ　金にあかせし吟味なり、　地　刻限は巳の上刻との定めにて、御迎ひの奥家老本田彌三左衞門、數献の盃足元はよろ〳〵と、猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も、しゆちんの裁着りゝしげに、

詞　何と〳〵御供廻りが揃つたら、お先手から乘出めさ

御葛籠荷衣服其の他重要の物は通し馬にて送るとなり。

●小歌が鳴る　雲助馬子の聲の美なるものをすぐり、歌を謠ひて荷物を送る、昔しの大名の通行見る如し。

●巳の上刻　晝の四ツ時、今の午前十時に當る。上刻は其の時刻の始めなり。

●裁着　伊賀袴ともいふ。半袴にして其の裾を紐にて膝の所に括りつけ、下に脚絆を穿つ。

●お先手　行列の最先に進む役人。

●文左源五左　文左衞門源五左衞門の下略。目下の者又は年若きものに對して用ゆる稱呼。

●押へ　行列の最後を打ちて總取締となる役。

●がうぎがさつ　がうぎ甚きことがさつは粗暴のこと。

●曲事　罪となるべきをいふ。

●赤前垂　出女の風俗。「都繪馬鑑」卷五、「女の赤き前垂をしたるは古代のさまなり、すべて古への前垂は紅晒にて作る……近世まで茶屋料理や遊女屋の下女は皆これをせしが、今は色々の染模樣

れ、是さ文左源吾左、身は押へを乘申す萬事夜前申渡す通りだ、若黨仲間あらしこ小者に至るまで、大酒を致さぬやうに、馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば曲事でおじやんべい、又とさ、とまり〴〵の赤前垂にじやらくら致さない樣に、第一お乘物の先で見苦しい、去ながらとさ、永の道中下々が退屈致すべい、若濡などを企つるとも、目だゝぬ樣に物蔭へよつて、ちよこ〳〵ちよこ〳〵濡たがよくおんじやる、目出度い折からと申し殊に女中の御供だ、少々の事は見免しにして置召されつちや、あつと答へて宰領ども、サア御立と催す所に奥より女中聲々に、　詞　ア、待つしやれ〳〵、氣の毒やお姫樣關東へ往く事は、いやじや

或は緋縮緬に變す云々。上方にては近年まで色茶屋の仲居など之を着したるなり。「忠臣蔵」の「茶屋場」にて一力の仲居の赤前垂したるは、全く其の風俗を寫したるなり。

●置きめされッちや　おじやんべいと同じく田舍訛りを表したるのみ。

●宰領　役なり。　荷物又は人足などの指圖

●やんちや　ふをやんちやんといふ。　小兒の我儘無理をいい

●むつがり　憤ると。小兒の六ケ敷く無理をいひて泣立るをむつがるといふ。

●お乳の人　乳母のこと。

●男ぎれ　男の切れはしの意。

〳〵とやんちやばかり御意なされ、地お袋様も殿様もたらしつ吐つゝ遊ばせども、どふでもいやじやとおむづがり、お乳の人の滋野井殿色々と申されても、夫程江戸へ往きたくば乳母ばかり往きおれと、詞お乳の人の背中をとん〳〵と打しやんして、地御機嫌が損ねましたと云ふ所へ、眉泣きはがし姫君は江戸も東もこちやいやじや、己は往かぬと泣く〳〵走り出で給へば、侍衆も下々も御門に駈出で、家老の外フシ男ぎれこそなかりけれ、お乳の人色を變へ是申し御姫様、下々の子供でさへ九ツ十では物の聞分ございます、あれ見さんせ百里彼方の山川越て白髪がついた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに參つて、江戸へござれば入間殿の

●山も見えざる……放ちはやちじと泣きければ　「心中江戸三界」の文句を取れり。此の歌は當時流行せしものと見え、曾根崎心中にも引けり。

惣領嫁子と、侍かれるお身じやぞや、お乳の養育の難になれば、女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ、地サアよいお子じやお輿に召せと、威してもそやしてもいやや〳〵、みなの欺しじや何の束がよい所、腰元共が謠ふを聞きや、サアみんな爰へ出て、いつもの歌を謠へ〳〵とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし十二三なが手を揃へ、歌山も見へざるかりそめに江戸三がいへ往んして、いつ戻らんす事じややら殺して置て往かんせのフシ放ちは遣じと泣きければ、アをきや〳〵、お大名の給仕琴のくみでも謠はひて、誰に習ふてはてな歌、姫様などに教やんな、地必ずおいてもらはふとお乳の人の不機嫌さ、本田も餘り詮方なく、申しお姫様、彼

●口てんがう　戯れ言いふを口てんがうといふ。
●でこのぼう　傀儡の事にして、人形芝居をさす。
●辨慶や金平　金平淨瑠璃のことなり。
●剃下げ　絲髪に同じ。
●馬方　駄馬を引き道中筋を客又は荷物を載せ渡世とする賤夫。

は人の口てんがう花のお江戸は京増り、淺草上野の花盛り又堺町木挽町の、てんつく〳〵でこのぼう、辨慶や公平が、ゑいやつとと〻ゑなど〻　地切合を見せませ、道中の面白い事富士の山と申す、天までとゞく山を御目にかけまする、サアお輿に召ませいと力一ばい嫌しても、いや〳〵江戸へは往きませぬ、どふでもいやじやと泣き給へば、お乳も今は跌みはて、何様してよからふ御家老も　フシ呆れてこそは居られけれ、　地お仲間の若菜は旅立出に菅笠持て門外より走り入り、

詞なふお乳の人様面白い事がござります、十ばかりの剃下の小けな馬方が、道中双六とやら東海道の繪をひろげ、　地あちな事して遊びます、御機嫌なをしにお目

馬方（人倫訓蒙圖彙所載）

にかけなされませ、チ、〳〵よふぞ氣がついた、夫は聞およふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため馬子でも子供は大事ない、お許しじやその丁稚に、持て參れと呼ふでおじや、心得ましたと御門に出で、　チクリ連立來たる馬方が、フシ片肌ぬいで、　地さばきがみ御前近くも無遠慮に、椽先にあげ足して、

詞やれ〳〵〳〵あり樣達はあつたぼこしゆもない、朋輩共とかけどくに道中双六打て、沓の錢程して

●ありさま　又わりさまともいふ。下司詞には他をさして我といへば我樣より轉じたる詞か。お前方といふに同じ。

●あつたぼこしゆもない　有た事ではないといふと。〔愛註〕

●かけとく　賭祿の訛りにて、賭博の利得をいふ。

●道中双六　東海道五十三次の繪双六。此繪双六の最も古きは淨土双六にして、其の起源詳ならざれど寛永頃既にありて、萬治寛文頃は盛んに行はれ、それより野郎双六道中双六等の新案を出す。道中双六は貞享頃より行はれしも「還魂紙料」に見えたり。此の双六は江戸日本橋を振出しとし、京都を上りとす。維新前までは年々出版せられ、洽く世に行はれしより、黄表紙等にも作られたるものあり。

●何でやる　何である。

●馬やろい　馬やりませうの意。

●つかうど　下卑たる詞。

●一代若衆にならず云々　昔しは男子も十二三になれば、前髪を立て髪を結ふ、これを若衆髷といふ元服してはじめて男となる。然るに三吉は兩親もなく、幼きより他人に雇役せられ、生れながらの奴

こゑせふと思ふたに、人呼廻つてなんでやる、はれやれ〳〵きり〳〵　地乘つしやれ、フシ馬やろいとぞつかふど成る、　地扨々利口な野郎じやな、船頭馬方お乳の人此方も其方もおなじこと、　調して年は何歳名は何と云ふぞ、年は今年十一、五つの歳から馬追ふて一代若衆にならずに、はへぬきの念者じや所で名はじねんじよの三吉、扨もよい名じや聞ば道中双六が有るげな、腰元衆もうつて見や、姫樣も遊ばせ、サア三吉も爰へ來い苦しうないと呼びければ、あいと云ふより慮外をもかへりみじかき煙管の煙り、立交りたる女中の傍そぐはぬ樣に見へざるは、さすが童の一徳と、繪を取出し双六を皆打交り遊ばる〻

隷なれば、其家の子とは違ひ、脊丈の伸びるや前髪も取らず、直ぐ剃下げの絲鬢頭となり馬追となれるなり。●はえぬきの念者　念者は若衆狂ひの兄分をいふ。三吉は若衆とならぬ自分の悲み、耻も通り過ぎて、戯言交りに生れ落の兄貴と平氣でかる所、誠にあはれなり。●そぐはぬ　添合ぬと。女中に交りぬても小供の一徳、さのみ目に立ぬとなり。

●五十三次　舊幕時代、江戸より京都に至るの間の宿驛五十三あり。これを東海道五十三次といへり。其の驛名は京都より數へて左の如し。大津、草津、石部、水口、土山、坂の下、關、亀山、庄野、石薬師、四日市、桑名、宮、鳴海、地鯉鮒、岡崎、藤川、赤坂、御油、吉田、二川、白須賀、新居、舞坂、濱松、見付、袋井、掛川、日坂、金谷、島田、藤枝、岡部、鞠子、府中、江尻、興津、由井、蒲原、吉原、原、沼津、三島、箱根、小田原、大磯、平塚、藤澤、戸塚、程ヶ谷、神奈川、川崎、品川。次の文句中に此の驛名出るものは註釋を施さず。

●南無諸佛分身　此の頃双六の骰子の目に書きたるは、一より六までの數字にあらで、南無諸佛分身の六字を書きたるものと見えたり。「還魂紙料」に、此の所の文句を引き「道中双六はもと此の淨土双六より移りて後に作り出しものゆゑ、百年の昔は道中双六をふるにも南無分身諸佛の六字を目安に用ひしもの歟」とあり。●打出の濱　大津にある地名。振出しを打出しにかけたるなり。

道中双六

地これ〳〵御覽ぜうたしやんせ、是こそ五十三次を、居ながら歩むひざ、ひざくりげ馬、はいしゐ道中双六、南無諸佛分身と、書いた六字を六角の、骰子は櫻木花の都をまん中に　フシ思ひ〳〵のしるしを置て、さらば此方から打出の濱、大津へ三里こゝで矢橋の舟賃が、チクリで出舟召せ〳〵旅人の、フシ乘おくれじとどさ草津、地お姫樣より先姥が餅、

本來は江戸日本橋が振出しなれど、上方より江戸に下るといひ、姫君の御機嫌取りに振る双六なれば、逆に上りの京都より振出したるものなるべし。●矢橋の船賃　双六の中に記しありて賃金を取らるゝないふなるべし。●姥が餅　草津の名物なり。道中双六に「草津川かち渡り、名物姥が餅」の小書きあり。

●水口鯰　これも亦名物なり。

●鈴鹿　坂の下より土山へ越る間の山なり。

●岡崎女郎衆　岡崎女郎衆の小唄は、寛文四年版「糸竹初心集」に出たり。たゞ文句は「なかざきじよろしゆ、なかざきじよろしゆ、なかざきじよろしゆはふいじよろしゆう、なかざきじよろしゆはふいじよろしゆう」。これのみなれど調の好き爲にや、古くより行はれ有名なり。

●手判　舊幕時代道中するには諸所に關所あるを以て、出發の際其所在地の名主五人組の手判を貰ひ關所〳〵にて之を示し旅行券となす。

一口二口水口どちやう踊りこへ、坂へ越すのも骰子次第、骰子をふれ〳〵、ふるや鈴鹿を跡に下れば負まいと、せきに關より　フシ　亀山に、煙草火うちの石藥師、おつと桑名の舟渡し、宮へ上れど池鯉鮒へ四里の、宿にころりは　歌　岡崎女郎しゆ〳〵、岡崎女郎しゆと、もつれ寝よやれ藤川に、思ひ〳〵の君待受て　チクリ　解く前垂の赤坂や吉田二川　歌　白須賀ちよいと越て、手判ござるか振袖に　地ヤ　此この新居今ぎれ、舟に召せ〳〵、蛤召の、蛤々濱松まで、舞坂三里ナ　地　馴見附の　フシ　泊りと聞ば、誰も惜まぬ嶋の財布の袋井や、の

●今切れ　新居より舞坂の間の船渡の所の名。昔は此の所山續きなりしが、明應八年大地震にて陷落すといふ。

●蕨餅　日坂の名物。これも後の双六には出しあり。

●腰なは日本一の大井川　桃太郎の昔し話に、「お腰の物は何、日本一の黍團子」より取る。

●八十川　水の出はなを形容した る詞。二日の淀みは無を振れは二度休むなり。

●瀬戸の染飯　瀬戸は藤枝と岡部との間の宿にて、此所にて賣る名物口なし染の乾飯を瀬戸の染飯といふ。

●松原　三穗の松原のこと。

●清見寺　月の名所。

り掛川を飛をりて、機嫌笑顔やサア日坂の蕨餅、腰なは何ぞ日本一の大井川、骰子に無の字を打出せば水の出ばなの八十川の、島田金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里、七里八里もたゞ一足に、さきへ〳〵と咲かゝりたる、藤枝岡部瀬戸の染飯、フシ　うつの山邊の十團子、所々の名物買ふておあしつく〳〵つく手鞠子に、ひいふうみいよ、府中江尻にすつとん〳〵、と津なみ、フシ　松原はるゝ膏藥買ふて、月んと打つたる興津なみ、をすひ出せ清見寺、由井蒲原や吉原の花の蒲燒名物の、鰻のはだへ沼津の宿、三島こゆれば箱根へ三里、地　骰子目次第に關こゆる、惡い目うてば手判をとりに、元の京へ立歸る、がつてんかヲヽのみこんだ、小田原外

●さいさき　門出よきこと。

郎大磯平塚藤澤の、さはりもなしに双六の、さいさきもよし門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川こへ、川崎をこへ品川こへ、先づ先駈のお姫様、一番勝に勝色の、花のお江戸に着き給ふ、一のうらは双六のさひはひあり喜あり、慰み有りける道中と、どつと興にぞ入り給ふ、地お傍の衆に囃されて幼稚心の姫君、斯ふ面白いあづまとは今迄おれは知らなんだ、サア〳〵往ふはや往ふ、ヤアござらふとおつしやるか、そりや目出度は〳〵、地又もや御意の變らぬ間に、行列揃へと立騒ぐ、お乳の人は勇をなし、そんならま一度大殿様お袋様とお盃、是も馬子殿おかげじや出來いた〳〵、其方には禮いふ褒美やる、其處に待やゝとさ

●ぎやうに滑る　ぎやうは仰山の意か。甚しく滑ると。

●大高　腰高ともいふ。菓子を盛るの器。

●けな者　健氣な者の畧。

●お錢三筋　三百文なり。

ゝめき渡り　フシ奥に御供し入にけり、地馬方は遂に見ぬ金の間をうそ〳〵と、視き廻れど莚の外踏もならはぬ備後表、詞エ、此座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ、大名の家よりも地此方の内がけつこでござると、フシ獨言して居たりけり、地お乳の人は大高にお菓子さま〳〵ぶんかうに盛入れ、詞どれ〳〵三吉其處にか、まあ〳〵そちはけな者じや、地道中双六お目にかけ夫故に姫君様、お江戸へござろと御意なさるゝ、お上にも御機嫌、これは御前のお菓子難有ふいたゞきや、お錢三筋買いたい物買やゝ、殊にそちは通しじやげな道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢ふといや、見れば見る物よい子じやに馬方させる親の身は、よく

●おろ覺　うろ覺の訛り。

〳〵で有ふといと念頃の詞の末、三吉つく〴〵聞すま
し、由留木殿のお内お乳の人の滋野井樣とはお前か、
そんなら己が母樣と抱きつけば、ア、こは慮外な、お
のれが母樣とは馬方の子は持たぬと、　地　挽ぎ放せばむ
しやぶりつき、引のくれば縋りつき、　詞　なんの無い事
申しませふ、わしが親はお前の昔の連合、此御家中に
て番頭伊達の與作、其子は私此方樣の腹から出た、與
之助はわしじやわいの、　地　父樣は殿樣のお氣が違ふて、
國をお出なされたは三ツの時でおろ覺へ、杳掛の姥が
咄しには、　詞　母樣も離別とやらで殿樣に御奉公、此方
を姥が養育し父樣に逢せたふ思へども甲斐もない、母
樣の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井

●鳥羽の祭　伊雜宮の祭なるべし。

●馬借　馬を貸して渡世とするもの。

樣と尋ねよと、　地　念頃に教へて姥はおれが五ツの年、
久しう痰を煩らふて、あげくに鳥羽の祭に往て、　詞　餅
が咽につまつてつひ死んでのけました、　地　在所の衆が
やしなひでやう〳〵馬を追ひならひ、今は近江の石部
の馬借に奉公しまする、これ守袋を見さしやんせ何の
嘘を申しませふ、お前の子に紛れはない、外に望みは
何にもない、父樣を尋ね出し、一日なりとも三人一所
に居て下され、みごと沓も打まする、此草鞋も私が作
つた、晝は馬を追ふて夜は沓打草鞋仕り、父樣母樣養
ひませふ、父樣と一ツに居て下され、拜みまする母樣
と、取付抱きつき泣き居たり、　地　お乳ははつと氣も亂
れ、見れば見る程我子の與之介、守袋も覺へ有り、飛

ついて懷に抱き入れたく氣はせけども、アツア大事の御奉公養ひ君のお名の疵、僞つて叱らふか、イヤ可愛げにさふもなるまい、まあちよつと抱きたい、アヽどふせふと、百千色の憂涙、二つの眼にはたもちかね、

（フシ）咽び沈みて居たりしが、いや〳〵我子ながらも賢しい者、僞つて實とせず、母の心のきたない者と蔑まるゝも情なし、譯を語つて合點させ、耻しめて返さん物と、涙のごふて氣を靜め、爰へ來い與之助と、引寄せて兩手を採り、（詞）扨も大きうなりやつたの、迚も成人せふならば、侍らしう何故尋常にも育ぬぞ、顏の道具手足迄かゝは斯うは產つけぬ、（地）美しい黑髮を此やうに剃下て、手足は山のこけ猿じや、ほんに氏より育

●成敗　死刑に處せらるゝこと。

●奏者　朝廷にて事を奏聞する役の名なれども、公方又は武家にても當して其の稱を用ゆ。取次役のこと。

●追腹程の御恩　與作は死刑を宥

ちぞと、（フシ）又さめ〴〵と泣きけるが、（詞）これ物をがてんしや、腹から產だはうんだれども、今では子でも母でもない、（地）淺ましう成りさがつたを嫌ふて云ふではさら〳〵ない、爰の譯をよふ聞きやゝ、母はもと御前樣の奉公人、與作殿は奧小姓たがひに若木の戀風に、

（地）すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し小姓目付に拾はれ、武家の作法と云ふ內に殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定父も母も御成敗と極りしを、（詞）御前樣のお身にかへお命かけての御訴訟、殿樣は御慈悲にて科を許され其上に、表だつて夫婦になされ與作殿は段々に、奏者役番頭千三百石迄お取立、（地）追腹程の御恩の家其間に其方を設け、

免ぜらるゝのみならず却て御加增を蒙る君恩の高大なるより萬一殿の御他界あれば殉死して御恩報じなせざるを得ざる身なるに、其の忠義を忘れて江戸詰に山谷通ひをして改易となりしとなり。

●改易　＊

上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、かゝが乳を上まし首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に二番と下座に下らぬ人、情なや父様が江戸詰の山谷通ひ、大事の所を仕損なひ又切腹に極つた、　詞なれども腹を切せては女房御家に置れぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、かゝを其儘殘さふため父様の命助かり、奉公搆ひの御改易其時かゝも一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ、お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん、殘つて御恩を報じてくれと、父様のことはりゆゑ第一は男の爲め、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別を　フシしたわいの、　詞男の子は幼

●玉の輿　「女氏なうて玉の輿」といふ古諺あり。女の出世を譬へたる詞。滋の井が今の身の上をいふ

●乳兄弟　＊

●姫御前　年若き女に對する敬語。

ふても御勘氣の末氣遣ひな、　地與作が子とばし云やんなやサア早ふ御門へ出や、アゝいかなる因果な生れ性、現在我子に馬追させ、男の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よお局よと玉の輿にのつたとて、是が何になる事と、フシ聲を忍びに泣くばかり、子は生れつき賢くて聞分有る程猶泣入、悲しい咄を聞ました去ながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、かゝ様にさへ逢ふたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかしと、云へばちやつと口を押へ、アゝ〳〵勿體ない、　詞その乳兄弟云はぬ事、姫君様は關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫御前は大事の物、先は他人の世間てい、　地三吉

●蟻の穴から堤も崩れる　小事を忽にして大事を破る戒の詞。「韓非子」に「千丈之堤以二蟻螻之穴一潰」の語に據る。

●まつべる　まつべるは纏めるとか。

と云ふ馬追が乳兄弟に有るなどゝ、どふ妨げにならふやら蟻の穴から堤も崩れる、輕い樣で重い事ひそ〳〵云ふて人も聞く、先早ふ出てくれと泣く〳〵云へば三吉、詞アヽかゝ樣あんまり遠慮過ました、先云ふて見て下され、地まだ云ひ居るか聞分ない、夫の事我子の事母に如才が有るものか、合點の惡い聞分ないと制する内に奥よりも、詞お乳の人はどこにぞ、御前から召しますと呼はれば、地あれ聞きや人が來る出てたもと、手を取て引出す不便や三吉しく〳〵涙、頰冠して目をかくし沓見まつべて腰につけ、見すぼらしげな後影、こりやま一度こちらむきや、山川で怪我しやんな、雨風雪ふり夜道には腹が痛いと作病おこし、二日も三日

●はらや麻疹　はらは下痢など腹中の病をいふ。

●たしなみ　こゝは用心、注意といふに同じ。

も休んで煩はぬ樣にしてたも、毒な物喰はずにはらや麻疹の用心しや、可愛の形やいた〳〵しや、千三百石の代取が何の罰ぞ咎めぞと、式臺の段箱に身を投伏して歎きしが、地懷中の有合壹歩十三服紗につゝみ、是たしなみに持て居やと、涙ながらに渡さるゝ、三吉見返り恨めしげに、母でも子でもないならば、病ふと死ふといらぬおかまひ、其一歩もいらぬ馬方こそすれ伊達の與作が惣領じや、かゝ樣でもない他人に金貰はふ筈がない、エヽ胴慾なかゝ樣覺へて居さつしやれと、わつと涙出す其有樣、母は魂消入りて、養ひ君お家の御恩思はずば、扨一人子を手放して、なんの遣ふぞ奉公の身の淺ましやと、フシ悶へこがれて歎きける、地時

●ぎごつなく　無愛想の意か。

●坂は照る〳〵鈴鹿はくもる、あひの土山雨が降る　人口に膾炙したる小唄なり。「松の落葉」卷四、「馬士踊」にも此の小唄を取り入れたり。其の唄は「關のお地藏は親よりましじや親も定めぬつまをもつよのかへではないかこれ與作さつたもない事ほてつばらめがへ坂はてる！鈴鹿はくもるさきはいといふてはいどふしあひの土山雨が降る。

●泊なら泊らんせ　伊勢女の口吻、「島さん紺さん」の類なり。

に奥口ざゝめいて早御立と姫君の、御輿昇あげ行列立、お乳の人の乘物を　フシひらづけにこそ昇寄けれ、　地　お乳はさあらぬ顔つきして、姫君のお伽に最前の馬方を此乘物に引つけ、お慰みに歌はしや、畏つたと宰領ども、　詞　こりやそこなじねんじよめ、歌ひ居らふときごつなく、ヤア此奴はほへをるか何じやこりや忌々しと、握り拳を二ツ三ツいたゞきながら泣聲に、　歌　坂はてる〳〵鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの土山雨がふる、ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ　三重　雨やどり

中之卷

これ泊りじやないかゑ泊りなら泊らんせ、泊らんせ

●七ツ立八ツ立　七ツは今の午前四時、八ツは午前二時に當る。朝早き出發なり。

●枕の伽　枕の塵を拂ふなどいふに同じ。一夜妻のこと。

●振袖なりとつめなりと　振袖は若き女、つめは脇つめにて年增女なり。どちらにてもお好み次第となり。

●庄野の六藏　雲助馬子社會にては、其の人を呼ぶに國所の名を以てすると通例なり。丹波與作、石部金吉みな同じ。宿屋の出女も其の異名を呼ぶなり。

●同じね　直と音とをかけたるなり。

〳〵旅籠安ふて泊めませふ、　上旅籠中旅籠お望み次第すき次第、　地　椀家具も奇麗な、座敷は此夏表がへ、寢道具よふて酒よふてお茶は上々木賃でなりと、据風呂もしやん〳〵、かゝり湯取てかげん見て、旅の汚れのあかつきは七つ立か八つ立か、枕のお伽が御用ならば振袖なりとつめなりと、足さすつて腰打て、吸付煙草のきせるのがんくび、首筋もとからぞつと庄野の六藏でないか、　詞　よい女郎衆乘しやつて足本がかるいの、をいてたも　地　アヽしやらくさつの三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも、なんぼ先へ行んしても旅籠屋は皆ひとつ、同じねを鳴く鶯の春はござれの伊勢衆でないか、目元にしほがこぼれる、爰へ見へる坊樣は、

●あたゝかに紙子着て仙臺の坊様云々　〔襲註〕仙臺紙子、八幡牛蒡、越後縮、明石ちゞみ、東寺の瓜、吉野の花、常陸帯など名物の縁によりて見て取りしなり。●向ひ通る菅笠は「向ふ通るは清十郎じやない、かよう似た菅笠が」といふ此頃の流行唄を取りて呼びたり。●掃いたやうゆふ暮の人かとは酒落なり……足本のねばいを三河者とは烏丸光廣卿の「にかはの國といふべかりけり」の狂歌を轉用したり。

●闕の地藏　一休和尚開眼の地藏。●小まん、小女郎、小よし、いづれも出女。百二十里の名取　東海道は品川より京まで百二十五里餘あればしかいふ。即ち東海道に誰しらぬものなしとなり。●人呼ぶ片手云々　店に出て旅人を呼留る傍ら内職に苧を績むなり。●おじやれ　出女のもてなしき遊女なり。所によりおしやらく又

此暖かなに紙子着て仙臺の坊様か、あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんぼの毛がむく〳〵じや、向ひ通る菅笠様足本腰本身のまはり、すつきり奇麗にはいた様なは　フシ伯者の國の人と見た　地是々爰な若衆様、越後衆か明石か鬢がちつくりちゞんだ、　地あれへ大名一かしら、瓜ざね顔の旦那殿東寺から出た人そふな、跡から御座る角まへ髪吉野の衆かはなが美事、これへ見へた飛脚の、足本のねばいは三河者に極つたぞ、常陸の衆はおびで知る、是爰な奴殿、越中の國の人と見たなんで見たれば此下紐を、といて一夜は泊らんせ、夕暮は　フシ急ぎの人も呼びとむる、　地色こそ道の關の地藏しろこ屋の左次が内、小まん小女郎小よしとて百

旅籠屋(人倫訓蒙圖彙所載)

廿里の名取ども、人よぶかた手の袖の下おごけのかけごそこひには、戀に心をひねり苧の、おかぜみだいた胸の中、フシ何と奈良苧のうき身ぞや、　詞なふ小よし小女郎、かふした勤めさま〳〵あれども、君傾城と云ふ者は此るいでの王さま、それから段々ある内に、をじやれの身には何がなる、朝の夜から見世ざらし晝休みから泊りまで、吉原雀のなく様に息のありたけしやべつて、それでも泊りどあることか、如何した事やら此頃は一膳盛の客さへない、　地隣にはあの様に大名のお姫様、今日で三日の逗留、宵朝百六十人、どつはさつはと忙がしい、これの内はいかな事、下宿さへ泊りがない、晩にはみんな覺

●杓子ともいふ。所謂飯盛女なり。右圖旅籠屋の店頭に出で客を引接するもの出女なり。

●朝の夜　前にも七ツ立八ツ立とありし如く、眞夜中より出發する客の取廻しをすれば、朝とはいへど夜なりと。

●吉原雀　行々子ともいひて喧しく囀づる鳥なれば、宿引きの女のよく饒舌るに譬ふ。

●一膳盛　飯の一膳盛なるべし。少時腰を掛けて仕度する客人をいふ。

●どつばさつは　混雜の形容。

●股がさかふ　日頃生へた角に更に枝がさすとなり。

●未生以前　佛語にて生れぬ先きのことをいふ。其の事ならいつの昔か、今は挨拶きつて根もなしと。

悟しや、旦那殿のにがい顏日頃はへた角に股がさかふぞなふこはや、常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいてくれそな物ではないかいの、詞ヤそれについて小女郎、そなたのおてき松坂の七二は何として見へぬぞ、口舌でもしやつたか、梯子の下のごそ〳〵が過ぎて氣色でも惡いか、地餘りごそ〳〵ごそついて、馬を追ひでおとがひで、フシ蠅おやろぞやと云ひければ、詞ムゝ其七二とは九郎助のことか、それは未生以前で今は挨拶きりぐ〵す、しいと云ふ馬追聲も聞ぬはいの、初めはたんと可愛ふて、元結の脚絆の、鬢付買ふの帶買ふのくつの錢までつゞけた、詞其わしが目をぬいて、一人か二人かみな口の火なわ屋のおげん、まだ土山のく

●ほでてんがう　てんがうはいたづらなり。ほは强くいふ爲の助詞。

●ほつく　＊

●四九　賭博の名なるべし。

し屋後家、庄屋のふとのお米がたはら腰にくひ付て、馴染のおれをすほんぬきに逢せた、地それも云ふたら止むにもせい、ほでてんごうの貧乏神、何もかもほつきあげ、今は布子と繻絆と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立ぬげな、詞きけば小まんの知音の與作も博奕の友じやげな、與作がいとしか異見しや、小よしも取り沙汰きゝやらふと、云へば小よし小聲になり、去ば内の旦那が龜山の問屋で聞いて來て、これの小まんが懇ろする馬方の與作めは、博奕打の大將じやあれから盗みの下地じや、重ねて來たともあしらふな餘程彼奴に懸もある、丸裸にしてなり共懸を取てそれからは、門詰も踏せまいと夫婦囁やきうなづき

●下の下　遊女のうちにてもおじやれは最下級なりと。

●未進　＊

●水牢　牢の下に水をたゝへ、罪人に苦を増す如く造りたる也。年貢未進の者に多く科する刑なり。

●しよざいうな意。　こゝは身分といふやうな意。

●あだて　當事のこと。

●釉の下　本來は賄賂のことなれども、轉じて人の憐みを受くることに用ふ。

●鶴のあはれ　「毛吹草」に鶴の粟を拾ふが如しといふ古諺あり、勞多くして功少なきに譬ふ。

て、寄合にいかんしたと語りもあへぬに、小まんはら〳〵涙にて、勤めの身にもおじやれの身は、下の下といふは　フシ　爰のこと、　地　明輩衆へもいはなんだ、横田村の父様二石二斗の未進につまり、六十六で水牢男にも娘にも、子とては此身計りなり、しよざいこそおじやれなれ、お大名へも知られた關の小まんが父親を、水牢では殺されず參宮するとて隙もらひ、　詞　女子の身で代官所を秋納め迄請合ふて、牢を出しは出したれ共、何をあだてに何とせふ、まへの様に客は勤めず私仕事に賃苧うみ、　地　女中とまりの袖の下小まんといふ名でほつ〳〵と、鶴のあはれや淺ましや請合の日は近付、氣がいさまねば身もやせて辛苦するのもあの人の、身をも

●まめしげもなきうき世　眞實又親切の意なれば、轉用してまめしげもなしといへば、賴み少なき事にいふ。

●本小室　小室節のこと。「聲曲類纂」には其の始め並びに名稱知るべからず、今も諸侯御入府の節は御馬前に立てうたふとかや云々。〔饗註〕本小室とは純粹の小室節といふことにて、其の元唄は「小室出て見よ淺間の山に今朝も思ひの煙立つ」といふにて、信州小諸宿より唄ひ出しものか、是を追分節ともいふ、今越後に米山節、佐渡に岩むろぶしなど有るに同じ云々。

●おつゝら馬　「おつゝら馬」の小唄は「松の落葉」に出たり。「さても見事なおつゝら馬よ下にやせんしき唐縞の蒲團、ふとんばりしてな小姓衆を乘せて云々」。

●我も昔しは　與作の述懷にて、我も昔は馬に乘りし身なれど、今は馬士とは何事ぞとなり。

くろめて遣りたいの、念力一つで立る身が、世間でわるふ歌はれて、まめしげもなき浮世やと、フシ　おごけにひれふし歎きしが、　地　あれ〳〵あそこへ歌ふて來る本小室のひんぬきは、與作〳〵と小手まねき、　歌　扨も美事なソンレハおつゞら馬や、七つ蒲團にソンレハ曲錄据へて、我もむかしは　フシ　乘りし身を、人は夫とも白子屋の見世さきに馬引付、　詞　こりや小まん此旦那殿馳走してとめましや、お供かけて三人じや、サア下さつしやれと　地　荷物とく、小女郎小よし取々に、それお足の湯先與へ、合宿もござりませぬひろ〳〵と、御休みなされませと　フシ　奥にともなひ入にけり、　地　與作は荷物も跡付もそこ〳〵に投おろし、小まん此中逢はな

●そは〳〵ぜず　そは〳〵は落ちつかぬ貌。此の一言小まん少し燒け氣味なり。

●心に一物ならんと。　何か陰謀を企てたるなるべし。

●けんねじ　賭博の名なるべし。

んだ無事で嬉しい頓て逢はふと、馬の口取り駈出す手綱に縋つてこれなんぞ、　調語る事がたんとある此方も云ふ事ある筈じや、　地そは〳〵せずに待んせと引戻せば、エ、じやまな、其話はいつでもなる急な事じや遣つてくれと、振りきれば抱とめて、是どふぞいの、何がそれ程忙がしいどふで心に一物有る、譯を聞ねば遣りはせぬと見世にとんと抱きすへられ、　調ハテ荷物さへおろしたに一もつが有ものか、氣遣ひそふなに短ふ咄して聞かせふ、此不仕合を聞いてたも、明輩共がけんねじついて錢儲けする羨ましさ、勢多の久三がどふの時百切はつて見たれば、勝程に〳〵一いきに七百、　地こりや門出が面白いと腰にひつつけ、しやんぐ〳〵

●目川村　〔饗註〕目川村は柔飯田樂のある所なり。

●梅の木　〔饗註〕梅の木の是齋は和中散といふ樂を賣る店なり。

●是を戰のはじめとして　「助六心中」「米市にかゝつて八百兩、儲けたか、いや又あつちへしてやられた、爰をは氣でせと油市、どうやらこふやら三百兩、してやつたかいや損をした、是を戰のはじめとして云々」。此の淨るりの文句を取りたる所多し。

●觀音堂　〔饗註〕觀音堂で三十三匁は三十三所の數にて彼の謠曲の

と鈴鹿で皆ついて居る、爰へもちよつと出かけて又六百してやつた、是でおけばよい物を慾には見へぬ目川村の、馬子共よせて我らがどうを取たの、當らぬか〳〵畫さがりから七つ迄、一文と六文の錢のかほを見ぬ程に、前の勝をぶちこんで五百あまりのしすごし、どつこいどこぞでこの損を梅の木の是齋の辻で、身を粉にはたいてやつて見た、和中散でもきくにこそ、金になほいて一歩二朱の借錢おふて、肩の重たい石部の八藏に請合てもらふた、是を戰の始として大津八町で八百まける、小野の宿の小町塚で九十九文してやらるゝ、すりはり峠の氣が細ふては勝れぬと、臍村の上で分別しかへ、森山の觀音堂で三十三匁が質おいて心は

田村の故事を取りしなり。

●田村堂　鈴鹿山峠の茶屋左の方にあり、坂上田村丸を祠れるもの田村丸は鈴鹿山鬼神退治にて有名なり。

●くさる　博奕の通語にて失敗する。

●をどる　〔襲註〕をどる松坂とは伊勢音頭の踊り唄に「松坂越へたエ」といふはやし詞ありしなり。

鬼神と出たれども、土山の田村堂でつい平げてのけらるゝ、伊勢へ通しにいつた時宵からあかつきの、明星が茶屋で飲み干す樣な大ぐさり、借錢の利を一月に二月をどる松坂こへて、くも津の渡しで算用したれば二貫づゝ四つ合せて、二四が八藏めに八貫の借錢、これはならぬと思ふ所へ、向ふから馬追ふて失せおる、じたい八めはぶう〳〵なり已が胸倉しつかと捕て、こりや貸した錢はどふする、見忘れたか八じや〳〵と刺す樣に云ひおる、地くど〳〵と見苦しう詫言しても居られず、錢と云ふて今はない正味でかつた錢ではなし、數計りの勝負づく一ばん切について見て、八貫を濟すか十六貫おふ物か、サア來いと云ふたれば、八めは數

●地鯉鮒の市　地鯉鮒に馬市あり。

●くろめる　瞞着するこ。

●げんなり　失望の狀。

年の通りものこちは、八貫出して置く負ればそれで取り遣りなし、勝てばむして十六貫なんで濟す合點じや、かたもなふてはいやじやと云ふ、此方も引れぬ云ひがゝり、是此馬を知つたか池鯉鮒の市で九兩一歩、親方の物なれど十六貫のかはりに、五百目の、馬ならしてこいと、木蔭へよつて錢にぎり、詞サアどふじやといふたれば、三まいせい七つじやと二文張おつた、まつかせとつく程に手の内に殘つたは、たしか七文南無三寶しまつた、地一文はねて六文にして、當てとらふと思ふて一文しやんとくろめて、ついて見たればかなしやの八文で有つた物、一文はねて七つにして彼奴が壷へあてがふたは、どふした因果の固まりこちやげんな

●いきる　＊

●乘手は氏神　仕合せよしといふ場合に「これ氏神」などいふ。氏神の加護の略なるべし。こゝも乘手が幸ひに自分の味方をして、八藏を大に叱りくれしは仕合との意。

●早追ひ　急事の使には、驛々の人夫に晝夜兼行にて駕籠を追はしむるもの。

りとなる程、八めはいきつて馬を取たとしがみ付、今日の乘手は氏神やくそくの馬次迄、やれ〳〵とせがまるゝ八めも武士をのせたれば、なぜ馬を追ぬと目のぬける程しかられて、久保田で旦那をおろして追付馬を取に行と、早おひ程に追て來る、親方の馬をとられては、此海道は云ふに及ばず木曾海道中仙道、たゝずみが叶はぬ、八藏めが來ぬうちに、早ふ内へ往にたいと　フシ　溜息ついて語りける、小まん心もくら闇にて、人の沙汰に違ひはない、世につれるとは云ひながらさもしい心にならんした、古はおれき〳〵私等ふぜいを下司にもお遣ひなされまい、緣なればこそ肌ふれて抱つしめつのわりないこと、嬉しいやら悲しいやら　フシ　一

●吉書　目安書即ち告狀のこと。

●八寒地獄　又八寒氷地獄ともいふ。水牢を恐ろしく譬へたるなり。

●しこり博奕　病によりて肉の中に塊の如きものゝ出來るを塊といふ。それよりして勝負に上せて固くなるをいふ。

●痩我　痩我慢の略。

●ぼんのくぼ　兩肩の上にある窪みの處。即ち肩がわるいなといふ

ばい愛しさ增す物を、わるい病がつきました、そりや雲介の身持ぞや、友達仲間の交際で引れぬ事が有るにもせよ、私しが親の未進米此六日の吉書に立ねばもとの水牢、この世から八寒の地獄へおとす私しが心、苦にかけふではなけれども案じてもくだんせず、しこり博奕のわる遊び、扨てもつれない氣と思へば、あつい涙がこぼるゝと、せき上げ〳〵泣ければ、地　與作わつと泣出しそりやきよくがない〳〵、詞　慰みにも慾にもせぬ其方の親の未進米、二石二斗は何程じやむかし與作が草履取馬取の切米、地　是で可愛いそなたが親を殺させはせまいと、痩我をはつての出來心、千三百石から馬追まで成下るぼんのくぼ、よい事はない筈と、思

に同じく占方に用ひる詞。

はなんだは身の不覺、是は主の天罰とあきらめて濟すが、しこり博奕の榮耀とは去りとは小まんむごいぞや、皆是そなたの親のため胸に書付あるならば、爰が立わり見せたいと打たゝいたる胸當も、フシしぼる計りの恨み泣、地小まん是はと手を合せ、忝なふござんする、とふに云ふてくだんせば恨むまい物堪忍して下さんせ、詞父様の出入も夏の物共人手に渡し、朋輩にも無心云ひ百三十匁とゝのへ、まちつとの所を賃苧もよつほどうみためた、地これ見さんせと績桶より金取出し、父様の命代落付てくださんせ、日が暮て間があるよもや八も來をるまい、泊りどはなし私も隙、馬は向ひに繋ひで中の間に寢ていなんせ、互ひの憂を散ぜふと草鞋の

●五十三次に汁かけて嚙みこなす　雲助馬士などの云草と見えたり。五十三次股にかけるの類。

●ほてつばら　「俚言集覽」に腹の大なるとにて、布袋腹又火照る腹かと。人を罵る時、又馬などを叱る時に用ふ。

紐とく所へ、石部の八藏きよろ〳〵目して來りしが、ヤア與作か人の馬をことわりなしに、美濃路まで隱れもないひぬかの八藏、目の荒い男知らぬかい、十六貫をたゞせふや　地どうずりめと、馬をとく手を飛かゝり捻あげて、こりやや、詞我がひぬかの八藏なれば己は丹波與作じや、二百めのかたに五百目の馬をほしいか、遣たら機嫌がよかろふな、三百目のつりを持て來い、五十三次に汁かけてかみこなす與作じや、すないやい　地すないやい　フシほてつはらめと振ちぎる、地ヤイ男達はおいてくれ錢濟いてしたかせい、腕づくならサア來いとぶつてかゝれば、小まん取付なふ八藏殿、詞こなたは粹の樣にもない其方も此方も親方持、

●了簡づく　互ひに堪忍しあふをいふ。

●ふりはり　ふんばりといふに同じ。死女郎と共に女を罵りたる詞

馬をやつてよからふか取てこなたを褒ふか、地聲高に云はずとも了簡づくがよいわいの、情なやと泣ければ、ヤイ爰な引さがれ、詞其涙は與作になけ、こちや忝なふないわいやい、取るべき錢は取らずに馬を取が了簡じや、いやそりや成らぬ、此門に繋いだ馬は此小まんがやらぬ關の小まんがやらぬぞ、イヤ死女郎のふりはりめ竹の鞭をくらふなよ、ヲヽ女子を相手にならばしや、ヤア仕かねふかと鞭を持てはたとぶつ、與作小まんを押退けて、あれは餘所の奉公人なぜくはした、ヲヽ我女房じや所でくらはした、ムヽよふくらはした女房共め返禮と、地拳をかためて目鼻の間缺けてのけと打たりけり、來い、する氣なら仕て見せふと互ひに

●こづか　かみづかにて帶のこと。

●腓　腰脊面の腹れて肉の多き所。體中急所の一なり。

●五器の實のぶちあげ　五器（椀）の中に入るべき實（飯）を打上げるなれば、即ち職業に離れしむるをいふ。

●孤かつがせる　乞食の事を孤かぶりといふより、職業に離れさせ乞食をさするぞとなり。

こづかを取ては投つ投られつ、ぶつヽぶたれつ掴みあふ、誠に馬子の喧嘩とて馬のふみあふごとくなり、八藏は力ばかり與作は取手柔術とり、すりちがひに小腕を取り腓を蹴かへしこれやあと取つて投つくる、門柱に腰骨うちよろつきながら睨みつけ、詞どうずりめ覺へてけつかれ、問屋馬さし親方へ斷つて、海道筋の五器の實をぶちあげ、地孤かつがせて見せふずと身を捻振つて立歸る、小まん追付是八藏殿、詞公用勤める馬方が、馬さし問屋へ斷られ何處で身が立物ぞ、地此小まんが手を合せる男は當つてくだけいじや、堪忍して下されと詫る程なほつき上り、詞十六貫と云ふ錢貸して其上に投られて、堪忍したら其方はよかろ己がわる

●もんめん巾着　十三文目な木綿巾着とつゞけたるなり。

い、與作めの博奕うち盗人と此門からわめいて往く、なふ是々爰に百三十匁命代りの金なれども、地男のためじや惜うない是で濟して下されと、取出すを引たくり、必ず跡もすませよ、詞錢の直段はどふせふぞハアテそこらは搆はぬ、そなたの勝手にしてたも、そんなら是で拾貫分、地相場は十三もんめん巾着フシ捻込でこそ歸りける、地小まんは小首かたふけ溜息ついて立歸り、さきの金を渡してやう〳〵と去せた、彼等との交際重ねておいてもらいたいと、つぶやけば與作肝をつぶし、詞其金渡してよい物か、取かやそうと立あがる、是待しやんせ、人の物おひながら返さいでよいかいの、昔とちがふて當代は道中筋も吟味つよく、馬借

問屋へ斷られ惡名が立てば、とん〳〵とすたつて出入の門もふさがれば、おのづから逢ふ事も成らぬ樣に成はて、地萬一お國へ聞へての耻辱は二度返らぬ、父樣の未進も云ひ延るだけ言ひのべて、叶はずば水牢へ代りに私が入る覺悟、差當つた男の難儀救へば私が本望と、いへども與作聞入ず、馬方風情になんの耻辱、うき身やつすは親のため其金をやる物かと、駈出しが南無三寶こりやならぬ、是の旦那の左次殿が何事が出來たやら、問屋組中つれだちそれ其處へ戻らるゝ、何の彼のがやかましい一寸かくれて逢ひともない、馬も何處ぞへ引てくれと隣の見世の幕のかげ、乘物あるを幸に戸をあけ片足ふみこめば、内よりあいたあいたしこ

横腹をふみくさる、何者じやと小丁稚が大嘘してによつと出る、詞ヤア石部のじねんじよか、與作殿か、そちは爰に何して居る、おりや江戸へ通しの馬追ふて本陣に泊るが、夕飯すぎから眠たふて爰でぐつとやつた物、あり様はこりや何事じや、いや氣遣ひな事ではない隣の旦那に逢ともない、詞爰へ隠してくれと言へば三吉邊りをすかし見て、詞其所なは小まんかエ、〳〵うまひな〳〵、己やとふから知つて居る、外の人なりや成らぬが與作と云ふ名でいとしい、與作の事なら引はせぬ隠してやらふ、地サアはいりやと、膝おし合し心ざし、知らねど親に孝行の フシ通ずる念こそ哀なれ、地程なく亭主門口から、内外の者共皆おきよ、詞問屋

いわうじ〔註〕家主といふにて女房をさす。

●おかた　他の女房のこと。中仙道にては今も他人の女房をおかたといふ。

●鴟尻〔註〕能く連びしにて鴟尻に取るといへば、貰ひ落しなしに皆より貰ふといふなりと。

庄屋殿組中殘らすござつた、かゝも起て 地出や〳〵とわめく聲に出女共、いわうじ諸共表に出る、庄屋問屋口をそろへ、詞おかたお聞やれ今日の寄合は、是の小まんに付て代官所のお差紙、小まんが父親横田の彦兵衛、四年此かた二石二斗の御未進にて水牢に入られたを、小まんが願ひ請貧ゆへ出牢仰付られた、宿中としてきつと取立納めませいと則ち小まんをお預けじや、地よふお聞やれと言ひ渡す小まんうつむき涙ぐむ、女房も驚きておとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるかと言へば亭主とがり聲、詞なんの主の厄介一文もこちや知らぬ、上り下りの旅人衆も關の小まんと言ふ名にはぢて、百やる人も二百やる一匁の貰ひも鴟尻

●旅籠が六かたけ　旅籠が六度といふに同じ。

●十文もり　前に一膳盛といひ、次には盛切りの語あり。一膳飯のもか。或は蕎麥うんどんにや。

●蒟蒻の錢云々　蒟蒻は食物に交りある砂の腹中に入りたるを消すとの傳説あればなり。

●盜人の頁ひ　盜人に頁を打つといふ古諺あり。

に取をる、百目や二兩は半年にも溜れども、與作と言ふ博奕打のぬす人めに、有たけこたけ仕揚て、夏の物は半がいに繻絆が一枚なさそふな、與作が懸が餘つ程ある皆をのれが請合じや、帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ、酒が四升五合十文もりが七十杯、芋とくじらの煮賣が八十五杯、地くらひも食ふた蒟蒻の田樂を百五十串、蒟蒻の錢じやとて砂にしてすませふか、盜人におひなれば此の出入はこちや知らぬ、與作めが身の皮はいでも二石二斗が物はない、馬を質におさへて彼奴にきつと濟まさせ、小まんを内へ入ておきや皆御大儀でござると、辭儀もそこ〳〵戸を立て　フシ錠さす音こそきびしけれ、地庄屋問屋組がしら、扨々與作と云ふ奴

●くもにしる　〔襲註〕くもにしる

は、存の外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻くふて煮賣喰て、其間に小まんと云ふ、お山を夜食に喰をるとめん〳〵宿にぞ歸りける　フシ與作は肌に冷汗ながし漸々這ひ出くるゝの節穴、ひとみの隙間のぞけど〳〵見へばこそ、竹櫺子の出格子に首を伸して取付ば、地内より顔がによつと出る、ちやつとひけばア、大事ない〳〵、地コレ私じや、小まんか、與作樣か今のを聞てくだんせ、悲しい事に成はて〻籠の鳥に成ました、私が斯なる上は父樣へ難儀はもうかゝらぬ、こな樣にあふ事はならふやら成まいやら、是が別れに成ふやら、下から上ははかられぬと、フシ手に取付て泣きければ、詞イヤ是くもにしるが出來てきた、どうした緣やら三

といふ語は用ひやう一意ならず。……沖走る船の遠山にかゝる雲の黒みわたるを見て、暴風の吹出んとを恐れ、雲さへ怖きに汁(雨)が出てはといふ意にて一大事件にまた一大事件の加はる場合に用ふ。一説は、喰物に汁がついたといふにて甘い馳走の上に又一品添ふぞとの心にて段々話しが面白うなる、事柄の深くなる、これが手掛りでよい話しにならうなどの類にいふ云々、こゝは後者の意なり。

●のぼす　おだてるも。

●げんこ取　五文取の餅のも。げんこは拳固にて、馬子雲助が五の符牒に用ふるも、今人力車夫の之を用ゆるに同じ。小さきながら三吉の首に比する、寧ろ昔の五文取の大きかりしに驚かざるを得ず。

吉めが與作と言ふ名にほれて、常に己を大事にする、乗物の内でたらしこみ隣りにとまつた大名の、金を盗んでくれまいか男と見こんで頼むと、地のぼせば此奴がのぼされて成程盗んでくれふといふ、なれば上々なられば元々、言もあへぬにいや〳〵〳〵、詞人迄罪におとす事止しにして下さんせ、ハテ氣の細いあらはれて　地彼奴が打る〻分三吉いよ〳〵たのんだ、ひかせはせぬと言ひければ、詞はれやれ〳〵〳〵しちくどい、盗んでいらずば捨やいの、此じねんじよが頼まれて引はせぬ、ハテ親はなし一門なしげんこ取より小さい首、地意氣づくなら取ていけ、盗みして現はれ首きらるゝが不思議かと、義を立ぬきし侍氣、盗む小金もくちせ

●南無地藏樣　關名物の地藏なれば信心するものと見えたり。

●だくぼく　坂路の高低なるをいふ。

ざる　フシ筋目恥かし哀れなり、地ヲヽ、頼母しい命掛て頼んだとありたけそやされ、詞ハテイ味方があれば氣がおくれる何處ぞへとつと退いて居や、ヤア小まん女耶此守が預けたい、ハテ守はかけて居やいの、いやいや是には私が本名が書いてある、若しあらはれて捕まへられ、人に見せれば耻辱じやと、地といて預けし神妙さ、裙ねちからげて忍び入、坂の下の彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らふ小まんもはいりや、私やあぶなふてきや〳〵する南無地藏樣〳〵、エヽ今願立がきく物か、聲が高いひそかに〳〵ひそ〳〵と、胸はだく〳〵だくぼくの　ヲクリ坂の〳〵下へと別れける、武家は道中掟にて、半時がはりの拍子木の、數も九つ十

●地獄おとし　鼠捕る器。「犬子集」に「地獄はよそか目の前にあり」といふ句に、「かけおくに其の儘落る鼠とり」の附句あり。
●本陣　宿場にて大身の人々の泊る大旅店。
●下宿　諸侍などの泊る宿。
●棒乳切木　夜番警固の士などの携ふる棒の如き杖。
●あらしこ　雑卒のことをいふ。

に餘るやあまらずの、子供心の愚さは、盗みおほせしに嬉しさに、拍子木を除もせず金蘭の財布提げながら、門口へずつと出る、夜廻りちらりと氣を付て、慕ひ寄ればうろたへて乘物に逃入つて、内より戸をぞさいたりける、夜廻りつゞいて飛付、詞乘物の戸をしつかと押へ、すだれを揚てヤアうぬめか、是は御前のお金袋、サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あへ〳〵と呼はりし、是ぞ此世の地獄おとし　フシかゝる鼠の如くなり、地本陣の上下殘りなく下宿の諸侍、隣町隣家の旅籠屋ども棒乳切木にて駈付、海道の眞中に乘物かきすへ高提灯、四方きびしく取卷たり、詞當番下知して、丁稚づれに仰山なそれ引出せ、畏まつたとあらしこ共

●馬さし　駅にありて人馬の役を宛る者。
●ませ　年齢よりは大人びて見ゆるをいふ。
●ろくで果まい　まじとなり。満ろくには死ぬ

戸を明てサア出ませいと、小腕取つて引出す、是旦那殿盗んだ金は返しますと、地きよろりとしてぞ居たりけり、いか樣にも幼少な、彼奴計りではあるまい、詞同類を詮策せん馬さしは居らぬか、當宿に泊つたる馬子共殘らず召よせよ、地あいと言ふより觸れまはり　フシ皆々一所に相つむる、八藏も大酒して宵より關に泊りしが、盗みかはくは何奴じやい、ヤアませのじねんじよめか、おのれなら尤ろくで果てまい奴じやと、常に言ふたが違ふたか、詞馬方仲間の耻さらしエ、はつゝけ柱めと、地背骨をどうと踏みければ向下にかつばと伏し、額を石にすり破り血は紅と流れたり、無念な己れ踏んだか枝骨もいでくれふと、立上ればひつす

へ〳〵、　詞そこな馬子めも慮外者、武士の前にて脛さんまいとさん〴〵に叱らるゝ、　地エ、彼奴にふまれたか下々の刀でさへ、切られまいと思ふに脛にかけて此樣に、顏に疵を付たなあ、首がとんだら已が面へ喰付てくれふぞと、はつたと睨む目の中に無念涙をはらはらと、思ひこんだる腹立の、をさな心の念力は　フシぞつと身の毛も立にけり、　地母お乳の人聞付て、駈出見れば大勢に取圍まれし我子の體、あつとばかりに腰もぬけ、呆れて泣より外はなし、　地人々に悟られては今まで包みし甲斐もなく、お姫樣の乳兄弟馬方して盜みしてといはれんも口惜く、不便さ憎さ腹立さ、　詞ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もないさも

しい事を仕出したな、筋目も有りそな者なれ共さすが育が耻かしい、　地其心ゆへ親々も知ても知ぬ見ぬ顏して、其馬方とは成つらめ、此方も子を持ち覺がある、皆親心は同じ事、若母などが聞付けても、我子の命を助けんため火水の底へは沈まふが、此場へ助けに出らるゝ物か、見殺しにする樣なれど、心の內では神佛に命乞してもがくぞや、年にもたらぬ心から、恐ろしい事する筈もない父親が貧しうて、言付て盜ましたか、但しは人に賴まれたか、言譯あらば仕てくれよ母の心を推量し、此比の馴染もあり兎に角命が助けたい、姫樣のお名を思はずば、此のお乳が產んだ子で、姫樣の乳兄弟と云ふてなりとも助けたい、どふなりと斯なり

と言譯あらば仕てくれと、魂のそこ、心のそこ、肝より出るうき涙、當番吟味の人々に推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひを夫とも知らぬぞ是非もなき、三吉も母の顔、見上げ見おろし涙にむせび居たりしが、詞申しお乳様さもしい盗みいたしても、馬方のとなれば誰耻かしとは存ぜねども、お前一人に耻かしい、父様のためかとは恨めしの仰せやな、父様がある程なれば馬追は致さねども、在所知らねば　フシ　顔も見ず、又母様も持たれ共女子の身の不甲斐なさ、奉公人のはかなさは今では他人も同じ事、たとへ言譯立てから盗人の名を取り見苦しいめにあふては、父様に顔はむけられぬ、はやう殺してもらひたい其様におつしやれて、可愛が

つてくださる程、どうやら心がうろたへて、死ともなう成そふな奥へ入て下され、もふ顔見せて下さるなと、両袖を目にあてゝ泣しづみたる利發さに、母はなをしも心くれ命はお乳が貰ふた、助けて下され侍衆とわつとひれ伏し聲を上、人の推量思はくも　フシ　忘れはてゝぞ泣居たり、家老の本多奥より出で、様子つぶさに承る、詞盗み物出ると云ひ殊に道中他領の者、是式の事評議に及ばず　地　お助なさるゝ立歸れと、引立れば三吉此耻かいて助られ、何と生てゐられふ慈悲なら切て貰はふと、フシ猶座をしめて立ざりし、エ、小しやく者、かるい科を成敗とは、古今の掟にない事、立て失せふと怒らるゝ、詞ム、此分ではどふでも命助かるの、チ

、聞へたとつゝと立こりや八藏め、己は俺をよう踏で面に疵を付たな、　地　元來我は武士の子じや、人に踏れて生ては居ぬ、覺へたかと云ふ詞のうち、仲間が脇差ひらりとぬき、飛びかゝつて八藏が首打落せし早業はフンまたゝく間の稻妻なり、　地　すは人殺しと取て伏せもふ此上は了簡なしと、本繩に縛りあげ、宿の庄屋へ預けおく、此方よりも人を付代官所へ渡すべし、立あがれと引立る、母は性根も泣入て、前後もわかずみだるれど、　地　此お目出度道中に繩付などは見ぬ物と、人にさそはれ力なく見返り〳〵奥に入る、子は又母を見送りて顔をうなだれ目をふさぎ、聲をも立ず歎きしが、ム、是ぞ本望〳〵、　地　惡名取つて人には踏まれ助けら

●往かけの駄賃　馬子が馬を曳き問屋場へ出る途中に他から頼まれ荷物を運搬する駄賃は全く馬子の所得となるをいふ。これより他人を卑のまきぞへに合すやうな場合に用ふ。

れても生きて居ぬ、一人死より人きれば往がけの駄賃じや、父樣も母樣も誰も一度は死る物、來世でゆるりと逢はふ迄、あの世から來てあの世へ歸へる、戻り馬やろいほてつはらめと惡びれぬ、所存は侍まさりかな、惜い奴じやと涙ぐみ、引て歸れば本陣は火の用心の聲ばかり、　チクリ　物しづ一かにぞ成にける、フシ　與作はとり沙汰　地　聞とひとしく、科を我身に引うけんと、駈つけ見れども早落着してひそかなり、本陣も門しまり四邊もひつそと靜まつたり、小まん待かね格子たゝけば走りより、　詞　どふじやく〳〵仕損ふたげなのふ、アヽ仕損ふただんかいの、私や爰から覗いた、八藏まで殺いたはありや皆私等の身替り、明日の日中に切るゝげな、

●左縄　左り前、左り縄いづれも運のわるき事又は望の叶はぬ場合に用ふ。右前右縄凡て右は物の順當なればなり。

可愛い事を仕ますると、泣さゝやけば南無阿彌陀〳〵、そりや皆こちが殺すは、こちとはいかい業人と顔を見あはせ泣居たり、詞なふ三吉より一時も跡に下つて成まいが、こなさんどふ思ふてぞ、ム、其覺悟きはまればもふ落付た滿足した、宵からそふは思ふたが親父の難儀を見捨ては、死ぬ氣であらふかと胸に計り持て居た心がゝりは殘らぬの、地ハテこふ左縄に成からは父様の事も埒あかぬ、もじや〳〵言へば氣がもどる餘の事おいてサア早ふ、こゝが出たふござんする、ヲ、嬉しい〳〵裏の軒につないだ、馬を人手へ渡しては主たる人への不調法、死場へ馬も引まいか其間に身を出る程、此竹格子をはなして見や、いや此も小よしの惡性

●浮線綾　浮織にしたる綾の一種。

でつい推ばはなれる、アゝ〳〵小よしは逢ふ夜の通ひまど、最期近づく二人には冥土に通ふ鐵の門と、くどき〳〵馬引出し、預けて置いた脇差は、詞そこらはぬからぬ私が腰にさいて居るできた、夫なら此馬の鞍をふまへてそつと下や、アゝあぶないが怪我すなと、地庇はるゝ身もかばふ身も、はつる廿日の月毛の駒の、尾髪亂れて置露に、袖の涙をあらそひし、ひらりと飛おり一町計り足ばやに立退き、海道は往還伊勢路の方で死ぬまいか、アゝそれに付て待たしやんせ、詞三吉が預けし守袋、如何なる神の御札やら、私が懷中にも太神宮の守お秡ひ、穢すは後生のさはりなり、地地藏堂へ納めませふ、チゝ氣が付たと取出す、詞浮線綾に

●おきめ　處刑のこと。

紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、正一位小原太神宮、丹波の國の住人伊達の與作が一子與之助息才延命、　地　南無三寶偖は三つで別れたる我子の與之助なりけるか、我を親とは知らねども與作と言ふ名を大切に、慕ひし物を氣もつかす盗みをさせておきめにあふ、手を出して我子の首を切たと同じ事よとて、とんと坐して足ずりし　フシ　聲を上てぞ歎きける、　地　女も共に涙にくれ、因果人共業人ともようも〳〵罪業を重ねたは二人が身、死なふと云ふ氣の付たこそまだも冥加に叶ふたれ何のかのと暫しでも、此世に居る程罪おもし、サヽアごされ、チヽさうじやと立んとすれど腰立ず、口惜や腰ぬけた、エヽ氣の弱いと引立れども膝おるゝ、

●丹波栗毛　名物の丹波栗を馬の栗毛にかけたるなり。

●今六道の次傳馬云々　「冥途飛脚」に「一度は思案、二度は不思案三度飛脚、戻れば合せて六道の冥途の飛脚」の文句に似たり。

●與作丹波の云々　〔饗註〕流行小唄なり、「與作丹波の馬追なれど今は、お江戸の刀さし」といふ、小唄本歌にして是は巢林子が作り添へしなるべし、「小町おもへば照る日も曇る四位の少將が涙雨」などいふはいづれが古きか知れねど、そなた思へば照る日も曇る云々「唄ひしに皆もとづきしなるべし。「しやんとせい與作」だけは囃し詞なり。

●稲負鳥　古今傳授三鳥の一にして、鶴鴫、鶉、雀、山鳥、雁、水

抱上ても腰をれの　地　三十一期の浮思ひ、最期は伊勢路育は近江、生れは丹波栗毛馬、夫を抱きかき乘せて、妻は口取はいどう〳〵、今六道の次傳馬三途の川を打またぎ、昔の小歌引かへてあひの土山死出の山、冥途の旅路通し馬たどるや夢の　三重

下之巻　與作小まん夢路の駒

歌　與作丹波の、馬追なれど今は、野ずへの放れ駒じや、しやんとさせ與作、與作思へば照る日も曇る、關の小まんが、涙雨か、しやんとさせ與作、與作〳〵と、

地　呼びよばれつる、いなおほせ鳥も　フシ　ねをいれて、野邊のかるかや軒ばの荻、馬の馬草にかひのこす、

鶴等諸説定まらず、其の中にも馬といふ説あれば、こゝへ取りしものなるべし。

●さをとゝしの參宮　〔參注〕此の文句に契りそめしを一昨々年とせ

フシチクリ草も〔我身も此あか月は、チクリともに枯野のくつわむし、人を乘せたが乘せられて、かぎりの旅の坂の下、なふあれ夜ぶかに急ぐのりかけも、泊りは知れて　フシ四日市、地我は泊りもなゝ七日、中有の旅の馬ひつじ、歩めしゐ〳〵ア、しぶとい口を、引どしやくれど　フシ行かぬる、畜類ながら性あれば、最期を惜む綱すくみかや、歌私は十二で人よび初めて、今年廿一まる九年、とめし旅人何萬人ぞ、關一宿はせばけれど、男女に幾人かともの好みも時の花、無常のナチス風にちりはてゝ、フシ馬より外に、とふ人も、泣てくれるか優しやと、フシ鞍にひれ伏しはら〳〵と、袖には涙梢には、木の實こぼるゝ掠本や、契り初しはさをとゝし拔參宮

しは據る所あるなり。寶永三年伊勢大神宮へ拔參宮といふことはやり…其賬はひし有樣を記して寶永千載記といふ書あり近松が此作は寶永六年なるゆゑ前年の繁昌の事を思ひ寄せて二人が馴れ染を其時となせしなり。

●そなた櫛田の眞中程で云々　「松の落葉」卷七「伊勢の櫛田」の文句を取れり。其の唄「伊勢の櫛田のまん中ほどで深き思ひのやれ紫帽子ほんにくどくかそりや眞實かごちの如來の惠みもあろと戀の重荷を乘りかけ馬にはなれがたき我思ひ」。ごちの如來を關の地藏にしたるなり。

●豐國野　安濃郡にあり、椋本と窪田との間にある平野にて並木の松十有餘町あり、下に安濃の松原といふは是なるべしと。

●小まん泣々申すやう　此の所祭文かゝりにて、八百屋お七の祭文（「音曲色酒盛」）の文句を取りしなり。お七の文句「お七泣々申すやういつぞや類火にあひし時……あふて語らん嬉しやと思ひ定めて夕ぐれに、一わの藁に火をつゝみ、ほゝり上たる計りにて、もゆる仔

そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをの道づれに、歌そなた櫛田の眞中ほどで、深き思ひをやれ紫ぼうし、ほんに口說いたその眞實が、關の地藏を誓ひにかけて、戀の重荷の、馬追ふとても、足もかるゝ〳〵　フシ心もひろき、豐國野とこそたのしみし、あかれぬ中を秋の霜、今宵切りぞと氣もへりて窪田に浮名うづむかや、祭文小まんなく〳〵　ヰイ申すやう、緣は異な物その時に、起請一枚書ねども雲津の川瀨二世三世、指切しての云ひかはせ、枕定めぬ參宮に、寢て居て胸をやかふより手を引あふてゆる〳〵と、歩みなぐさむ　ヰイ夕暮は、一わの火繩に火を付て、相合ぎせる思ひ草、思ひし、かひも夏の蟬、春秋知らぬ世のたとへ、與作小まんが身の上と　フシ昔忍ぶの露涙、今を恨

細は候はず云々」。

●雲津の川瀬　かはせないひかはし、取かはしの意に取れり。

●夏の蟬　「徒然草」あだしの丶段「かげろふの夕べなまち、夏の蟬の春秋を知らぬも云々」。

●このもかのも　此面彼面にてこなたかなたといふに同じ。但しこゝはさろ意味あるにあらず、こは次のあの丶もの丶枕詞、あの丶ものゝは安濃の松原といはん爲のみ。

●いがき　瑞垣または玉垣などいふに同じ。

●齋宮　古へ天子の御即位ある毎に、内親王又は女王の未だ嫁し給はざるを選びて、伊勢加茂兩大社に奉祀せしめ給ふ。共に之を齋王といひ其居所を齋宮といふ。但し加茂は齋宮といはず齋院といへり。〔雲註〕忌詞とは經を染紙といふ類にて血の汚れを忌めば、死體を取をさめてくるゝ者もなく道ばたに捨さらさるべしとなり。

のうき歎き、このもかのもにあの丶もの、安濃の松原時雨行く、阿漕の海士の、フシあこぎにも、過にし方を思ひ出て、二見の浦の、二つ石、清めし肌引かへて、地　双に穢し死する身の、かたみとなれや石塔の、歌標の石を思ひ出す、いがき越へしも戀のつみ、末社〳〵の宮めぐり、地獄めぐりを思ひ出す、返らぬ昔思ふまい、泣な〳〵と鳴く鳥、人の末期を知らすとは、地音にきゝしが　フシ今ぞ知る、朝熊の嶽淺ましや、彼の齋宮の忌詞、いまはしや迚道もせに、晒す身體を道者にも嫌ひ憎まれ、人々の　地よもや回向もなさけなや、歌過去もエイ未來も現世で知ると、男見る目は泣く目もと、ヤツ、りありやそりや、フシ早明がたの、お八つの太

●千貫松　豊國野にある松。

●胴すはり　決心するとを胴をすへるといふ。

鼓の聲は高田の寺、泊り〳〵は多くとも、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、觀音勢至手を取て、蓮の臺に泊らんせ、夫婦の外はあひ宿も南無阿彌陀佛彌陀佛と、こうの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の縁千貫松にぞ　三重〳〵着にける

與作も名ある弓取の、家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴すはり、土手へ飛をり馬を小松の根につなぎ、小笹の露を打拂ひ、爰へ〳〵と小まんが手を取り顏を眺め、詞廿一と卅一二人合せて五十二才、地是でから長命と云ふ程の年でもなし、いとしい人を殺すよなふ心にかゝり言たひことは、ないか〳〵と言ひければ、ハテかはいひ男と死ぬる身が浮世に心なに殘らふ、去

●人間の念慮限りなく云々　人は息きある間情慾の盡る時なきをいふ。六根は佛説に眼、耳、鼻、舌身、意の六知覺をいふ。

●涅槃　梵語にて安樂、寂滅、不生不滅等の義にして、三界の煩惱を斷盡して灰身入滅するをいふ。

●箱枕　「嬉遊笑覽」に曰く、後世入子枕といふ物あり箱枕の細長きを五つも七つも數多く入子にしたるなり……今の樣枕なき以前は中人以下皆箱枕を用ひたりと見ゆ下賤の者のみにはあらず、常短が塵取に大形の恨みのかずも十ばかり來ぬ夜かされてうき枕箱といふ句あり。「女用訓蒙圖彙」には括り枕のみを出し箱枕なきを見れば、括り枕が本式にして箱枕は略なるといふまでもなし。

ながら只一ついふて返らぬ事ながらと、言んとするをア、もふ〳〵それもいらぬ事、詞人間の念慮かぎりなく、息の通ふ間は六根の樂慾にひかれ、思ふ程言ふ程なほつきず皆罪障の種となる、此念をはらふを生死をはなれ涅槃門に入ると云ふ、我とてもいひたいと千萬無量を打捨たり、地され共一つの粗相にはそなたに預けし箱枕に、先祖の由緒所々の勳功知行付の一卷あり、死後に諸人にさみせられ家名をながさん此無念、よし夫はまゝにもせん不便やかわいや與之助が、最期迄親とも知らず親戀し父親戀しと、思ひ死に殺されん、其思ひは親のわざ、親ではなくて歃ぞとかつばと伏して泣ければ、地それ私には言ふな〳〵とて、こな樣云ふ

●どよぐ　どよむに同じ。喧しきこと。それを豐國野にかけたるなり

て泣しやんす、そんなら私も父樣が年よつて子をさきだて、とほうがあるまいいとしばや、詞チヽ念を殘すが迷ひとなりたとへ奈落に沈む共、親の事と子の事が、思はず言はずに居られふか、地そうでござるそふじや物、いつそ云ふて罪作り親のため子のために、地獄へ落てやりませふと二人ひつしと抱き付、聲の限りをとよくの〻　フシ風も哀を添にけり、地あれ〳〵あれへ見へる早提灯走り飛脚と覺へたり、道端はいかゞなり、いざ最期場を換まいかと、半町ばかり草わくる、飛脚どもは汗水にて、詞お乳の人の御立願あす四つ迄に、地命乞ひの太々神樂、御願かなへば御祝義の、御褒美は知れたと　フシ急げ〳〵と走り行く、詞あれ聞やつた

●さや　鞘なり。忍び提灯なれば、覆ひを掛けたるなるべし。

か何方のお乳の人、命乞の御願とは養君の煩か、地いらぬ命が二ツ有、アヽ、替らるゝ物ならばと、悔めば小まん涙ながら夫が叶ふ程ならば、餘所の子よりもこつちの子切れて死ぬる身替りに、とても死ぬる此身體髪頭より爪先まで、一分だめしに試されても替りたい助けたいと、歎きしづみし誠の心、百千萬のいのりよりフシなどか祈禱にならざらん、地時に人足四五十人ひそめいて來りしが、詞ヤア主なき馬の夜中と言ひ、繋がれあるは訝し、提灯立よと呼はつて、忍び提灯さやはづせば　フシ萬燈會のごとくなり、地遠くはあらじ一二町野をかれと大勢が、與作小まんと聲をかけ漏る方よく取りまきたる、南無三寶見付られては二度の耻、

いざ死なんとひらりと拔く、刄物の光りそれやこそとお徒士衆、やにはに二人を縋りとめ兩方へ引わくる、詞やれ侍ならば情を知れもとは伊達の與作ぞ、一生懸命の時節到來死損なはせて呉るか、地エ、口惜いと身をもがく、遙か彼方に立られたる乘物より御意を請、若侍走りより、詞ム、珍しい與作、故朋輩鷲坂左内見知られつらん、今度姫君關東御下向御悅びの時節、今夜の始終御憐憫淺からす、吟味仰せ付られしに小まんが箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之助にまぎれなく、殊に内室お乳の人神妙の心ざし、かれこれ感じ思し召し、三吉が命を助け母儀もおなじく御供にて、兩人を助けんため忝じけなくもあれ迄お乘物を

出された、　地大殿の御前相濟迄五十人扶持の御合力、小まんもお家へ引取、重ねてよろしく御了簡あるべしとの御意の趣き、有がたふ存じサア、お乘物のお供して　フシ歸られよとぞ述にける、　詞與作草むらに頭を付、大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にてあらぬ樣になりくだり、親子も知らず耻辱の屍をさらすべき所、姫君の御愛憐生々世々に忘れ難し、去りながら女共も忰も、人の笑はぬ心ざしも立たるに、拙者は何を面目に、おめ〳〵と諸人に生顔があはされん、　地朋輩の情に死だ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請る小まんが事はその替りに、賴み存ずる左内殿と云ひもあへぬに、是〳〵此小まんに殘れとはお内

儀樣の思召、　地わたし計りに恥さらせか一人歎けか物思へか、口で云へば人そばへ先立て埒あけふと、取付脇差おし止め、そふじや〳〵、恩も禮儀も忠孝も死ぬる身にはへちまの皮、爰へよれ南無阿彌陀と、刺違へんとする所を、左内飛入り脇差もぎ、二人を兩へ踏倒しはつたと睨んで齒噛をなし、　詞ヤイ道知らずの人外め、さすが以前は御家中の物頭釆配まで御ゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心まで上々の馬方になつたよな、諸傍輩多けれども親左近右衞門が烏帽子子、與作と云ふ名を付たれば、此左内と己と兄弟分が口惜い、死なふ〳〵とやかましい死ぬるが左程珍らしいか、弓馬の家の死と云ふは、城攻の一番乘野合軍の一番鎗、

●一切經　佛典の總稱にして經、論、律の三藏を併せていふ。其の中にもなしとは、ためしなき馬鹿者と恥しめたるなり。

よき敵の首取て討死するを侍の、死難い死とは云ふぞ覺えて置、關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無こと讒の恥を思んより、主君の恩を報ぜぬは侍たる身の大恥と知ざるか、扨淺ましや後指を差れふが、犬畜生と言れふが、我身の恥を振り捨て、厚恩の主君に忠節をはげむこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすいと言ふ物ぞ、此道理合點なく、死んで勝手がよいならば左内は止ぬ心任せ、（詞）去りながら侍ならぬ馬方を双で死なすは勿體ない、（地）舌をくふか身を投るか似合た樣に在郷馬の、口取綱で首くゝれ情に見物してやらふ、エ、侍でもない者に、心を盡して氣がつきたと（フシ）大欠伸して居たりける、（地）與作わつと泣出

し誤つたり左内殿、此仕合の上なれば心も闇と罷りなる、萬事貴殿に任せ置くと手を合すれば膝立直し、（詞）合點いつたか過分〳〵それでこそ與作なれ、御前は拙者が受取たと大音上て、與作は御意を重んじ生害思ひとゞまる由、御披露あれ女中衆と、（地）呼はれば御乘物、ざんざめかいて舁きよする、お乳の人も與之助も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合せ何事も姫君樣、御慈悲ゆゑと計りに（フシ）て嬉し涙にむせびける、姫君與の内ながら與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か、關の小まんも双紙にある繪で見たよりはよい女房、聞けば踊が上手じやげな、明日は一日滯留して、踊を踊つて見せてたも、

●仕合よしで今はお江戸の刀さし云々　「松の落葉」卷四「與作踊」の文句に「與作丹波の仕合よしのふみ馬ごめんあづま入馬かたなれど今はお江戸の刀さししやんとさせよさ與作へ」此の歌前にも引きしが、本文終りの文句中、姫君は一日滯在して踊を見んとの詞あり。これより大切に踊の一場ありて、はじめは此の與作踊の所作を演じたるものなるべし。然るに二度目の興行の時、此の踊も陳腐とて、「與作踊」の名を以て、重井筒のお房德兵衛の事を唄に作り、踊りしものと見えたり。

●エイ〳〵　此のくときといふは何々おんどなどいふ流行歌なり、歌舞伎役者の紋盡し、又は褒め詞或は心中淨るり などを小歌に作りて歌ふ、讀賣りの類なり。これは近松が重井筒の大意を其の節に作りて踊らせたるものなるべし。

家老共に云付て知行をたんとやらせふと、生れついたる御詞其一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代によろづ與作がもろ果報、小まんが戀も通り町仕合せよしで今はお江戸の刀さしじや、しやんと一筆ふみ馬御免、踊子よする笛つゞみ、馬も太鼓をうつくしき、踊り浴衣の上から下まで、色めき悅び　三重〳〵賑はへり

與作おどり

クドキ　エイ〳〵〳〵紺屋の德兵衛、房にもとよりこいそめこみの、内の身代灰汁でも剝げず、口入たのみて銀四百目を、かりにやとふて女房と名づけ、阿房三太をらむうげん太で、やまけふづくる内義の心、男い

としゝ子もまた可愛、しはい隱居の手前をつゝみ、宵寢する子を我夫ぞと、フレいひまげすます鬢かづら、德兵衛不義じやとはやまるきほひ、顏は十めんぐめんもいらす、詞羽織ひらりとやつ〳〵この〳〵我子のこの〳〵胸ぐら取つて引ずり出す、宵よりつもるうき涙、理づめ義理づめ情づめ、如才内儀の貞女にめでゝ、金も投け出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ切たと誓言すれど、こよひちぎりの戀風は、生薑酒でも フシふせがれす、氣もふは〳〵の玉子酒、詞まゝよ行てのきよ、さふもなるまいか、どふせうか、かうせうが酒、辻にしよつゝくばふて、思案中橋こひしさまさる、胸かきまはす玉子酒、心ふたつに打ちわつて

君が方へと走り行く、跡は内儀がな獨寢てサ、チドリ房は日くれて人まつ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ、肥後屋の迎ひはやとく德兵衛、兄の病氣を見舞顏で、來ても互の心の底は、云ふにいはれぬおしどりの、たゝんとすれば病者のくせの長話し、何とせんきのあら腹いたや、痛や〳〵と空腹病めど、空さむき夜に是非に泊れとゆふ霜の、おくの炬燒にすとんと轉けて、泣て忍ぶは隣の二階、そろり〳〵、そろ〳〵、そろ〳〵さし足は、誰じや房か、地德樣かいの、これは夢かと抱き付き縋り憂をさゝやき辛さをくどき、死なでかなはぬ チドリ身のさしづめとなりゆく果ぞ、あはれなり、房は背中に大屋根傳ひ、足もよろ〳〵夜は何時ぞ、七

つ八つの芝居の仕組、浮名ばかりは殘れども、殘らぬものは命ぞと、いとゞ涙の樽屋町、おりて再び此娑婆へ、いつか高津の フシ日親樣で、南無妙法蓮華經なむう、ほうれんげきやうなむめうほうれんげきやう、蓮華ひとつと脇差を、胸におしあて只一刀、あつと叫びし一聲に、づんぶり染の紺屋の德びやうゑ、お房が頓生菩提の回向、水を手向て再び盆を、重ね井筒と名のたつにさ、千歳樂萬歳樂、おどりよろこぶ御代ぞたのしき

高野萬年草

桑之助（おうめ）

解題

『外題年鑑』に、寶永五年四月十六日より竹本座にては、前『酒呑童子』三段目、切に此の淨瑠璃を出しゝ事を記せり。門左衛門五十六歳の時なり。實説は、神谷宿雜賀屋の娘お梅と高野山南谷吉祥院の小性桑之助とが、女人堂にて情死を遂げし事を作りしものなり。事件は單純ながら、女人禁制の高野山にて情死せしことなれば、世の注意を惹き、淨瑠璃の主題とはなりしなり。『傳奇作書』（附、下）にいふ。

寶永五子年、竹本座の淨瑠璃に近松門左衛門作にて高野山女人堂心中萬年草といふあり、紙屋宿雜賀屋與次右衛門の娘お梅と南谷吉祥院の小性成田桑之助との心中あり、此道行に高野の名所〳〵を出して、とゝは女人堂にて心中對死の所の文句にいと珍らしき文あり、都て最期の場に及んではいつも南無あみだ佛とはいへど題目を唱へるも口拍子あしく、大約が念佛なるにまして陀羅尼などは色氣す

くなくて唱へる事なし、此の高野計りは念佛題目は唱へずいかゞあらんと見れば、夫婦親子一蓮のしめしの時刻のばされず、只今ぞと脇差抜き胸におしあておんあばぎやべいろしやのまかもだらまにはんどましんばらはりたやウンと突こむ切先の肝に當ればのりかへり、はりたやウンとくり通す、あうんの息もきえ〳〵とのつかへしつ苦しむ聲(下略)此淨瑠璃今嘉永三戌年まで百四十三年となれど、昔も是らは作者の穿ちとやいふべし。

實にや一鳳の評の如く、作者が高野における特殊の風俗を能く此の作中に利用したるは手柄なり。前の「おんあばぎや」の如きも其の一なれど、粂之助が祐辨律師の怒りを估ふも男色の關係に基したるは、高野山の風俗に當込みしものにて見物の顰を解くに足る。又高野へ女の忍び入る事あれば、山神怒りて大雷大雨の變異を下すといふ事や或は萬年草の外題の如き高野に特生の苔にして、此の草を蔭子にして、旅人の生存を占ふに、鹽水に浸し、若し草の生きたる時は其の人無事を知り、枯れ萎るゝ時は其の人生存せずといへる謬信に據り、下卷に姉が此の草に依て、粂之助の安否を占ふ事あれば、之を外題に命じたる等、作者の用意の周到なるを見る。

●女嫌やる高野の山に、なぜに女松が生ゆるぞや　古く流行りし小唄なり。高野山は紀伊國伊都郡にあり。高山い頂上に平原曠野あるを以て高野といふと。弘仁七年、弘法大師唐より歸朝の後、勅許を得て此の山を開き、金剛峯寺を創建し、修禪入定の地となす。大師此の山に捉して女人の登山を禁ず此の歌は恐らく女人禁制のいはれなきを諷したるものなるべし。

●お寺小姓　小姓はもと高貴の人の側近く仕へて、雜用の給仕をする少年のことなれど、寺院にて之に倣ひ小姓を置くより、殊更にお寺小姓といふなるべし。

●文殊　梵語曼殊室利の略、一に普賢如來といふ。菩薩の一にして智惠の佛とし、常に獅子に騎れる所を圖す。又妙吉祥と號く。兒と、

粂之助高野萬年草

近松門左衛門作

歌　女嫌やる、高野の山に、なぜに女松は生ゆるぞや、なぜに女松が生へまいならば、夜這星でも飛まい か、松より梅より柳より、お寺小性の兒櫻、兒文殊の御相傳、大師の廣め置き給ひ、俗も尊む若衆の情、衆道秘密のお山とかや、地南谷の吉祥院に、播磨大名の使者有とて、庭の掃除の下男、小性衆は客殿の、床に掛物臺子のほこり、掃いつ拭ふつ忙しさ、詞これ長助關介、掃除が大概出來たらば、不動坂まで一走り、御

いひ吉祥院といふ、皆文珠に因みある名なり。

●大師　弘法大師のこと。名は空海又遍照金剛と號す。讃岐多度津の人なり。

●若衆　もと歌舞伎子を若衆といふ。それより美少年を一般に若衆といふ。男色に關係せる名なること勿論なり。

●衆道の秘密　衆道とは若衆の道の略にて、男色の交情をいふ。弘法大師高野山に女人の登山を禁ぜしより、女犯をなすものはなかりしも、其の餘弊として男色の行はれたること此の山ほど甚しきはなしされば俗に大師は山を開きしのみならず、衆道の開山なりと嘲るもあり。こゝも即ち眞言秘密をもぢりたるなり。

●南谷　高野山壇上の巽の方往還の右にありて、西院谷につゞく、吉祥院といふ宿坊ありしや詳ならず、恐らく假設なるべし。

●臺子　＊

●不動坂　京口ともいふ、京坂より登山する道なればなり。一心院谷にあり。此の路傍に内の不動、外の不動の二堂あれば、不動坂口といふ。

使者が見へるか見て戻りや、地急ぎや〳〵とありければ、詞いやそれは餘の者遣らしやりませ、私共は皆樣の髪を結ねばなりませぬ、寺方のお小性は、俗の内儀と同じ事、地法印樣の奥樣の髪を結はずに濟ますかと、洒落をまうけの顔ひねて、足らぬ心の花之丞、詞ム、そんなら此方は法印樣と女夫か、エ、在所の父樣や母樣は嘘付じや、地山へ登れば魚喰ふ事がならぬ程に、豆腐や蒟蒻を、鯛や鱧じやと思ふて喰へ、山の芋を鰻と思へ、法印樣を親と思へとばつかりで、女夫とは聞なんだが、詞アヽ、思ひ當つた一昨日のお日待に、法印樣の相伴で、善哉餅を十三杯、地それから身持になつたやら、フシぼてれんじやと腹さすり、地朋輩は皆小性

●俗のお内儀　寺の小姓は男色の爲に弄ばるゝもの多ければ、さながら俗人の妻女に同じとなり。近松滑稽の筆、暗に一山の墮落を嘲る。

●善哉餅　上方にて汁粉のことを善哉といふ。但しつぶし餡のもの。

●神谷宿　不動坂口の一宿、神谷の辻と稱するもの、旅舍數戸あり。

の、顔を赤めて挨拶せず、久米之介は年嵩にて、なふ花殿、詞笑止な事いふ人じや、是にござる主膳殿八彌殿右門殿、年は三ツ四ツ下なれど、此方の心が足らぬ故なぶられて居さつしやる、地此方は他國者なれば、當地では此方の里を賴みにして、一家同前の此方を笑はせて本意でない、此久米之介が居る内は侮らせはせまいが、追付お暇申請け、國へ歸つた其跡では、高野一山のなぶり者、少と嗜んで下されと、いへばむつと腹を立て、どんな事言やんな、詞法印樣の女房が法印樣と並んで、善哉餅喰ふて孕んだがおかしいか、コレ忝なくもおれが親は、神谷の宿で隱れもない雜賀屋の與治右衛門、地母樣とひとつにいつゝも物を喰やるで

おれも生れる、お梅といふ美しい妹まで生みやつた、其方も何時も此方へ來て、妹のお梅と二人土藏へ這入て、善哉餅を喰しやるやら、お梅が聲で味ひ〳〵といふたを、フンおれや聞いたぞ、といひければ、地久米之介は赤面し、殘りの朋輩は口々に、賢い人の言ふ事を、氣にかけては果がない、去ながら、正直な法印樣のお耳へ入れては言譯ならぬ、小性仲間の恥辱なり、沙汰しやるなと制せられ、詞六尺共も聞流し、阿呆に油斷は猶ならぬと、チクリ目配〳〵してこそ入にけれ、地稍あり て表より、成田久米之介樣に逢まうしたい、お國の親御武右衞門樣よりの飛脚なりと、地若黨一人刀の先に、文箱附て突と入る、詞ム、久米之介とは身が事、

●穴市　錢打といふ博戲の一種。地に穴を穿ち、錢を拋ちて取るも

國許よりの使とは氣遣はしと、いひければ、いや別儀にてもなく、御老體の武右衞門樣、御隱居の願ひに付、久米之介を呼戻さんと、御一門の談合極り、地法印樣への御狀段々の御口上、とかくは首尾能お暇の出る樣に、御朋輩樣達へも賴みませとの御使と、文取出せば久米之介、是は思ひ寄らぬ事、父が老後の大望を違背ならずといひながら、我口からは申されず、何れも朋輩言合せ、お暇の出る樣に、取合せ賴みます、狀も進ぜてよい樣に、いづれもに任すると、手を合すれば人々も、心一ぱい申て見んと、一度に坐敷を立ちけるが、花之丞振返り、詞是久米殿、お暇貰ふて往しやらば、糠袋はおれに下され、地巾着にして穴市のつぶ入れま

の。今路上に小兒の弄ぶ、ヘッヶ面こと稱する遊戯も亦穴一の一種なり。

錢打（和漢三才圖繪三所載）

●岸の和田　泉州岸和田のこと。

すと打連れて、（ナクリ）皆々〳〵奥にぞ入にける、（地）飛脚はそつと側に寄り、（詞）申しお國からとは僞り、雜賀屋へ出入いたす岸の和田の九兵衞と申す駕籠の者、お梅樣のお賴みで、竊にお咄しいたせとある、彼の御存じの京の紙屋、此中下つて逗留し、二三日中に祝言し、其明る日、お梅樣を京へ連て參るとて、（地）内方にも御用意、とかくお前が片時も早く山をお出なさるゝと、何處ぞへ一所に立退くか、分別も有る所、それ故内々約束の如く、お國の親御の僞狀で、お暇取て今日中に、久米樣連て來てくれと、いとしぼやお梅樣、涙を流し手を合せお賴みなされた手前もある、何卒お供致したし、詳しい事はお筆にと、懷中よりお梅が文、取出し

てぞ渡しける、久米之介も心せき、成程〳〵其筈、其方も知ての上なれば、隱す事は少しも無い、外の者に添はせては、生て居られぬ二人の中、親の命とあるからは、法印了簡ないとても、暇請捨て出易し、先文見んと封じめ切り、讀んとすれば南無三寶、上包はお梅が文、久米樣との名宛にて、中は吉祥院法印樣參る、成田武右衞門親の文、（詞）ム、さては聞えた、お梅が常々男手を能ふ書くゆゑに、國元の狀をも人賴みするなと下書書て渡せしが、（地）隱し忍んでする事とて、封違へて我文が、法印の手に渡つたか、これは〳〵と色違へ、立ても居ても詮方なく、フシ狼狽廻る折柄に、（詞）主膳立出で是々飛脚、（詞）法印直に問ふ事あり、（地）先づ休

●ほうご棚　反故棚か。

●細谷川の丸木橋　小唄の文句を取り蹈返れを文返れにもじりたるなり。

●宿坊　高野山中には宿屋を營業とするものなし、皆寺院にて宿泊す、これを宿坊といふ。揚屋のことを宿坊といふも、是より起りたる詞なり。

足召されとの事なりと、言も敢ぬに久米之介、なふ主膳殿、　詞　最前の文を法印樣はハヤ御披見なされたか、封じ目お截なされずば、そつと取て來て下され、一期の御恩といひければイヤ其狀は、法印樣繰返し披見あり、ほうごだなへ入て錠下し、手が汚れた勿體ないと、跡で手水をなされたが、　地　如何なる狀でござるぞと、問へども譯は咄されず、はつとばかりに胸躍らし、詮議に逢はゞ如何せうと、飛脚の九兵衞が心まで、細谷川の丸木橋、フシ文返れとぞ祈りける、　地　時に麓の山動搖む、木遣に法のひんよゑい、聲播磨路の大名より、御墓引くこそ　三重　〳〵殊勝なれ、フシ則ち宿坊　地　吉祥院僧達立合ひ、石塔請取給ひければ、使者は坐敷に直り

●祠堂銀　先祖代々の供養料に寺に寄附する金をいふ。

●不退轉　佛說に、既に占め得たる地位を却行するを退と云ひ、此より彼に移り旋還止住なきを轉といふ。不退轉は末世末代まで移變なきこと。

●卒塔婆　木又は石にて地水火風空の五層の塔を作りて佛に供ふるもの、印度にては、如來自ら迦葉佛の爲に寶塔を建て、我朝にては蘇我馬子大和國高市郡大野丘に建立せしを創めとす。「涅槃經」に、「一見二卒塔婆一、永離二三惡道一、何況造立者、決定生二安樂一」とあり。されば死者の冥福を祈る爲めにこれを建るなり。

●彌勒　萬歲の後は佛入滅後五十六億七千に出現するといふ理想の佛にして、此の時こそ世界の黃金

ける、法印軈て出迎ひ、　詞　遙々のお使者御大儀〳〵、いざ〳〵是へそれお盃、　地　お茶持て參れと挨拶ある、使者の侍慇懃に、　詞　旦那が曾母第七年に方りし故、御當山に石碑を建て、につばいを供へ申すに付、祠堂銀五百枚奉納いたされ候、　地　御受納あつて末世末代、不退轉の御回向頼み存候と、包みの白銀、目錄添て渡しければ、武門の御身に御信心御孝行の御追福、感じ入候、　詞　それ我山に卒塔婆一本殘せし人は、五十六億七千萬歲の後、彌勒の出世に逢せ給はん御誓願などか疑ひ候べき、　地　先此銀子の請取認め申さんと、法印奥に入り給へば、豫て用意の勝手より、銚子盃重箱や、はや吸物の椀折敷、フシ善盡したる馳走なり、　地　御住の弟

時代は來れるなれ。

●律師　僧官にて僧都に次げるもの、正權ありて五位に準ず。

●納所　寺院にて事務を取扱ふ所を云ふ。布施物を納む所の意なるべしと。

●同宿　同じ寺に寓する僧のこと。同じ學校に在るものを同窓といふが如し。

●伽羅め　ほめたゝ詞。

子ゆうべん律師を始めとして、納所同宿入かはり立かはり、山中と申し風情はなくとも御時分よし、お吸物でもお換へなされ、詞それ小性衆、相手になつて御酒一ツ、地緩りと上つて下され、とあひしらへば愛嬌の、小性はあいと色めきける、使者も數献を傾け、詞扨々御嫖致なる小性衆、いづれもお名は何んと申す、御生國は何國〳〵の御方ぞ、仰聞けられよといひければ、我等有村主膳と申し、當國田邊の者、私は世嗣八彌と申す大和の者、身共は伊賀の上野の生れ、小栗右門と申します、地私は此麓神谷の宿、雜賀屋の花之丞、地年は十九で法印樣の御内儀、私が妹にお梅と申して、ずんと伽羅めでござれども、惜い事は女子で、坊樣の

口へ這入りませぬ、私が顔は花の樣で花之丞と申しまする、詞妹をお梅といふ譯は、如何した事か知らねども、彼の梅といふものを、此方は割て見さしやつたか、中に平たい物がある、地此方のお梅が中にも、それがあるやら無いやら、終しか割て見ませぬ、フシ無念な事とぞ眞顏なる、地使者も返答仕兼れば、朋輩は笑止がり、是しい〳〵と袖を引く、久米之介はお梅が噂、聞くにつけても彼の文の、法印の手に渡り、今や詮議のあるかとて、思痛める胸の中、釘を打る〻八寸の、給仕も更に手につかず、目に涙持つばかりなり、詞使者重ねて、御自分はお年嵩と見え申す、お名は何と生國はと問ひければ、我らは播州飾磨、成田武右衛門が忰

同苗久米之介、ム、さては同國武右衞門子息、高野にあるは此方かと、地見上ては泣出し、見下しては涙にくれ、打萎れて見えければ、地身に思ひある久米之介、心便りも無き折柄、故郷の人のしみ〴〵の、涙にほだされ側に寄り、詞一見に馴く〻敷事ながら、同國のよしみと申し、御落涙の樣子、御心底の優しさをも推量つて頼み奉る、私事此山に、一夜も足をとゞめ難き身の難儀出來いたし、幸ひ國より迎ひも參る、具の事は麓にて、お物語いたしませう、地お詞を添へられ法印より暇を取り、今日中に此山を連てお出下されば、生々世々の御恩に受け、命の親と存じませふと、身の置所なきまゝに、粗忽の無心も戀路ゆゑ、フシ若氣ゆゑこそ

●雞合　闘雞のこと。

是非なけれ、使者は膝を立直し是久米之介、詞お主が山へ登つたは、末は出家の筈なるに、今此山が出度いとは還俗したい心よな、ヤレ出家する因縁を忘れたか恨めしい、お手前十二歳の時、朋輩は伊吹重太夫が二男、卯之介といふ十一になる友達と、雞合の友達喧嘩、敢なくお主が手にかゝつた卯之介が兄、伊吹千右衞門とは身共が事、其頃は數年の在江戸、後日に聞けば殿よりは、切腹との御評諚、父母が了簡にて、子の可愛ひは同じ事、親達へ歎きをかけ、討れし者の爲でもなし、出家させて稚い者の後世弔はせんとの扱ひにて、我親共が命を助け、當山へは登らぬか、地一人の弟が死骸をも見ぬ懷しさ、せめての形見に其方を一目見た

●九字護身法　九字は「臨レ兵闘者、皆陣列在レ前」の九字の稱にして、陰陽道より兵家、修驗道に移りて、護身の法となり、此の九字を呪へながら指頭にて空中に先づ四縱線を畫さ、次に其の上に五縱線を畫く、これを九字を切るといふ。

●禮拜　佛道にて禮拜といふは、兩膝兩肱を地に着け、低頭合掌するをいふ。

●結界淸淨のお山　地界において制限區域を立てるを結界といふ。即ち法を以て結び、外道魔物を防ぎ入れしめざるを。例へば女人禁制の如きこれなり。

●女犯　僧の邪淫戒を犯すもの。

●狗賓　天狗の異名。天狗は愛宕山、又は秋葉山の如き深山に住む怪物にして、鼻高く羽ありて飛ぶ此の魔物人の罪惡を犯す者ある時は、天に代りて種々の制裁を加ふるが如く、昔は信ぜられたるなり。

●御げん　御見のこと。

●眞言　眞言陀羅尼の條を見よ。

さに、此度のお使ひを望み受け、小性衆の名を尋ね、久米之介と聞くよりも、弟があらば今年は十八蕾む花つれなくも討たかと、思へども更めて、怨みを言はん樣もなく、仇を恩なる出家して、後世を助けてくれるかと、思へば形見の心地もする、怨めしいと床しいと、未練の涙をこぼしたが、悔しいぞ久米之介、詞たとへ親の敵でも出家は格別、在家となれば見逃し置れぬ弟の敵、地此山が下り度いとは、それこそ望む所、麓に下つて八年以來鬱憤を散ぜん、法印に斷り申す爲御意を得んと立つ所へ法印駈出、樣子詳しく承る、詞やれ若衆奴、おのれは未だ髮こそ剃らぬ、九字護身法傳授して、禮拜化敎も勤むれば出家も同前、殊に大師この

かた結界淸淨の御山、假にも女犯の穢があれば、一山暴て震動し、其身は狗賓に五體を裂れ、木の枝にかけらるゝは、地目にも見せ咄も聞かふ、それを知て此寺を、よふも〳〵穢したな、地國元の親から珍らしい文を得た、此年になれども、思ひまゐらせ候べく候、御げんの如く二世三世、くされ〳〵と血判を据ゑた、小舌たるい女子文、手に觸れたは今日始め、地梅よりとは誰が事、皺の寄た此法印を、梅干に譬へたか、師匠と思ふな弟子でもない、あのお使者の手にかゝり、死ふが生よふが構ひない、あれ引摺出せ叩き出せ、十一から敎へた經文も眞言も、魔道へ捨たか勿體ないと、腹立涙にくれ給へば、久米之介は伏沈み、在合ふ小性

●金胎兩部　大日如來理智の德にして、其の心性より顯れたる諸相をいふ。即ち金剛界、胎藏界これなり。

同宿も、側から何と千右衞門、呆れ果たるばかりなり、ゆうべんりつし走り出、久米之介が袴腰破るゝばかりに、蹈付け〳〵引起し、齒がみをなして涙を流し、

詞　エ、見損ふた忰奴、其根性とは夢にも知らず、兄弟の契約の懇したは何事ぞ、雜賀屋にはお梅といふ若い娘もあるほどに、出入するには行義が大事、浮名ばし立られな、若衆のたしなみ是れ第一、兄分に耻かゝすなと起居に言ふたを忘れたか、是千右衞門殿、今迄愚僧が存ぜしは、彼奴は敵持たる身、若も覗ふ人あらば、拔身の下へ此法師が駈入て討れんと、一命やつたる中なれども、只今懇切る上は、金胎兩部の大日も御照覽ましませ、不便とも存ぜず、御舍弟の敵、サアお手

にかけられ、と坐敷の下へ取て投げ、俗の女を慕ふより、法師の身にて少人を、思ふは幾千まさるぞや、其兄分を袖になし、こゝろざしを無下にした、憎や無念やあさましや、と氷の樣なる眼より、涙をはら〳〵とぞ流しける、地千右衞門續いて下り、心ないには似たれども、寺を出れば弟の敵、討たでは武士の道立たずと、するりと拔て胸打に、四ツ五ツ丁々と打つけ、是からは死したる人、此方遺恨なき上は、心次第に師弟の中、何卒挨拶いたしたいと、有繋は武士の神妙さ、久米之介わつと聲を上げ、只今の胸打も、打て打るゝ身の報ひ、耻辱とも思はねども、山の名殘に、法印樣の御機嫌損ふ悲さと、二世と賴みし兄分を、袖にした

●なんでもない事　※

との怨みの詞、悲うて〳〵死んでも迷ひとなりまする疾に髪を剃たらば、此悔みもあるまいもの、坊主頭のすげない顔、兄分に見せる悲しさに、せめて二十歳を越すまでと、鬢を撫顔作り、身躾みが身の敵、お梅に思ひ初められた、是も前世の因果かや、　地　お梅に逢ふて斷り立、縁を切て來ましたら、元の樣に懇にかはいがつて下さるか、　詞　をんでもない事、女と縁さへ切たらば、身に替ても法印樣へ、詫言申して懇せふが、誠縁を切らずば、大師の罰を受ふといふ誓文を立てふか、　地　如何にも誓文立ませふ、サア立て、サア何んと、　地　エ、今方は切らふと思へども、お梅が合點せぬ時は、何としませふ悲しやと、かつはと伏て泣きければ、　詞　そ

●男女破戒　十戒のうちの女淫戒を犯したればなり。

●天狗風　旋風のこと。凡て尋常ならず、不思議の事あれば、凡て天狗の業と昔しは信じたるより、天狗風、天狗礫など種々の名目あり。

れ其心の付くこそは、罰の當つたしるしぞや、　地　はやく出て失ふと、どうと伏し共泣きするこそ道理なれ、　地　其隙に法印、以前の文を取出し、山に置くは穢らはし、持て失ふと投付給へば、耻かしさふにそつと取り、肌懷に入れけるが、　地　男女破戒の御咎め、俄に吹來る天狗風、岩も枯木もどう〳〵〳〵、震動雷電雨霰、天地一つに黑雲覆ひ、長夜の闇とぞ　三重　〳〵なりにける、すは一山の大事なり、不動坂まで追出せと、下僧下僕が小腕引立て、棒よ杵よと犇いたり、さすがよしみの花之丞、これ久米殿、妹が事は氣遣ひさつしやんな、此方の居所知れるまでは、おれが女房に持てやろと、　地　聞も苦しき名殘の山、鬢も髻も引亂かれ、涙亂れて

●お梅に通を失ふ久米が心　久米仙人は和州の人にして、深山に入り木食して仙法を學び、空に騰つて飛ぶを得たまへる故郷なるに、下界に歸り、人の足を以て衣過ぐるに、踏洗ふものあり、其の脛の白きに染心し、忽ち墮落す。久米之助は佛書に見えたり。「元亨釋書」に入りながら、お梅の色に迷ひて山内を追ひ拂はるれば、久米仙人が通を失ひたる事に譬へたり。東京傳作の黄表紙「艷哉女仙人」は、「お梅に通を失ふ久米が心」の一語を採りて滑稽を盡しゝものなり。

目も暗く、さらば〳〵と振返り、泣音もかるゝ鶯や、お梅に通を失ひし、久米が心そ　三重〳〵哀れなる

中之巻

フシ逢ぬ昔の白紙も、忍び重ねて厚紙を、人に裂るゝ横紙に、袖濡紙の　フシ漏れやすき、浮名やばつと塵紙の、　チクリ嵐に〳〵脆き鼻紙や、まだ十七の懐子、フシ名さへお梅は氣もすしや、　地親與次右衛門、いき〳〵として外より返り、お梅が祝言いよ〳〵今宵に極つた、　地今朝吩咐た通り、市介傳九郎鱠をかけ、夏よ雑煮の用意を爲い、竹膳立も奇麗に爲い、聟殿は京烏丸の人なれば、黒椀がよからふ、塗盃は入らぬぞ、年の往かぬ娘

●宿老　町内の年寄役。

●親のこうけん　親の威光を以て壓制すると。親のこうげなどゝもいふ。

じや、土器を三寶に、口取は熨斗昆布、肴は鰯車海老熊野から貰ふた鹽貝があらう、　調ヤ鹽貝の次でに女房共は何處に居ると、フシ嬉がるのも親心、お家樣は中二階に、お梅樣の髪梳てといひければ、二階の口まで駈上り、こりや〳〵宿老殿へ往て談合した、皆内證勝手づくの祝言なれば、廣めは重ねて下つた時、　地今宵盃濟んだらば、娘は最早聟の物、とんと先へ渡いて女夫連で、明日早々上して退いと言るゝと、きほひかゝる親の顔、見るよりお梅は涙ぐみ、急な事いふて下さんす、盃さへ延べて欲けれど、親のこうけん是非なうて、如何なりともと言ました、京上りは先づ待て、氏神へも參りたし、阿呆でも兄は兄、花樣にも知らする筈、

●かすらする　誑すること。

●納戸　衣服調度を納め置く部屋。

●百の口を抜いて置く　舊幕時代金錢を通用するに、金ならば包の儘、錢ならば綫の儘にて渡し、受取るものも一々其の數を攺めざれば、少しぐらゐ錢を減じたりとて當座にては知れざるなり。殊に百綫といへば普通九十六文を以て通用し、丁百を受授するが如きは嘗てなし、されば百の祝儀に九十六文は當然なれど、此の親交は九十六文のうちより更に九文七文づゝ抜いて、百に通用せんとするにあれば、妻女の諌めしなり。

日頃懇切遊ばして、お守よ御符よと、御恩を受たゆうべん樣、お山には未だ外にもと其人の名は言兼て、思ふ邊りをかすらする、フシ 是も思ひの餘りかや、地 母親も打首肯き、チ、それも左樣じやが此樣な事、詞 念比な方へ知らすれば、贐の祝儀のと、厄介かけるが迷惑じや、地 とかく聟御の心次第、サアござれと、納戸へ入れば與次右衛門これ嗅、詞 聟の供の者共、これの内の奴等にも、何がなしに三百宛お引をやる合點じや、つゝこかしの顔でつらりと九文七文づゝ、百の口を抜て置けや、ハテ此方も餘まりな、地 お梅が一世一代に何が惜いぞ、矢張九十六文で、百宛遣て置つしやれと チクリ 連て〳〵納戸に入りにけり、フシ お梅は稚き時よりも、

甘やかされて二親に、我儘言ひしならはしも、心に疵を持たれば、いぶりもならず拗られず、詞 ア、九兵衛は何故遲いぞ、久米樣の返事はと、そろ〳〵表へ出けるが、女子丁稚が口々に、よふお梅樣、地 晩には立聞いたしましよ、京のおか樣にならしやると、嬲らても浮々せず、ア、何言やる、京へ往こやら冥途へ往こやら、知れた事かと門に立ち、坂を見上て居る所へ、久米之介は頰冠り、九兵衛も投首し、辻へ見ゆれば走り寄り、なふよう來て下さんした、文にいふて遣る通り、京の奴めと今夜盃する筈で、妾が氣は今朝からとんと死で居たはいのと、縋付て泣にけり、詞 ヲ、そなたは氣が死んだか、私は叩かれ引摺られ、身も心も死にま

●眞言陀羅尼　眞言にて誦する呪文なり。

●波羅僧揭諦　陀羅尼の句を取りて、腹を立たともぢりたるなり。

●念者　男色の關係者を、互ひに念者といふ。女色にていろといふが如し。

する、地嘘ならこれと手を取て袖から背中がハア調たんと腫てあるはいの、鬢もそゝげた顔も泣た顔じや、地こりや如何ぞいのといり　フシわりも、言はず知らずに泣居たり、地九兵衞不承な銚子にて、エヽ麁相なお梅樣、文を封じ違へて、久米樣の濡文が法印樣のお手に入り、地何が日頃法印樣、眞言陀羅尼讀だ目で、くどくは御見思ひ〻〻と、讀で婆羅僧揭諦を立て、ぼじそあかなる顔付、念者坊のゆうべん樣は、蹈殺すとて熱へさつしやる、一さい起れば二さい起る、お國からは弟の敵じやとやら申して、理屈臭い侍が背打を喰はする、弘法大師御入場八百年以來の、一山の大騷ぎ、飛脚の詮議もあるそうで、私は据つた膳箸も取らずに

●賴母し　賴母し講のこと。數人組合ひ、期限を定め、毎月出金をなし、其の金を闇にて引き、各自利用して期の盡るに終る。又無盡ともいふ。

隱れ居る、其間にお山が荒て來て、天狗殿が鼻を怒らかし、大雨大風霹靂、大事の山を久米之介が、穢したと叩き出されて、フシ斯の體にておはします、地お二人のお蔭で烟草入を落しました、詞中に賴母の懸錢七十四文あつたもの、定て狗賓に摑れたでござらう、地正眞の天狗賴母子じやと、フシぶつくさ言ふも道理なり、地ヲヽ、其樣な事内へ沙汰してたもんなや、山は荒ても崩れても、久米樣に逢へば嬉しい〳〵、こな樣嬉しうないかいの、ちと笑ふて見せて下さんせと、いふても跡先思はれて、フシ泣顔見ゆる不便さよ、親はお梅よお梅よと、門口見遣りて誰じや、詞ヤア久米樣か、九兵衞是は何んとして、呼に遣たい所へ、よふこそ〳〵先